

セシリア・ダイアリー

若谷鶏之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS学園を卒業したセシリア・オルコットは、イギリスの国家代表として多忙な日々を過ごしていた。その慌ただしくも平和で愛おしい日々を綴った、彼女の日記。

目次

Page 1 : 「バレンタイン・クライシス」	1
Page 2 : 「ベスト・イースター・エヴアー」	15
Page 3 : 「マイ・スイート・ライアー」	25
Page 4 : 「チェリー・ツリーズ・メモリーズ」	33
Page EX : 「ゴールデン・タイム」	43
Page 5 : 「ジ・オース・アゲイン」	54
Page EX : 「ノート・オブ・クレア」 前編	68
Page EX : 「ノート・オブ・クレア」 中編	82
Page EX : 「ノート・オブ・クレア」 後編	98
Page EX : 「ノート・オブ・クレア」 完結編	115

Page 1 : 「バレンタイン・クライシス」

IS——インフィニット・ストラトス。一〇年ほど前に生み出されたそれは、女性しか扱えないものだった。世界は女尊男卑の風潮となり、IS操縦者を育成するための学園たるIS学園も、女子高だった。それでも、運命とはとても不思議なもので。女子しかないはずのIS学園で、まるで不思議な因果に導かれたように、わたくし……：セシリア・オルコットと、「彼」は出逢った——。

数多の戦いと悲しみを乗り越えた、その先に待っていた今の平和な日々。平凡だけれど、だからこそ愛おしい毎日を大切にしたいと思い、この日記を書いています。

これから、そのほんの一欠片を、皆様にお見せします——。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

二月一〇日。ロンドン郊外のオルコット邸にて。天気は快晴。

普段は邸の料理人たちが使う広い厨房で、うんうんと唸りながら腕を組み、わたくしは材料とにらめっこをしていた。

「困りましたわ……」

思わず頭に手が行く。もう一四日まで時間がない。

そう、二月一四日はバレンタインデー。イギリスでは、恋人同士がワインなどの贈り物にカードを添えて、愛を確かめ合う日。しかし、日本では女性が男性にチョコレートを渡して、愛情を伝える日としてポピュラーになっている。近年友チョコや義理チョコも一般的になってきていて、女性がチョコレートを渡す意味も変わってきたとは聞かけれど、それでも恋人や好きな人がいる女性にはやっぱり重要な一日でしょう。

……それは、婚約者がいるわたくしにとっても同じ。

「はあ……」

湿っぽい吐息が厨房に漂う。反響するのが却って寂しさを煽った。

わたくしと婚約者の彼は、現在遠距離恋愛中。IS操縦者同士の結婚は、各国の思惑が絡み合つてとても複雑で、なかなか上手く話が進まない。しかもわたくしはイギリス名家の当主で、国家代表のIS操縦者。イギリス政府だけでなく、国際委員会も顔をしかめる始末だった。

それでも、彼は正式に許可が下りるのを望んでいた。誰にも望まない結婚より、皆に望まれた結婚がいいに決まっている。じゃないと、ずっと伝統を守ってきたセシリアの両親や祖先に顔向けできないから、と。そう言つて、彼は今でも日本で職務を行いながら、許可が下りるよう根強く交渉を続けている。わたくしの立場と意思を最大限尊重して、そう言つてくれた彼には、感謝の念を禁じえない。

遠距離恋愛が寂しくない、と言えば嘘になる。でも、これは将来一緒になるために、ほんの少し離れるだけ。何より、お互いのことを想っているからこそ今のだから、わたくしは耐えられる。

その彼が、バレンタインにイギリスに来る。お互い多忙な身故に、滅多に会えないから、会うのも年末年始以来。せつかく彼とバレンタインに会うのだから、何か特別なことはできないかと考えた結果、学生時代のように日本の文化に倣つて、チョコレートを贈ってみようと思ったくしは思い至つたのでした。

そんな理由があつて、今もこうして再会にドキドキと胸を躍らせながら、バレンタインのチョコレートを作っている、というわけです。作ったのはウイスキーボンボン。チョコレートの甘みと、ウイスキーの苦味が醸し出すハーモニーを楽しむ、大人のチョコレート。しかし……。

「……………」

彼への愛の結晶たるチョコレートは、目の前で奇妙な形で固まつてわたくしを見上げていた。どう見ても美味しそうには見えない。

学生時代、それはそれは多くの方の胃腸を苦しめたわたくしですけど、友人たちの協力もあつて、今では料理下手はかなりマシになったと自負していましたのに。自信が揺らぐ。

せめて味くらいは、と試しに一口それを食べてみたわたくしでした

が、すぐにそれを後悔することになった。

「う……!?!」

チョコレート味甘みがどこかへ飛んでいくような、お菓子とは思えないほどの強烈な酒の味。うぐ、と呻きつつ何とかそれを飲み込んだわたくしは、コップに水を注いで思い切り傾けた。この壮絶な酒気は、もはやお菓子に入っただけのいい風味ではなかった。

お、おかしいですわ。何故ウイスキー入りのチョコレートを作ろうとしているのに、チョコレート味のウイスキーが出来上がっているんですの……? しかも固形。ウイスキーかどうかさえも怪しい。

今日ISを動かす仕事が無くて心底助かった。国家代表が飲酒操縦なんて、洒落にならない。

「わ、わたくしそんなに入れましたかしら?」

邸で食事を作る一流の職人に用意させたレシピと、完成品を交互に見比べてみる。同じ材料を使っているのに、何故こんなにも出来栄えが異なるんでしょう。一から工程を見直してみたものの、さっぱり原因が分からない。

分からないなら、それこそレシピを用意した職人に教えてもらうか、最悪買ったものを贈ればいいのだけど、それでは学生時代と変わらない。せっかく彼がバレンタインに来るのだから、料理上手（お菓子も上手）な彼に、ちよつとでも成長したところを見せて、美味しいと言ってもらいたいというのが乙女心だ。

そう意気込んで取り掛かったものの、完成したのはご存知、目の前の異物。

……どうしましょう。もう何日もありますのに。これなら今まで通り教えてもらいながら作った方がいい気も……。

「いいえ、こんなことではいけませんわ!」

ぐつと拳を掲げて自らを鼓舞した。

そうですわ、日本の某有名作品の先生もおっしゃっていました。諦めたらそこで終わりだと。意思を曲げなければ、きつと形になるはず……! ええ、そうですわ、彼もいつも自分の意思で未来を切り拓いてきましたもの。その彼の喜ぶ顔が見られるのなら、これくらいの試

練、乗り越えてみせましょう。

メラメラとやる気をみなぎらせたわたくしは、泡立て器を武器に、またボウルと材料連合軍との戦闘を再開したのでした。

本日の戦果：固形ウイスキー、チョコレート風味（ウイスキーボンボン）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

二月一日。イギリス西方のウェールズIS研究所の休憩室にて。晴れて何より。

……と、昨日あのように書いたものの、結局彼へのチョコレートは完成せず。今日は国家代表としてイギリス西部のウェールズまで出張。日帰りとは言え遠方への移動を伴うので、チョコレート作りはできない。

今日このような予定があるのは知っていましたのよ？ だから、昨日のうちに完成させてしまいたかったのに！

ま、まあ、彼が到着するのは一四日ですから。明後日までに完成させれば十分間に合いますわ。

別に誰が悪いわけでもないの、行き場のない焦りを抱えたまま、こうして休憩室で日記を書き殴っているわたくし。

——ああ、もう休憩が終わってしまおう。このまま仕事を終えて邸に帰る頃にはもう夜でしょう。明日も仕事がありますし、今日はこのくらいで。

本日の戦果：なし

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

二月一二日。一昨日同様オルコット邸にて。天気はやや曇り気味。

今日は国家代表としての仕事は無いものの、オルコツト家の当主として社交界へ参加してきました。

チエルシーが選んだドレスを着て、他家の貴族の方とお話ししていたのだけれど、本当に視線が気になる。中には下卑た目線でわたくしを舐めまわすように見てくる男性もいて、身震いがした。だから露出の高いドレスを着るのは嫌なのに。義務と言ってしまうえば、それまでですけれど。

他にも、女性の方も彼との繋がりを目当てにわたくしに接触してきた。IS操縦者として、今や世界屈指の実力者と謳われる彼の存在は、貴族の令嬢にとっては特上の物件というわけです。まあ美形で有名な方でもありますし、モテるのは致し方ないでしょう。それならわたくしは彼の婚約者であることを誇るまで。

と、少々気分を害される出来事もありましたが、その仕事を終えた今、わたくしを待つのはチョコレート作りのみ。今日も目の前には、わたくしを悩ませる茶色の液体と銀色の器具が待ち構えていた。まだ化粧も落としていなかったけれど、それでも時間が惜しかった。

「では、かかりますわよ」

——覚悟なさい。そう凄んでチョコレートへ襲撃を仕掛けたわたくし。

悪戦苦闘しつつも、しばらくしてチョコレートは出来上がった。

……しかし、出来上がったものの……。

「……………」

目の前にあるのは、幼い子が作る泥団子のようなチョコレート。大きさがまばらで、キレイに丸まらずに微妙に潰れているのが尚更泥のようだ。

……おかしい。わたくしはトリユフチョコレートを作ろうとしていたはずなのに。

一昨日は変に凝ってお酒を入れようとして失敗した。ならば今日は生チョコレートを包むトリユフチョコを作ってみようとして、この有様だった。

一応は、と味をチェックしようと恐る恐る口に入れてみた。

「はう……っ!?」

あ、甘いつ！ 甘いですわ甘すぎますわ！ 何なのでしようこの殺人級の甘さは！

一体どれだけ砂糖を入れればこうなるのかと正気を疑う甘さ。とろけるようなトリュフチョコの口当たりが、却って口の中で甘さを余すところなく暴れさせていた。

悶絶しながらもそのチョコレートを飲み込み、コップに牛乳を入れて飲んだ。牛乳のまろやかさが、何とか口の中の甘みを取り払ってくれた。口直しに水を飲んで、目の前の異物二号を睨みつける。

これはとても彼に渡せたものではない。ここまでの威力があれば、彼を卒倒させることさえできるかもしれない。彼には勿論のこと、甘いものが大好きな女性の方にもお渡しできませんわ。こんなものを口にしたが最後、一日のカロリーが跳ね上がって気がついたらジャパニーズ・レスラー 関 取関になってしまおうでしょう。

「ど、どうしましょう……」

もう時刻は午後一時。ここから片付けをして、化粧を落として、入浴していたら日付が変わってしまふどころの話ではなくなる。

幸い明日の仕事は午後から。しかし、このまま続けていては明日の午後の仕事に支障をきたすかもしれない。明日の午前中に何としても仕上げなければ……。

泣く泣く片付けを始めたわたくしは、明日の午前すべてを賭けることにした。

本日の戦果：激甘泥団子（トリュフチョコレート）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

二月一三日。同じくオルコット邸にて。天気は曇り。明日に雨にならなければいいのだけど。

……誤算でしたわ。まさか、急に仕事が入って午前が潰れてしまうなんて！

チエルシーも粘ってくれていたようだけれど、どうしても言っても折れてもらえなかったようで、結局仕事へ。チエルシーがわたくしに頭を下げてくれたけれど、別に彼女のせいではない。政府からの直接のお願いで、しかも行く先がロンドン市内の保育所と言うのだから、断りにくいのも分かる。

我々国家代表は国のヒーローのようなもの。これからの世界を担う幼い子供たちのためと言うのなら、休暇を削ってでもその子たちに会いに行きましょう。それが、国家代表たるわたくしの責務なのですから。

実際、セシリアお姉さま、と小さな子たちから呼ばれるのは悪い気はしなかった。……もし彼との子供ができたら、こんな感じでしょうか……そんな幸せな想像も膨らんだ。

しかし、そのしわ寄せは、愛する彼へのチョコレート作りに思い切り行ってしまった。

「うう……」

わたくしは、涙目になりながらチョコレートを湯煎して溶かしていた。相変わらず料理下手な自分に泣きそうになったけれど、泣いても笑っても明日はバレンタイン。彼に会うのだから、寝不足の酷い顔は見せられない。溶かして固めるだけのチョコレートになっても、何も用意しないよりはいいでしょう。一応、仕事の合間に市販のチョコレートを買って確保してある。

はあ、どうしてこの茶色の液体はわたくしの思うようになってくれないの？ わたくしはただ、彼に想いを伝えたいだけですの……。

涙が入って今度は塩味のチョコレートができたらたまらない。目を拭いて、へらでチョコレートを混ぜる。

お願いだから食べられる味になって、と祈りながらボウルを混ぜていたときだった。ポケットにあった携帯電話が鳴った。

「あら、電話？」

こんな時間に誰だろう、と一旦手を止めて発信元を見たら……彼だった。

「え、え!？」

びつくりしながらも通話ボタンを押した。一分一秒も惜しいので、携帯電話を肩と左耳で挟んで、右手はボウルを混ぜたままだ。

「……も、もしもし」

『——ああ、もしもし、セシリアか？ 久しぶり』

優しい声色が鼓膜を撫でた。どきりとした胸の高なりが、わたくしに確信させた。

——ああ、彼だ。

安心して、じわりと涙で視界がにじんだ。

「え、ええ、お久しぶりです。お元気でしたか？」

ぐずった声を出さないように細心の注意を払って話しかけた。セシリアこそ、と彼は少し笑って言う。特に疲れたような言い方には聞こえない。体調は悪くないようだった。

普段は英語を話していても、彼と話すときは違う。IS学園で知り合ったわたくしたちの会話は、いつも日本語だった。今ではほとんど話さなくなった日本語は、すっかり彼との専用言語だ。

「それで、どうしてお電話を？」

『予定通りに着きそうだから、それで連絡しようと思って』

「そ、そうなんですの。安心しましたわ」

『今何をしてる？ 時間があるなら、ちよつと話せないか？』

「今ですか？ い、今はもう、寝室で寝る準備をしていますから、お話しできますわ」

と、わたくしはさらりと嘘を言った。今も必死にチョコレートを作っているとは思われたくなくて、彼と話したい一心でついた嘘だった。

そんなわたくしに、彼は『そうか、ならよかった』と、穏やかにそう言った。その声に、またどきりとする。

彼の電話で話す声はいつも落ち着いていて、優しく語りかけるような話し方をする。その声が、わたくしは大好きだった。

変わらない彼の声に聞き入っていたわたくしに、それはそうと、と彼が話題を振った。

『セシリア、明日はバレンタインだな』

「え、ええ」

『何か用意してくれているのか?』

「そ、それは……」

珍しい。彼がバレンタインの前日にそんなことを聞いたことはなかった。何か理由でもあるのでしょうか?

「今年は、バレンタインのチョコレートを、お渡しする予定ですわ」

『ほう、チョコレートか』

「はい、IS学園にいたころ、よくしたものですから……」

毎年毎年、彼にチョコレートを渡そうとする女子の間で戦争のような騒動になっていたのを思い出した。作るだけで一苦労で、彼に渡すのも大変だった。それでも食べて「美味しい」と言ってもらえたとき、すべてが報われた思いがした。

——そう、そうでしたわ。何故わたくしが、こんなに苦労してまで、チョコレートを彼に渡そうと思ったのか。あのときの気持ちをもう一度感じたくて、それで……。

『それで、どんなチョコレートなんだ?』

「え、ええ!」

それはともかく、今は彼との会話。あまり贈り物の中身を聞いたりしない彼だけに、この質問には驚きを隠せなかった。実際明日食べてもらうのだから、答えないわけにはいかない。

しかし、目の前にあるのは、チョコレートの体をなさないペースト状のココアの液体。これを固めても、結局できるのは普通のチョコレートでしょう。何年かお付き合いしましたから原点回帰しましたの、と言うにはお粗末極まる品だ。彼ならこの程度、ささつと何かの片手間にでも作ってしまえるだろう。

どうしましょう。一種考えたのち、ふと頭をよぎる市販の高級チョコレート。買ったもの自体はいいものだから、そちらを説明する方がいいのかもしれない。

「い、イギリスで今流行りのチョコレートですわ。わたくしも食べてみましたけれど、とつても美味しく、それで……」

不自然なまでに早くボウルをかき混ぜながら、それでもその音は絶対彼に聞こえないように、市販のチョコレートの説明讀んだ。

ところが、何も変なところは無かつたはずなのに、彼は楽しみだな、と必死に笑いをこらえて言う。

「……ど、どうして笑いますの?」

わたくしの質問に、彼は『ははは』とついに笑いながら言った。

『いや、料理下手なセシリアのことだから、今も必死にチョコレートを作っているんじゃないか、つて思つて』

「ち、違いますわ! 馬鹿にしないでくださいな!」

むきになって言い返す。しかし、顔はと言えば完全に凶星を突かれて真っ赤になっていた。厨房に誰もいないのが幸いでしたわ……。

『そうか?』

「そうですわ! もうIS学園にいたころの料理下手なセシリア・オルコットは卒業しましたわ!」

『……まあ、そういうことにおこうかな』

特別にな、といつになく意地悪に言う彼。もう、と拗ねて言うわたくしに、彼は悪い悪い、と軽い口調で謝った。

むつとしたわたくしは、会えない間に聞いた彼の噂を追及することにした。

「そんなことを言うのでしたら、わたくしにだって聞きたいことがありますわ! よく聞きますのよ、あなたが日本の某女優の方からアプローチされている、とか!」

『い、いや、その話はだな、ほら……』

「言い訳無用ですよ! さあ、何をされましたの! 洗いざらい吐いて——……あ、あら?」

おかしい。わたくしの声が二重に聞こえる。電話の音があちらのどこかに反響しているのでしょうか。空港にしては静かだ。

一瞬考えたわたくしが追及をやめた瞬間、今日一番の甘い声が、電話から届く。

『——セシリア』

「ッ………」

どきん、と胸が飛び上がった。口づけをする前のような、わたくしへの愛を伝えてくれるときのような、そんな甘い甘い囁き。

『今から一つだけ、問題を出す。それが本当か嘘か、見破ってみて欲しい』

「は、はい………」

『じゃあ、言うぞ。……問題。俺は今、日本にいる。本当か嘘か、どっちだと思う？』

「ほ、本当のことでしょう？ だって、着くのは明日の朝だと………」

そうか、と彼は満足げに囁いた。してやったりと言わんばかりの彼の口ぶりで、まさか、とあることに思い至ったわたくしだけれど、少し遅かったみたい。

『じゃあ、答え合わせだ』

すっかり頭が混乱している頭の中に、彼の声が響く。

「——あ……っ」

——刹那、わたくしは、後ろから彼に抱きしめられていた。

ぎゅっと抱きしめられて、愛用の携帯がガチャ、と厨房の床に落ちた。ボウルを混ぜていたはずの手も、完全に止まる。

「……寝室で寝る準備をしてるって？ 随分と嘘つきだな、セシリアは」

ついさっきまで聞こえていた甘い声で、直接耳元で囁かれた。

顔は、見ていない。それでも、わたくしを包むこのぬくもりが、優しいその声が、肩から見える腕の先にある見慣れた携帯電話が、抱きしめられた強さが、触れ合った頬が、あの人だと告げていた。

そう、間違えようがない。この方は、将来を誓い合った婚約者で、わたくしが誰よりも愛する彼なのだ——。

涙がわつと溢れてきて、ふき取ったはずの雫が頬を伝う。

「あ、あなただって、人のことは言えませんか……。とんだ大嘘つきではありませんか！」

非難するような言い方だけど、会えた嬉しきでまったく切れ味がな

い。彼はそうだったなと笑って、抱きしめた腕を解いて、わたくしの目元の涙を指で拭った。

向き合った彼は、以前よりも少し背が伸びたように感じた。もう二十歳も過ぎていてというのに、これでまた身長差が広がってしまった。学園を卒業してからすっかり板についたスーツ姿も、よく似合っていた。

ゆっくり彼に身を預けたら、いつものように彼は優しく抱きしめてくれた。変わらない広い胸板にすっかり安心して、頭をこつんと彼の胸に乗せた。

「……いつ頃、こちらに？」

「ついさっきだ」

わたくしが尋ねると、彼は種明かしをしてくれた。

彼曰く、昨日早く仕事が片付いてしまったから、早めの便でイギリスに来たのだという。でも、普通なら彼が到着したときは、チエルシーが教えてくれるのに。

「で、ですが、チエルシーからそんなことは一度も……」

「チエルシーさんには、黙っておくようお願いしたんだ。せつかくだし驚かせてやろうかと思ってな」

「チエルシー……」

なるほど、チエルシーも一枚噛んでましたのね。今頃チエルシーがくすくす笑っているのが想像できて、彼女に対する減給を検討するわたくしだった。

すっかり出し抜かれてしまったけれど、今こんな幸せな気分を味わえているのだから、良しとしてあげよう。

「……で、セシリア。これは？」

「あ……」

彼が調理台の上で放置されていたチョコレート未満のペーस्टを指差す。

証拠を前に、わたくしは正直に話さざるを得なかった。昨日と三日前にできた恐ろしい何かについては伏せつつ、作ろうと頑張ってみたが、うまくいかなかったことだけを話す。

わたくしが白状し終わると、彼はまた笑い始めた。……ひどいすわ。

さっきの指摘もやけに具体的だと思っていましたの。見ていたからですのね、納得しましたわ。

「ご、ご心配は無用ですわよ。ちゃんと用意しておりますから！」

庇うようにボウルを掴んだ手を、彼がぐつと掴んだ。

「……いいや、俺はこれが食べたい」

「そ、そんな……！ い、嫌ですわ！」

こんな恥ずかしいものを彼にあげるだなんてとんでもない。わたくしが必死に訴えたら、彼は「じゃあ」と一つ提案をした。

「一緒に作ろうか。——こうやって」

「あ……！」

「これなら、失敗しないな？」

わたくしを調理台の前に立たせてへらを持たせた彼は、後ろから抱きしめるようにわたくしの手を持って、ボウルをかき混ぜる。

力強い腕の動きに導かれるように、ボウルの中でさっきまでの停滞が嘘のようにチョコレートが混ざっていく。

「全体にムラがないように、混ぜていくんだ」

「は、はい……」

顔が赤い。彼の息が首筋を撫でる度、わたくしの体はぴくりと震える。彼のぬくもりに包まれたまま、チョコレート作りは進んだ。

……ちゃんと彼にチョコレートは用意できなかったわたくし。それでも、頑張ったご褒美はしつかりもらっている。

ずるいかしら、なんて思ったりもしたけれど。彼が楽しそうに微笑んでくれるから、それでいい。

——でも、散々からかわれたから、最後に仕返しをしなくてはなりませんわね。

「そろそろ、味見をした方がよろしいかしら？」

「ん？ ああ、そうだな」

じゃあ、とへらについたペーストをすくおうとした彼の手を止めて、そのへらのチョコレートを一口舐めた。

チョコレートが甘みが広がったのを感じて、体を反転させて、すぐ目の前にあつた彼の唇へと……自分の唇を重ね合わせた。

「ん——っ!?!」

びっくりしたのか目を丸くする彼。逃がさないように、首に手を回して、彼にしつかり味見をさせた。

意地悪でよくモテる彼には、これくらいがちようどいいでしょう。甘すぎて、一度味わったら忘れられないくらいなの、それこそ、わたくしのことしか考えられなくなるくらいなの、とびっきりの甘さが——。

わたくしが唇を離すと、彼はやってくれたな、と苦笑した。

「ふふん、今までの仕返しですわ」

「……一本取られたよ」

照れたように笑う彼に愛おしさが込み上げて、わたくしはもう一度彼に口づけた。

本日の戦果：普通のチョコレート。彼との愛を添えて——。

Page 2 : 「ベスト・イースター・エヴァー」

三月二〇日。ロンドン郊外オルコット邸にて。天気は快晴、いいニュースと合わせて最高の一日になった。

仕事が終わわり、食事を終えたわたくしのもとへ入った一本の電話。愛しの彼からの電話というだけで嬉しいのに、さらに嬉しいニュースが。

「えっ？　そ、それは本当ですか？」

『ああ。次の復活祭イースターに休暇が取れたから、そっちに向かおうと思う』

「まあっ！　嬉しいですわ！」

彼は電話の向こうだと言うのに、満面の笑顔で返事をしたわたくし。

こうして彼と話していること自体、わたくしにとってはこれ以上ないご褒美なのに、最高に嬉しいニュースまで届いたのだから、わたくしの機嫌は最高潮の一言だった。

『悪い、そろそろ戻らなきゃいけないな。……切つていいか？』

「はいっ、一週間後、お待ちしておりますわ」

『ああ。……じゃあ、おやすみ』

いつもの優しい声で囁かれて、わたくしはどきりと高鳴った胸の鼓動を感じた。おやすみなさい、と小さく返すと通話が切れて、携帯電話はその役目を終えた。

はあ、と熱っぽい吐息が漏れて、携帯電話をベッドの横の小棚に置いたわたくしは、この気持ちを忘れないうちにと日記を書き綴っています。

復活祭イースター。キリストが磔にされたあとに復活したことを祝う日で、日本では馴染みがない名前だけれど、キリスト教圏では有名な祝日で、クリスマスと並ぶ一大イベントだ。街中が色とりどりの卵によって飾られる。

毎年日にちが変わって、今年は三月二七日がそれにあたる。その日に、彼がイギリスに来てくれるという。予定では、復活祭当日と翌日

も滞在してくださいさるそう。二日も一緒にいられるなんて、これで嬉しくないわけがない。

ただし、手帳を開くと……二七日、二八日にはしつかりと仕事の予定が入っていた。書いたのは他でもないわたくし。自分の字だったけれど、無性に憎らしく感じる。

そう、問題はわたくしの側にある。去年の復活祭は休みだったけれど、今年はそうではなかった。つまるところ、わたくしが真っ先にすることと言えば、政府にかけあって何としても二七日とその翌日を休暇にもらうことだった。

部屋のベルを鳴らして、優秀な秘書にして親愛なる幼馴染、チエルシー・ブランケットを呼び出した。程なく、部屋のドアがノックされた。

「お呼びでしょうか、お嬢様」

「ええ。入ってよろしくですよ」

失礼します、と一礼と共にチエルシーが入室した。親しき仲にも礼儀あり。こういった礼節をきっちり守るところも、わたくしが彼女に絶大な信頼を置く理由の一つだった。

「ご苦労様、とチエルシーを労ってから、お願いがあるのと要件を伝えました。」

「お願い、ですか？」

「ええ。明日、政府と交渉しますわ。チエルシーにはそのコンタクトをとっていただきたいのです」

「承知しました」

すべてを理解したような一言だった。わたくしもそれ以上は何も言わず、来る明日からの戦いに備えたのでした。

☆ ☆ ☆ ☆

三月二一日。国立IS研究所休憩室にて。天気は雨、ついてないですわ。

今日は激動の一日でしたわ。本日の業務に加え、休暇のための交渉まで加わったものですから。そのお陰で今日は研究所に泊まり込み。まあそれも、彼との休日を勝ち取るために必要なこと。今日の分の美容ケアは明日以降でリカバリーするといたしましょう。

復活祭当日のわたくしの予定は、国内の競技場での模擬戦となっている。政府としても、国家代表としてのわたくしの実力と人気を高く評価してくれているようで、わたくしの参加によってもたらされる広告効果は捨てがたいでしょう。光栄なことですけど、わたくしにとっては彼との休日の方が大事だった。

明日からもハードな日々は続くでしょうし、今日のこれくらいで筆を置くとしましょう。おやすみなさい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

三月二三日。オルコット邸にて。天気は……どうだったかしら、覚えていませんわ。

……はあ、やっと片付きましたわ。結局昨日も忙しくて日記をつける暇さえありませんでしたから。

——ああ、眠いですわ。三日間の疲れが一気に襲ってきたような感じ。それでも、何とか休暇を勝ち取れたので——（机上で寝てしまっていたようですわ、途中でごめんなさいね。〈三月二四日追記〉）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

三月二四日。オルコット邸にて。天気は晴れのち曇り……とは言っても、起きたときには既に曇っていたけれど。

……おはようございます。起きたら午前十一時。こんなに朝遅く起きたのは久しぶりですわ。

昨日は疲れのあまり、机の上で寝ていたようで。夜中にチエルシー

が毛布をかけてくれたおかげか、特に体調を崩すことなく翌日を迎えることができたのは幸いだ。とは言っても変な体勢で寝てしまったので、腕や腰がとても痛い。

そんな代償があつたにせよ、とにかくにも復活祭当日と翌日を休暇とすることはできた。緊急の呼び出しがあつた場合は応じること、そして来年は必ず参加することが条件として付け加えられたけれど、それはまったく構わない。

何故なら、来年のこの時期までには、結婚の件も何とかしてみせると、彼が言ってくれているから。来年はわざわざ休暇を取らなくても、一緒にいられるように。そのために、わたくしも全力を尽くすつもりでいる。

今日は午後二時に出勤と決まっている。のろのろとブランチを胃に入れたあと、出勤までの僅かな時間で日記を書くしかない。

……はあ、今日も特に内容があることは書けませんでしたわね。チエルシーが急かすので、このくらいでやめておきましょうか。では。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

三月二五日。夕食後のオルコット邸にて。天気は晴れ、絶好の買い物日和でしたわ。

今日は仕事を終えたあとにチエルシーと買い物をしてきました。今日のチエルシーは、オルコット家当主の筆頭メイドとしてではなく、セシリア・オルコットの無二の幼馴染として付き添ってくれた。公私に渡ってわたくしの傍にいてくれる彼女に、どれだけわたくしが助けられているかは、言うまでもない。

「お嬢様、このカーディガンはいかがですか？」

「ええ、デザインは良いのですけれど、少々サイズが」

「惜しいですね……」

そんな他愛のない会話をしながら、街中を歩いたわたくしたち。最

近あまり買い物できていなかったから、その分とばかりに二人でたくさん服を買い込んだ。

主に新作の夏物を揃えていたけれど、明後日のためにいくつか春物のアイテムも買ってみた。彼が何と言ってくれるか、とても楽しみですわ。「似合ってる」なんて、ありきたりなことを言うでしょうか。もしそれなら、気の利かない人ですわね、なんて言って、ちよつと膨れて拗ねてみようかしら。機嫌を損ねたと思ってオロオロする彼が見られるかもしれない。

くすりと笑いが溢れて、わたくしはねえチエルシーと、隣のチエルシーに問いかけた。

「誰かを想う気持ちって、素晴らしいと思わない？」

例えその人がいなくても、その人と過ごした想い出が、その人との時間を思い出させてくれる。会えなくても、会えない分だけ想いは強くなっていく。

わたくしが空を見上げていたら、チエルシーはああ、と感慨深そうに呟いた。お嬢様は、大変お美しくなれました、と。

「わたくしが？」

「はい。恋を知り、愛し愛される生涯の伴侶を得て、見違えるほど美しく、そして強くなられました」

幼馴染の賛辞に、少し頬が赤くなった。

幼くして両親を亡くし、家のために身を捧げてきたわたくし。財産を、誇りを、そして使用人たちを守るため、わたくしは大人たちと戦ってきた。チエルシーは、それが心配で仕方なかったという。幼いわたくしの心が、いつか限界が来て壊れてしまうのではないかと。

ですが、とチエルシーは続けた。

「お嬢様は、大変強いお心の持ち主でした。死に物狂いの努力でオルコット家をお守りになり、苦境に負けない強さをお持ちでした」

それでも、わたくしが失ったものがあつたという。それは——笑顔だと、チエルシーは言った。

「いつも私共に笑いかけてくださるお嬢様の笑顔が失われたこと。それが私どもにとって、どれほど悲しいことであつたか——」

当時を思い出したのか、チエルシーの表情が曇った。しかし、とチエルシーは言う。

「お嬢様は再び変わられました。あの方と出会って、お嬢様はまた私どもに笑顔を見せてくださるようになりました」

あの方、とは彼のことでしよう。

そう、彼と出会って、わたくしのすべては変わった。そして、彼は教えてくれた。恋で人は変われることを、誰かを愛する喜びを。

「私は、お嬢様ほど美しいお方を知りません。美しさと、強さと、そして愛を包み込んだお嬢様の笑顔の前には、世のどんな美女であっても敵いはしないのです」

わたくしより背が少し高いチエルシーは、わたくしの目を優しく見下ろして言った。

「私は、そんなお嬢様にお仕えできることを、心から誇りに思っています」

彼女の優しい微笑みに、わたくしも自然と笑顔になるのだった。

誇りに思う、とチエルシーは言った。それはわたくしもそう。チエルシーのような素晴らしい女性が支えてくれるから、それに恥じない立派な当主でいたいと思える。喜びを倍に、悲しみを半分にしてくれたのは、他ならぬ彼女と……そして、邸の人々のお陰だった。

恵まれていきますわね、わたくしは。わたくしの傍にいてくれる彼女の存在の大きさを、改めて強く感じた一日でした。

☆ ☆ ☆ ☆

三月二七日。空港からの帰り道、リムジン内にて。天気は快晴、言うことはありませんわ。

朝から落ち着きのない一日が始まりました。いつも通りの時間に起きたのは良いものの、結局どの服を着ていくか時間ギリギリまで悩んでしまった。

やっと着ていく服が決まったら、今度は化粧をして、それからチエ

ルシーを伴って邸を出て。空港に着いたあとも、彼がターミナルの出口から出てくるまでそわそわして落ち着かない。

お嬢様、とチエルシーに声をかけられたら、「は、はいっ!？」と声が裏返った。わたくしの反応が面白かったのか、くすくすと笑い混じりに、「そんなに緊張されなくても、大丈夫です」とチエルシーが言う。

「何も特別なことは必要ありません。普段通りのお嬢様でいれば」
うう、もう一〇代でもありませんのに……。恥ずかしい。

必死に自分を落ち着かせようと、大きく深呼吸したときだった。お嬢様、とチエルシーが一言呼び、ターミナルの出口を示した。

見上げた先にあつた光景。その瞬間、わたくしは――。

「あ――」

呼びかけようとしたけれど、声が出なかった。考えるより先に、足が前に出る。

彼は、わたくしに微笑んでいた。軽く手を挙げて、その端正な顔に柔らかな微笑を浮かべ、手を振っている。いつものスーツ姿ではなくて、初めて見る私服を着て。

今日のために、選んでくれたのかしら。そんな些細な問いかけはどこかに追いやって、ただわたくしは彼の元へと駆けた。

満ちていた緊張も、彼の姿を見てすべてが吹き飛んだ。ただただわたくしは、彼の元へと駆けた。

彼がすぐ近くで手を広げて待っている。わたくしは、その胸に躊躇いなく飛び込んだ。優しく抱きしめられて、わたくしも彼の背に手を回す。

「――ただいま、セシリア」

優しい声が響き、胸がぎゅつと締め付けられた。あたたかな彼の匂いに包まれて、わたくしはゆっくりと「はい、おかえりなさい」と答えた。

周りの人が注目していても、チエルシーが見守つていても構わない。ただ心の赴くまま、わたくしは彼と抱き合っていた。

――ああ、揺れるから字が書きにくいですわね。車の中で書いているから仕方ないのですけれど。

それでも今日は書く時間がないから、今書くしかない。先ほどの素晴らしい時間を日記に書かないのは惜しいですし。

彼は今、フライトの疲れもあつてか隣でうとうとしている。膝枕でもしてあげようかとも思ったけれど、それでは日記が書けなくなってしまうのでお預けということ。ごめんなさいね。

今日これからの予定は、デートをして、食事をして、と特に変わったことはしない。それでも、彼がいるだけ今日と明日は特別な日にな。

「……楽しみですね」

わたくしはそう言つて、いつの間にか夢の世界へ旅立っていた彼の頬にキスを落とした。

彼はもぞもぞと体を捻つただけで、まるで起きる気配はない。寝ぼすけの彼に笑いかけて、わたくしは日記の筆を置いた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

三月二八日、オルコット邸寝室にて。天気は、言うまでもない。

翌朝。庭の鳥が鳴く声が聞こえる中、くすぐったい感覚がして、わたくしは目を覚ました。

穏やかなまどろみに包まれてゆっくり目を開くと、彼の胸元が目映った。どうやら彼が髪を梳いていくれているようだ。慈しむようにわたくしの髪を撫でるその手はとても心地よくて。目は覚めてしまったけれど、せつかくだからと狸寝入りをすることにした。

しかし、彼と自分が互いに糸纏わぬ姿であることを認識した途端、昨夜のことを思い出して顔がかーつと赤くなった。顔を隠すように、寝ているフリをしながら彼の胸元に顔を押し当てた。

彼は気づいたでしょうか？ おはようとも言われませんし、これはセーフ？ 彼はと言えば、変わらずに髪を撫でてくれている。まあ、セーフということにしておきましょう。

——わたくしは今、至上の幸せの中にいる。それは疑いようのない

本心。最愛の彼と愛を確かめ合って、彼に包まれて朝を迎える……これが幸せでないと言うのなら、きつとこの世に幸せなんてない。

けれど、その大きすぎる幸せは、時折わたくしを不安にさせる。こうして彼と穏やかな朝を過ごす度、普段離れて暮らしていることを強く意識してしまう。

わたくしが遠距離恋愛が一番辛いと感じる瞬間は、会えないときではなくて、こんな幸せな一瞬だった。「今度はいつ会えるの？」——なんて、意地悪な疑問が幸せの裏に潜んでいる。

それでも、わたくしはその不安に負けるわけにはいかない。どんなに不安であっても、彼を信じ、己を信じ、未来を掴み取ることに。それが、わたくしを愛し、「結婚しよう」と言ってくれた彼への最大の恩返しだと、わたくしは思っています。

いつか、この特別な朝が当たり前になるように。いつか、この幸せな一日が平凡な日常だと思えるように——。そのために、彼とわたくしは、世界と、そして権力と戦い続けていく。

「——約束する」

不意に、鼓膜に彼の声が響いた。独り言のつもりで言っているのかもしれない。

「必ず、皆に祝福される幸せな結婚式を、君にプレゼントする」

力強く、彼は言った。心の中の一抔の不安さえどこかへ消え去って、わたくしの心は希望と活力に満ちた。

その言葉だけで、わたくしはきつと何年だって待てる。彼がわたくしとの約束を破ったことは一度もない。その彼が必ずと言っているのだから、それ以上に信頼できることなどないのです。

「だから……もう少しだけ、待っていて欲しい」

——ええ、勿論ですわ。心の中でそれに答えた。

そう、わたくしは彼の婚約者。彼との未来を信じ、強く今を生きる。その決意を新たに、わたくしは彼の体温に身を委ねた——。

「……それで、いつまで寝たフリをしているつもりなんだ？ 俺のお姫様は」

……気づいてましたのね。この口ぶりだと、最初からでしょうか。気づいた上で、ずつとわたくしの様子を伺っていた、と。相変わらず意地悪な人ですこと。

わたくしはくるん、と体を反転させて彼に背を向けた。

「さあ、何のことでしよう？ あなたのお姫様は眠ったままですわよ」
はは、と笑いながら、彼は後ろからまた抱きしめてくる。どうしてだ、と彼が聞くので、拗ねたフリをして彼に言う。

「明晰なわたくしの婚約者なら当然ご存知のはずですわ。おとぎ話のお姫様が、王子様のキスで目覚めることくらい」

それくらい常識でしてよ、なんて挑発してみる。ちよつとした意趣返しのもりだったけれど、大胆だったかしら。

彼はまたくつくつ笑いながら、わたくしの肩にぐつと力を入れて、上を向かせた。それから、目を閉じたままのわたくしの頬をそつと撫でて、優しく口づけた。

朝の少しかさついたキスの感触が、逆に昨夜の情熱の深さを伝えてくれるようだった。数秒重なった唇が離れたとき、お約束通り、王子様のキスを受けたわたくしは、ゆっくり目を開く。

「おはよう、セシリア」

ぼやけた視線の先で、彼は微笑んでいた。

「……はい、おはようございます」

わたくしは、ありつたけの愛を込めて彼に笑いかけた。どこか馬鹿馬鹿しいやり取りに可笑しくなって、二人で笑い合ったら、離れた唇はもう一度重なった。

復活祭の翌朝。昨日のお祭りの熱は、冷めるどころか、まだまだ熱くなる模様です。

四月一日、ロンドン郊外オルコット邸にて。天気は快晴、言うことはありませんわね。

今朝起床してニュースを見てみると、突飛な報道が流れていた。内容はというと、「空飛ぶ海老が発見された！」というもの。映像では、まるで水中にいるかのような動きで海老が空中を跳ねていた。

そんな馬鹿な、とわたくしは当然思ったのですが、番組もキャスターも大真面目に報道していたから、本当にそうなのかと思い始めたところで、今日が四月一日であることに気づいた。

四月一日と言えばそう、今日はエイプリルフル。一年に一度、嘘をついても良い日だった。午前中についた嘘が午後でネタばらしされるというケースがメジャーで、一日の午前のふざけた報道や虚言も、午後にはジョークでしたと笑って終える。しかし、毎年毎年ニュース番組までもが大真面目にふざけるので、つい本当なのかと毎年のように騙されてしまうわたくしだった。

……そういえば、十年ほど前のエイプリルフルで「男性がISを動かした！」なんていう報道があった気がしますわね。そのときばかりはありえない、と嘘を即座に見破って一蹴したわたくしだけではない、まさか、その数年後にそれが本当になるなんて。今となっては、嘘の報道ではなかったのかもしれないとさえ思う。だって、そんなことはわたくしと彼が出逢えたことに比べればほんの些細なことだから。彼だけではない、今のわたくしを形作る素晴らしい人々との出逢いは、何億何万という巡り合いのほんのひとつの奇跡が重なり合った結果だ。そうして考えてみると、この世界でありえない出来事なんてないのかもしれないと思ってしまうわ。

……閑話休題。エイプリルフルを賑やかすニュース・ジョークを目にしたわたくしは、いつものように日課をこなし始めた。

「お嬢様、本日の予定ですが……」

シャワーを浴びて夜着から着替え、朝食を摂るわたくしに、いつも

のようにチエルシーがスケジュールを確認しながら連絡してくれる。

今日の仕事内容も普段と大差はなかった。出勤前に行く家の各種執務に加えて、研究所での勤務、市内の施設への派遣。ひとつひとつ頭で確認しながら、段取りを整えていたわたくしだったけれど、その中に信じられない仕事が入り混ざっていた。

「――最後に、国立第一アリーナにて、フランス代表シャルロット・デュノア様との模擬戦が予定されています」

「は、はい？」

思いがけない名前が飛び出し、ナイフとフォークをぴたりを止めた。

「え、ええっ!? シャルロットさんと!?」

驚きのあまり声を上げてチエルシーの方を振り返ってしまった。

「き、聞いていませんわ!」

「非公式な模擬戦のため、外部への情報漏洩を警戒してのことかと」

「そんな……!」

シャルロット・デュノア。IS学園にいた頃の同級生で、在学中は共に戦い、そして鎬を削った戦友であり親友であった。卒業後はフランスの国家代表になり、実家であるデュノア社の開発部に所属している彼女。今でも公私に渡って親交が深いシャルロットさんだけれど、今日模擬戦を行うだなんて本人からはおろか政府からも一度も聞いていなかった。仮にも国家代表同士の模擬戦なのだから、政府が間に入らないはずはないのに。

確かにフランスとは海を隔ててすぐですから、移動も一日で済みますし実現不可能ではないでしょうけれど……。そんな予定があるなら皆教えてくださってもよろしいのではなくって? もしかしてシャルロットさんはサプライズのためと黙っていたのでしょうか。

「チエ、チエルシー。それは本当ですか?」

もし実現するのなら、シャルロットさんとの模擬戦なんて本当に久しぶりのこと。もし、今日シャルロットさんとの模擬戦があるなら? 心躍らないわけがない。あのシャルロットさんと、学生のとときのようにまた試合ができるのだから。ああ、会ったらどんな話をしようか

しらなどと早くも皮算用を始めてしまっていたわたくしでしたが。

「はい、お嬢様。嘘です」

残酷なまでに、にこりと笑顔で、さらりとチエルシーは言った。

「申し訳ありません。今日はエイプリルフルですから、つい」

……ええ、そんなことだろうと思いましたが。ええ、分かっています。チエルシーの言う通り、今日はエイプリルフルです。騙されてなんかいませんわ。ええ、勿論ですわ。

よく考えれば、いくら旧知の仲でも国家代表同士の模擬戦が突然今日連絡されるはずがない。メディアから一切そのような話を聞かなかったことからして、嘘だということは簡単に見抜ける。チエルシーの嘘にまんまと引っかかって赤面し、それを誤魔化すようにわたくしは朝食との格闘を再開した。大嘘つきのチエルシーはというと、傍で控えながらも絶えずくすくすと笑っていた。わたくしがあまりにも綺麗に騙されたのがよっぽど面白かったようだ。

ジト目で抗議したら、「失礼しました。お嬢様は素直な方でいらつしやいますから、わたくしも大変騙し甲斐があります。反応も完璧です」とはチエルシーの弁。

……チエルシー、わたくしたち気心知れた幼馴染ですけれど、一応メイドと主人という関係なのだから相応の慎みというものがあってもよいのではなくって？ ……などと、わたくしは普段は思いもしない不満を内心ぶつぶつ唱えていた。……言葉の綾ですわよ？ チエルシーとの距離感は、今までもこれからもこれがベストですわ。

そんなこんなで今日の朝は過ぎていき、仕事へ向かう時間となった。服装と化粧を整え、リムジンに揺られ仕事場へ向かった。

「では、お嬢様、行ってらっしゃいませ」

いつも変わらないチエルシーの見送りに、「……行ってきますわ」と少し膨れながら、わたくしはお仕事へと向かったのです。――

休憩時間だどこまでですわね。帰って付け足すといいたしましう。

では、お仕事を終えてから、また。しばしお待ちを――マイ・ダイアリー。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

さて、やっと日記が書けますわ。いろいろあったから、書き残しておきたいですわね。

スケジュール通り、仕事を終えて邸に帰ったわたくしです。食事は済ませてきたから、あとは入浴と体操、お肌のケアをすれば今日は就寝時間まですることがない。少し乾燥していますし、いつもより入念にお肌のケアをさせていただきましたわ。(わたくしももうにじゅ……二十歳を越えましたから、お肌のケアは死活問題ですわ。人間二十歳を越えたら老化と言いますし?)

結局、今日は邸を出て仕事をしている最中にもジョークをもらい、同僚に何度も騙されてしまった。その都度新鮮なりアクションを披露してしまい、チエルシーのときのように笑われたのは言うまでもない。「騙して楽しい」との不名誉な誉め言葉もいただきましたし、今後はもつとクールな態度で職務に当たる必要があるかもしれませぬわね!

「……もう、エイプリルフルなんて嫌いですわ」

「あはははははっ、そんなことがあったんだね」

フランス代表シャルロット・デュノアさんは、笑いながらわたくしの愚痴交じりの近況報告を聞いていた。

「チエルシーだったらひどいでしょう?」とわたくしが尋ねると、シャルロットさんは「確かにねー」と相槌を打つ。

「でも、箒とか鈴と模擬戦って言われたら流石に嘘だつて分かるけどさ、僕とつて嘘つかれたら、ちよつと本当かなって思っちゃうよね」

このご時世、パリとロンドンなんて片道数時間ですものね。シャルロットさんは、うんうんとテレビ通話越しに頷いていた。画面に映る彼女は、学生の頃よりもぐつと大人びていて、写真で見るよりも綺麗に見える。

仕事が付いたあと、今朝の一件もあってどうしてもシャルロットさんとお話がしたくなり、電話をしてみました。運よくシャルロット

さんも予定がなかったらしく、通話する時間を作ることができた。お互い多忙な身、こうしてプライベートにお話しできる機会ができたことは貴重だった。

久しぶりに話すせいもあって、シャルロットさんから話題は尽きなかった。日々の仕事のこと、家族のこと、そして恋のこと。それぞれ学生時代とはまた違った思いを抱えて、それらを少しずつ整理しながら生活しているとシャルロットさんは言った。確かに、以前のシャルロットさんは穏やかな笑顔の中で、どこか影のある表情を隠していたように感じていた。それが何であつたか、わたくしにも何となく想像はついていて、いつかそれが晴ればどんな表情でシャルロットさんは笑うだろうと思っていた。それが完全ではないにせよ晴れた今、目の前に映るシャルロットさんの笑顔は本当に眩しいと感じるので

す。

「ねえセシリア。エイプリルフルで思い出したんだけど、僕、嘘って聞いたらどうしても浮かんでくる人がいるんだよね」

……ええ、わたくしも浮かんできますわ。そうわたくしが苦笑したら、シャルロットさんは「じゃあ、せーので発表ね」と言うので、シャルロットさんの声に合わせて名前を呟くと、二人の声が見事に重なった。ぴたりと——彼の名前だった。

「ふふっ、やっぱり」

婚約者のセシリアもそう思うんだね、と笑顔のシャルロットさん。そう、わたくしも嘘つきと聞いて真っ先に思い当たるのは、わたくしの最愛の婚約者である彼だった。

彼は嘘つきな人だ、とわたくしは思う。まるで真実であるかのようにあつさり、さりげなく嘘をつけて人を納得させてしまう。嘘のつき方と中身が絶妙で、あまりに自然だから、周りの人間は何も疑わずに信じてしまう。

でも、彼は嘘つきであつても軽薄な人間ではない。彼の嘘は……いつも誰かのためにつくものだから。彼は、優しい嘘つきなのです。彼は目的があるとき——誰かを護るためなら、誰かを騙すことは躊躇わない。例えそれが、彼が護りたいと願う本人であつても。その結果、

その人から憎まれようとも。

——そう、彼がわたくしを戦いから遠ざけようと、一度別れを告げられたときもそうだった。彼の優しい嘘に守られ、それに怒り、悲しみ、見事に彼の嘘に騙されはしたけれど、最後は彼の嘘の裏側にある優しさと本当の想いに気付けたから、わたくしは今こうして彼の婚約者として生きている。だから、いつも誰かのために優しい嘘をついて悪者になる彼を、わたくしだけは理解してあげたいと思うのです。

「セシリア、彼とは上手くやれてる？」

「ええ、勿論ですわ。たまにしか会えないのが、寂しいですけど」

「そうだね……でも、一緒になるため、だもんね」

わたくしははい、と笑顔で答えた。シャルロットさんはうん、と満足げに答えた。

シャルロットさんや、同級生の皆に見守られながら、わたくしと彼は将来へ向けてやるべきと思ったことをしてきた。それがいつになるかはわからないけれど……いつか彼と結ばれることが叶った日には、お世話になった分だけ、皆さんに幸せな姿を見せたいと、わたくしは思っている。

そのあともいくつか話題があっただけれど、もうこんな時間だね、とシャルロットさん時計を見て呟いたのを皮切りに、今日のお電話は終了ということになった。

「ごめんね、僕ももうちょっと話したかったんだけど……」

申し訳なさそうにシャルロットさんは言う。そんな、とんでもありませんわ。突然お電話したのはこちらですのに。

「じゃあ、今日は切るね。二人の結婚式には絶対行くから！」

「ええ。進展があったら、また改めて皆さんに報告いたしますわ」

おやすみなさい、と就寝の挨拶を交わして、わたくしは通話終了のボタンを押した。長いようで三〇分もない短い通話だったけれど、久しぶりに聞く親友の声で、元気が出た気がした。

シャルロットさんとお話したら、他の皆さんともお話しなくなりましてわ。一度、アポを取ってお電話してみようかしら。そのときにできれば皆さんが揃う日にちも決めて、どこかで食事するのも良いかも

しれませんわね。普段こういうことは、鈴さんがセッティングしてくれていますけれど、今回はわたくしが何かしてみましようか。

明日のお仕事について考えることが沢山あるのに、つい楽しいことを思いついてしまって、そちらにばかり思考が行ってしまおう。まあ、お仕事のことばかり考えていては気が滅入ってしまいますし。たまにはこういうのも良いでしょう。

手帳を見ながら、ああすればこうすればと考えていたときです。

「——あら？」

携帯電話のチャットアプリで、メッセージが届いていた。他の方からのメッセージとは違う着信音——彼からだった。

この時間だと日本はまだ早朝にもなっていないのに。何でしょう、とアプリを開くと、二個ほどメッセージが届いていた。

『遅くにごめん』

『これだけは言わせてくれ 俺はセシリアが大ッ嫌いだ』

「……はい？」

もうその言葉にショックを受けるとか、そういうレベルではなくて。あまりの脈絡のなさに呆気に取られていた。

意味が分からず困惑していたところ、数秒して新しいメッセージが届いた。

『追伸、一日遅れのエイプリルフールということだ』

彼曰く、そういうことらしく。

「……何ですの、それ」

わたくしは小さく嘖き出した。彼にしては随分雑でへんてこな嘘だったけれど、これで何となく状況は理解した。多分、明日が休みなのを良いことに誰かとお酒を飲んでいたのでしよう。彼はお酒を人並み以上には飲めるけれど、飲まされたのかはたまた調子に乗ったのか、今はかなり酔っていてその勢いでわたくしにこんなメッセージを送ってきたのではないでしょうか。

とりあえず「わたくしのことが大ッ嫌い」は嘘ということですよわね。意味をひっくり返せば、これはきつと彼からのリップサービスということなのでしょう。でしたら——。

『では、わたくしからもひとつ』

携帯電話の画面をフリックしながら、メッセージを打ち込んでいく。

『わたくし、あなたのことが大好きですわ』

——以上。

満足したわたくしは携帯電話を隣に置き、今日記を書いている最中。

「大好き」が嘘になるじゃないかって？ そんなことはなくってよ。エイプリルフルは午前中に嘘をつくのがセオリー、今こちらは夜ですわ。

……第一、わたくしは「ひとつ」と言っただけで、嘘をつきません、なんて一言も言っていないわよ？

彼はどんな反応するでしょう、なんて楽しみにしていたら、隣の携帯電話がやかましく鳴り出した。着信音からして彼だから、きつとわたくしの思った通りに真逆の意味に取って焦ってわたくしの真意を掴もうとしている。

一日遅れでエイプリルフルの嘘を言ってきたのだから、ネタばらしも当然一日遅れ。明日の朝にはしてあげましょう。その間はうんと悩めばいいのですわ。

これは今まで散々優しい嘘で振り回してくれた、その仕返しですよ。ね？ わたくしの素敵な嘘つきさん？

四月九日、日本の某ホテルの一室にて。天気は晴れ、イギリスでは雨が続いていましたからとても気持ちが悪かったですわ。

今日からお仕事上のある事情で、わたくしは日本に出張することになった。国家代表IS操縦者となってからというもの、イギリス国内への出張、EU内への出張は年中それこそ数え切れないほどあるけれど、国外、しかも日本への出張となるとそれこそ一年ぶりにもなる。

わたくし、セシリア・オルコットにとって、日本は学生時代の青春を過ごした第二の故郷だ。大好きな国への出張だから、それ自体には何の不満も無い。しかし、そのスケジュールの決まり方にはいささか不満が隠せない。なんと、先週突然スケジュールの変更を政府に言い渡されたため、週末に予定していたお友達数人とお出かけの予定もキャンセルになってしまった。幼い頃から付き合いのあるお友達との予定で、楽しみにしていただけに残念。行けなくなつて申し訳ない、と謝るわたくしに、お出かけはまた今度ねと友人たちは笑って許してくれた。このような急なキャンセルにも理解を示してくれる友人には、感謝するばかりですわ。

しかし、相変わらず政府の人使いの粗さはひどいの一言ですわね。流石に一度は釘を刺しておかなければなりませんわ。これまで、彼の結婚を認めてもらうためにと、ある程度は無理も許容してきましたけれど、今後このようなことが続くのであれば、何かしらの手段を講じる必要がある。

何を隠しましょう、わたくしは伝統ある名家オルコット家当主。いざというときは、政府相手であっても切れるカードがありますのよ。まあ、わたくしとしてもそのような政治的手段に訴えるのは好ましいことではありませんし、できれば話し合いでまとめてしまいたいところですけど。

これからは余談になるけれど、予定のキャンセルについてグループチャットで謝るわたくしに対して、友人たちから「出張ついでに彼と

のツーショットを撮って提供すること」という謎のミッションが課せられた。今回は突然の出張ですし、彼と予定が合うかどうか分かりませんが、とわたくしが言い訳したところ、一同から「No excuse!（問答無用!）」との判決が下った。彼らには負い目もあつたために、判決には従う他ない。何故ツーショット写真が見たいのかと尋ねると、オフの彼を見たいからとのこと。彼はお友達の間でも人気らしい。複雑ですわ。

以上余談でしたが、そういうわけで、今日から日本への出張業務がスタートした。現在宿泊しているホテルは、都内の高級ホテルのスイートルーム。料金はすべてイギリス政府持ち。あまりにも急なスケジュール変更だったのだから、これくらいは当然ですわね。

今日一日は移動に費やし、明日から業務が始まる。今日中に終わらせなければならぬタスクは、ほとんどフライト前と機内で終わらせてきた。これからシャワーを浴びて、一日は終わる。

……さて、明日は大切な予定がありますし、今日のところはペンを置くことにいたしましょう。少々時差ぼけしていて眠気もあることですし。それでは、また明日。

四月十日、日本の某ホテルの一室にて。天気は快晴。素晴らしい一日になりましたわ。

いつも通りにきっちり起床し、ホテルで朝食で済ませたわたくし。流石に一流のホテルだけあり、なかなかクオリティの高い朝食を堪能できた。有意義な朝を経て、今日のスケジュール消化のため、車でとある場所へと向かった。

四月は寒くなったり温かくなったり、とても温度差が激しい。祖国イギリスでは、今の季節はもつと寒く冷え込むけれど、日本ではそろそろ暖かくなり始めて、山の氷が溶け、春の草花が芽吹こうと地面から顔を出す。気候が暖かくなると、白かった景色が緑や桜色に彩られていく……そんな季節の節目の変化は、とても美しいものであるとわたくしは思っている。

日本における四月は、気候の区分という意味だけではなく、文化的にも大きな意味がある。祖国イギリスでは四月一日にエイプリルフール、なんて文化があったりするけれど、日本では一際重要だ。何故なら、日本では四月こそが一年の始まりだから。新しい一年、新しい学年、新しい部署、新しい生活、新しい出会い——それらが桜のピンク色に彩られて、期待と不安に満ちた日々が始まる。そんな生活の節目として、四月はとても特別なものなのだ……と、わたくしは日本に留学してから知った。

日本人の皆さんだけでなく、わたくしにとっても四月は思い入れが深い月。学校が四月に始まることに慣れないまま日本に来て、満開の桜が美しい並木道を通ってIS学園に入学し、そして彼と出逢った。

素敵な出逢いに恵まれて、たくさんの思い出をもらった母校——IS学園。わたくしは、その目の前に立っていた。

「……懐かしいですね」

校門から見渡す景色も、校舎に続く道も、一五歳で入学したときとほとんど変わっていないかった。そこから三年を過ごして、卒業してから数年が経っても、母校は母校のまま。ふっと懐かしさでわたくしの頬が緩んだ。

こうして大人になって戻ってきてても、この門の前に立っていると不思議な緊張感があつた。まるで、一五歳のときの自分に戻ってしまったかのよう。

しみみり感傷に浸っていると、校舎の方から二人組のスーツ姿の女性が進んで来た。一人はすらりとした長身に黒いスーツを纏って、手には出席簿が。もう一人は小柄に体格に鮮やかなワンピースを着て、ここにことこちらに微笑みかけていた。

「——よく来たな」

「お久しぶりです、オルコットさん」

二人の先生が、わたくしを呼んだ。見た目も、声も、当時とほとんど変わらない……一年生のとき担任だった織斑先生と、副担任だった山田先生だった。

お久しぶりです、とペこりとお辞儀したわたくしに、恩師のお二人

は懐かしさを隠せない様子で微笑みかけてくれた。

「オルコットさん、一段と大人びましたね。見違えました」

山田先生は、そう言っただけでわたくしの手を取って握手をした。近くで向き合ってみると、山田先生が高校生のときよりも小さく感じた。高校一年生だったときより、わたくしの背が多少伸びているから、という理由もあるかもしれない。でも、その本当の理由はきっと、わたくしが山田先生に近づいたからだと思う。一人の大人の女性として、またIS操縦者としても。

山田先生と挨拶を済ませると、織斑先生が前に出てきた。

「今日のはるばるご苦労だったな」

「いえ、こちらこそ。まさかIS学園の入学式に来賓として招待していただけるなんて思ってもいませんでしたわ」

「丁度日本に来る仕事があると聞いて、今年の入学式は是非お前にOG代表として参加してもらいたいとこちらからお願ひしたんだ」

「大変光栄なお話です」

「昨年のモンド・グロツソでも活躍していたからな、新入生諸君にとっては話題の先輩だ。私も見ていたが、教え子が出ているというのはなかなか誇らしかったぞ」

お、織斑先生、見ていてくださいましたの。

驚くわたくしに、「私もですよ」と山田先生も言ってくれた。

「勿論だ。教え子が出るんだ、見ないわけがないだろう」

心外だな、と織斑先生は口角を上げた。

まさか織斑先生たちが見てくださっていたなんて……。尊敬する恩師に晴れ姿を見てもらえて誇らしい反面、目標を達成することができなかった負い目もあって、少々複雑なわたくしでした。

昨年、わたくしは三年に一度開催されるISの世界大会、モンド・グロツソにイギリス代表として選出され、初出場を果たした。先に行われた団体戦では本選出場が叶わず、個人戦にすべてを賭けて臨んだわけなのだけれど、結果はと言うと、目標としていた部門優勝ヴァルキリーに届かず、部門二位に終わった。

わたくしにとっても初の国際大会、経験不足は承知の上だったし、

並いる先達・強豪を倒しての部門優勝はかなり難しいと言われていた中、それでも挑戦をやめなかった。自分は確かに世界と戦えるという自信と、目標にしていた部門優勝を達成できなかった悔しさと課題を抱え、わたくしの初めてのモンド・グロッソは幕を閉じたのでした。「ありがとうございます。……目標の部門優勝は、できませんでしたけれど」

「まあ、初出場にしてはかなり健闘したと思うがな」

「そうですね、決勝も惜しい内容でしたから。次回は部門優勝だって狙えますよ、オルコツトさん！」

織斑先生、山田先生……。

織斑先生がさて、立ち話はこれくらいにしようと話は本題に入った。今日、わたくしは来賓としての出席になるのですが、式までは時間がある。それまで待合室で待っていても構わないし、校内であればどこか別の場所にいなくても構わないとのこと。

織斑先生がどうする、と尋ねたので、わたくしは校内を散策してもよろしいですか、と答えた。織斑先生が快諾してくれたため、わたくしは織斑先生と山田先生と一旦別れて、校内を見て回ることにした。式が始まるまでは、学校の様子を見ておきたかった。IS学園はわたくしの原点だから、今学園で過ごす学生たちを見れば、きつと初心に帰れるはず。様々な技術を身につけて国家代表になった今だからこそ、母校帰ってくるのがきつとプラスになる。それが、今回わたくしがIS学園に来た目的でもあった。

卒業して数年くらいでは、校内の地図を忘れるわけがなかった。一步一步、想い出を拾い上げるようにわたくしの歩みは続く。そうしてゆっくり校舎を歩いていると、わたくしの姿を見た生徒たちがざわざわと噂をしていた。

「み、見て！ あの人！」

「うわあ、セシリア・オルコツト!? あの子!」

「すげえ、蒼麗の狙撃姫だ！」

……まだ早いですわ、その呼び方は。前回のモンド・グロッソで入賞しただけなのに。

前回大会以降、初出場ながら部門準優勝を果たしたわたくしに各国のメディアも注目してくれているようで、巷ではそんな呼ばれ方をすることもあった。部門優勝なんてまだまだ先、メディアの皆さんも早とちりが過ぎると思いますわ。

とはいえ、彼らがわたくしに向けてくれている眼差しは真剣そのもの。わたくしのモンド・グロツソの試合を見て、こうして慕ってくれる後輩たち……彼らの純粋な思いに対して、謙遜などでは応えられない。わたくしは軽く手を振りながら、生徒たちへ微笑んでいた。彼らの驚きと感激が入り混じったような反応を見て、わたくしもますます満足を深めたのでした。

一通り学園を見て回ったわたくしは、ほどなくして体育館に移動した。既に一年生以外の在校生は体育館に揃っていた。入学式に全校生徒が揃うのは、IS学園の伝統である。

壇上に近い来賓席に座ったわたくしは、司会進行を聞きながら向かい合って座る生徒たちを眺めていた。

——懐かしかった。緊張して力が入っている一年生の姿、少し眠そうにしている二年生の姿、最後の一年と気を引き締めようとする三年生……彼ら一人一人の様子が当時の自分と重なる。

校長、そして現生徒会長の挨拶が終わり、次は来賓による挨拶だ。

「——続いて、本校OGであるイギリス代表、セシリア・オルコット様にご挨拶をいただきます」

ついに、わたくしの出番となった。スーツに乱れがないか一応チェックして、立ち上がって壇上へと向かった。

まさか、三年間見上げてきたこの壇上に、来賓として上がるなんて思いもありませんでしたわ。家柄もあって人前でお話するのは苦手ではありませんけれど、IS学園でとなると、流石に緊張しますわね。

ううん、とひとつ咳払いをして、わたくしは全校生徒にぐつと意識を向けた。

「皆さん、初めまして。イギリス代表のセシリア・オルコットと申します。この度は、ご入学おめでとうございます」

自己紹介を済ませ、定番の祝辞を述べていった。実は、今回の挨拶

に関してはほとんど原稿を用意していなかった。昨日までに何を話していいか纏まらなかつたから、今日学園を見て感じたこと、それをその場で言葉にしてみようと思ったのです。

ひとつひとつ、想い出と重ね合わせながら。この学校で青春を過ごした者として、今これからその時間を過ごす者 たちへ、心に留めておいて欲しい言葉を一つずつ選んで紡いでいった。

「わたくし自身、IS学園で学んだもの、得たものは、イギリス代表になった現在でも大きな糧になっています。それはどの進路を歩もうと同じ事。操縦者ではなく、整備や開発の道へ行こうとも、学園で学んだことは決して無駄にはなりません」

一年生全員がわたくしを見上げていた。初めて聞くであろうIS学園を卒業したOBの言葉に、ぐっと耳を傾けているようだった。

この学園に入った以上、ISに携わって生きていくことにはある程度決まっている。それがどのようなものであろうとも、簡単ではないでしょう。それでも、仲間たちと過ごした日々が、悩みながらも進んだ毎日が、きつと彼らの未来を照らしてくれる。

さて、あれこれと二分ほど話しましたし、そろそろ纏めに参りましょう。

「新入生の皆さん。どうか、後悔のない三年間を。その先で、わたくしは皆さんをお待ちしていますわ」

先輩として、皆さんにお伝えしたい言葉はこれくらい。未来は彼ら自身の手で切り拓くもの、わたくしはその先を行くものとして、今のこの姿を見せることが、彼らへの入学祝いですわ。

最後に壇上から生徒全員に微笑みかけて、わたくしは壇上を降りた。教員席に座る織斑先生と山田先生に目配せすると、二人も小さく指を丸めた。上出来、ということかしら。

ふふふ、先生方、これくらい当然でしてよ。だってわたくしは、イギリスの名家オルコット家当主にして国家代表、セシリア・オルコットなのですから。

——これからは余談になりますけれど、せっかくですから書き残しておきますわね。

午後三時。入学式が終わって、学園を出たわたくし。桜がひらひらと舞い落ちる中、帰路につく。

「——随分早かったな」

学園の門を出たわたくしに、校門の柱から声をかける男性が一人。わたくしが振り向くと、「まだ先生たちと喋っていると思っていたんだけどな」とその人は意外そうに言った。わたくしはええ、とにこり笑って言った。

「日本を発つのはまだ先ですし、先生方とは明日の夜お食事に行くことにしましたの」

「教え子が帰ってきたんだ、酒の席でも用意しないと気が済まん」とは織斑先生の弁。ニヤリと言うその姿に、修学旅行中にビール缶を開けていた先生が全然変わっていないことを改めて認識できたわたくしでした。

出張の予定は何も今日で終わりではない。せっかく日本に来たのだから、やりたいこと、行きたいところはたくさんある。元々強引にスケジュールを変更させられたのですから、こちらとしてもこれくらいのがままは通さないと気が済みませんもの。

わたくしが経緯を説明すると、男性——『彼』はそうか、と納得したようだった。

「そちらこそ、かなりお早いではなくって？ 予定より一時間も前ですわよ」

「今日の分はさっさと片付けて来た。周りの連中も君が来ると知って、気を使っただけの仕事も少なく割り振られていたしな」

「それはありがたい限りですわ」

まったくだな、と彼はいつものように端正な顔に微笑みを浮かべて、もたれかかっていた柱から体を起こした。彼は自然にわたくしの隣に立つと、左手を握って、ゆっくりと歩き出した。

「——じゃあ、行くか」

「はいっ」

桜並木を、二人並んで歩んでいく。

——今日は、彼とデート。急なスケジュールだったけれど、奇跡的に一緒の時間が作れて、こうして彼と会うことができたのでした。

せっかくデート、二人してスーツでは味気ないのでどこかで着替えよう、という彼の提案に、わたくしは大賛成。この機会ですし、このまま駅まで行ってレゾナンスで揃えるのも良いのではないでしょう。それなりに稼いでいるし、ブランドもので大人らしく仕上げてもらうのも良いかもしれない。

彼の右手を握りながら、桜吹雪の中を二人歩む。わたくしの歩幅に彼が合わせられる。それに合わせて、わたくしも少し歩調を早める。腕まで絡めて、離れないように二人で進むのだ。

IS学園に入学したとき、わたくしはこの桜道を一人歩いていた。期待と不安を抱えながら、それでも真つすぐに。

IS学園を卒業したときも、わたくしはこの道を一人歩いていた。一人でも、それぞれ未来への道を歩み始めた仲間ため、将来のため、彼との未来のため、真つすぐ歩いた。

——卒業して数年が過ぎた今、わたくしは彼と一緒にこの道を歩いている。一人じゃない、彼と手を繋いで、わたくしは歩いている。一人が寂しいわけじゃない。ずっとそばにいて、とわがままを言うような歳でもない。彼もわたくしも一人の大人として、今お互いができることを精一杯こなしながら、共に歩んでいる。その場所が、彼とわたくしでは別なだけの話ですわ。

お互い忙しい身。何とか籍を入れることを考える、それが精一杯。……それでも、たまにはもつと先のことを少しは考えたりしますのよ？

「こ、今度は……」

「うん？」

肩越しに、彼の顔を覗き込んだ。

「今度は、三人で歩いてみたいですよわね」

そう、今度は、三人で。彼と、わたくしと、そして――。

そんな願いもありつつ、赤くなって言ったわたくしですけど、当の彼は誰だろうと、首をかしげるばかり。

……ほんつとうに鈍いですわね。何年もお付き合いしてますのに！

「もうっ、相変わらず鈍感ですこと！ 話をしたわたくしが馬鹿でしたわっ」

そう言つてぷーつと膨れるわたくしに、機嫌を損ねたと彼がわたわたと焦り始めた。

この通り、彼はわたくしに甘い。それを熟知しているわたくしは、腕を絡めたまま、唇を突き出した。

……ふふん、こうやって拗ねたフリでもすれば、彼からサービスを引き出すなんて簡単ですよ。

「こ、ここですか？ みんな見てるぞ」

「……さっきの答えが分かるまで、離してはいけませんわよ」

「い、いや、それだと多分窒息死すると――」

「ふふ、『No excuse (問答無用)』、ですわ」

煮え切らない彼の首をぐつと引き寄せて、唇を押し付けた。女心の分からない鈍感男には、行動で示してあげませんと、ね？

満開の桜が舞い散る中、わたくしは未来へ想いを馳せながら、彼との口づけに酔うのでした――。

五月三日、出勤中の車内にて。天気は快晴。

五月に入り、高緯度に位置するここイギリスでも春らしい暖かさが訪れ始めた。春の心地よい陽気包まれるように、わたくしはチュエルシーが淹れてくれた紅茶を堪能しながら、のんびりと朝食後のひとときを満喫していた。依然イギリスの国家代表IS操縦者として、またオルコット家当主としての職務は多く、多忙な毎日ではあるけれど、充実した日々でもあった。今日のような朝に鋭気を十分に養えた一日はお仕事も捗るというもの、なるべく早くお仕事を片付けて、家族と過ごす時間を増やしたい。

お仕事に行くまで何をしようかしらなんて考えていると、「おかあさま！」とわたくしを呼ぶ愛らしい声が。

なあに、と振り返ると、わたくしそつくりの金髪の女の子がきらきらと目を輝かせてわたくしを見上げていた。

「ねえねえおかあさま！ ゴールデンウィーク、ってなに？」

ニュースで聞いたのでしょうか。今年五歳になる愛娘が、そうわたくしに尋ねた。

ゴールデンウィーク……そういえば、日本では今ちようどその時期ですわね。いざなにかと聞かれると少し説明が難しいけれど。

ゴールデンウィークというのは、お休みのことよと説明をすると、娘は首をかしげた。

「そう、お休み。何日かお仕事をお休みするの。家族でお出かけしたり、買い物をしたり。vacationよ、わかる？」

「わあー、ばけーしょんー！」

得心がいったようで、娘はうんうんと頷いた。子供にものを教えるということは存外とても難しいもので、好奇心旺盛な子供の質問攻めに遭って答えに困るといのはよくあること。今回は、上手くいきませなければど新しい言葉を覚えたのが嬉しいのか、ばけーしょん、ばけーしょん、と繰り返してはしゃいだ。娘の無邪気な仕草に胸を打た

れたわたくしは、小さな頭に手を伸ばして、優しく頭を撫でた。それが嬉しかったのか、娘はわたくしの方を見上げては、満面の笑顔を見せたのでした。

ああ、可愛いですわ！　うちの子ったらなんて可愛いのかしら。我が子は目に入れても痛くないほど可愛いもの、と聞いていましたけれど、それは本当なのだとは知ったのは、この子が産まれてからでした。

娘の愛らしさにときめいたわたくしだけでも、娘の後ろに隠れていた息子が、羨ましそうに姉を見ていたのをわたくしは見逃さなかった。大人しい子だけれど、息子が人一倍甘えたがりだということは、母親であるわたくしは誰よりも知っている。この子のことだから、姉がなでなでされているのが羨ましかったのね。

「ほら、あなたもいらっしやい」

息子を呼んであげると、おずおずとわたくしの方に寄ってきて、父親そっくりの黒い髪の毛をわたくしに向けた。娘と同じように頭を撫でてあげると、同じように息子は嬉しそうににこーっとわたくしに笑いかけてくれるのでした。

ああ、もう、本当に。なんて可愛いのかしら、うちの子供たちは！　この子たちのためなら、わたくしはきつと何だつてできるでしょう。本当を言うところの子たちとずっと触れ合っていたいんだけど、残念なことに今日のお仕事の時間が迫っていた。

そろそろ時間ですわね、とチエルシーを呼んで仕事に出かけようとしたときだった。娘が立ち上がったわたくしの服のすそを掴んで、何か言いたげに見上げていた。どうしたのと尋ねると、娘が戸惑った様子でわたくしの足元まで駆けてきた。

様子がおかしいですわね、何故でしょう。いつも通りの時間なのですけれど。

「おかあさま。おしごとっ。」

娘が尋ねた。ええ、と答えると、娘は悲しげに続ける。

「お、おかあさまには、ゴールデンウィーク、ないの？」

「ええ、あれは日本のお休みだから、イギリスに住むわたくしたちにはないの」

「……じゃ、じゃあ、おかあさまといっしょにおでかけ、できないの……？」

娘は蒼い大きな瞳に涙を湛えて言った。息子も同じように、姉そっくりの瞳でわたくしを見上げていた。

今にも泣き出してしまいそうな二人を目の当たりにしたわたくしは、がつんと殴られるような衝撃を受けた。子供たちのいじらしい姿に胸を打たれたのではなく、子供の気持ちを慮ってあげられなかったわたくし自身の情けなさによるける思いでした。

つまるところ、娘がゴールデンウィークについて聞いてきたのは、わたくしと一緒に過ごす時間が欲しかったからのようでした。それに気付けなかったことにショックを隠せない。

どうしたものかと悩んでいると、セシリア、とわたくしを呼ぶ声が。時間になってもなかなか出発しないわたくしを案じてか、子供たちのお父様が執務室から降りてきたようでした。

「どうしたんだ？」

「ええ、それが……」

事の次第をざっくりと説明すると、彼はああ、と苦笑いした。思い当たる節があるのかもしれないわね、子供たちの不満をどこかで聞いたりしていたのかしら。

子供たちのお父様であり、わたくしの夫である彼。結婚してからはオルコット家の職務の一部を肩代わりするような形で、主に屋敷でお仕事をしてきているから、必然的に子育てに関してには彼に頼っている部分も大きいわたくしでした。

大好きな優しいお父様が登場すると、子供たちはわっとお父様のところへ駆け寄って、足にぎゅつと抱き着いた。夫はぐずる子供たちを撫でてあげながら、

「セシリアだって忙しいんだ、分かってあげてくれ。な？」

と、ぐずる二人を宥めるけれど、子供たちが納得した気配はない。普段は聞き分けのいい子供たちの珍しいワガママに、彼も困っているようだった。

どうしようかとわたくしにアイコンタクトする彼に、心配いりませ

んわと小さく首を振った。忙しいのにごめんな、と小さく謝った彼だけれど、彼は何も悪くなかった。むしろ、今回は明らかにわたくしのせい。夫が見てくれていたから、子供たちのことは大丈夫だろうとどこか高をくくっていた。母親に甘えたい子供心を忘れてしまったのはわたくしの方。愛する我が子二人に寂しい思いをさせて、何が母親でしょう。母親失格ですわ。

——ええ、決めましたわ。子供たちに寂しい思いをさせた分は、必ず埋め合わせをすると。

そう決意したわたくしは、父親にくっついていた子供たちを呼んだ。ぐずぐずになった姉弟の顔を撫でたあと、ぎゅつと二人の小さな体を抱きしめた。

「ごめんなさいね。いつも寂しい思いをさせて」

子供たちはうんうんと首を振った。たまらなくなつて力いっぱい抱きしめると、息子が「おかあさま、くるしい」と小さく言った。それから少しだけ腕の力を緩めたわたくしは、二人の顔を見つめた。

「約束するわ。来週を、わたくしたちのゴールデンウィークにしましょう」

「ほ、ほんとう……!?!」

「ええ、本当よ。お父様と四人で、どこかへ出かけましょう」

約束よ、と念押しで言うと、姉弟は心底嬉しそうにはしゃいだ。やっぱり、我が子には泣き顔よりも笑顔でいて欲しい。そう思うのは、きつとわたくしだけではないはず。

子供たちにつられてわたくしも笑顔になったら、幼い姉弟二人は、見合つてから二人で小指をわたくしに差し出した。どうしたの、と聞くと、約束だからと言う。

……なるほど、これは日本の指切りね。お父様に教えてもらったのかしら。IS学園で初めて教えてもらったとき、針千本飲ますというフレーズのインパクトがとても大きかったことを覚えている。

二人の小指に右と左の小指を繋ぐと、娘のたどたどしい口上が続く。

「ゆーびきーりげんまーんうそついたらはりせんぼんのーますっ」

それに合わせて左右の指が振られて、指切ったで離す。先ほどまでの泣き顔が一転、嬉しそうな子供たちの笑顔を見るだけで、今日も明日も頑張れる気がしますわ。

さて、そろそろ時間、と立ち上がって旦那様に子供たちのことを頼み、チエルシーに出発するように指示を出す。出発が遅くなつてしまったから、急ぎませんと。

……ああ、そういえば忘れ物をしていましたわね。

あなた、なんていつもは使わない呼び方をして。子供たちを連れて二階に上がろうとする夫を呼び止めて、振り向いた彼にそつとキスをした。

「忘れ物、しましたの」

毎朝屋敷を出るときにする、わたくしたち夫婦のルーティン。子供たちの前だから、少し顔を赤らむけれど。彼もびっくりしたような反応をしていたけれど、すぐにそうだなと穏やかに笑った。

「ふふ、では行ってきますわ」

「ああ、行ってらっしゃい」

夫に見送られて、わたくしは今日も仕事へ向かった。チエルシーが車を準備してくれていたので、車に乗り込むとすぐに発車して職場へと向かうことができた。

今日帰ったあとは満足に日記も書けないでしょうから、今のうちに日記を書いておくことにする。忙しきにかまけて子供たちに寂しい思いをさせた戒めとしても、今日のことは書き残しておかなければいけませんものね。

さあ、これからはいつも以上に大変なお仕事になる。けれど、子供たちのために頑張りますわ。

五月四日、お仕事から帰宅後のオルコット邸にて。天気はどんより、あまり気乗りしませんでしたわ。

時刻はもう十一時。彼が作ってくれたホットココアを二人で飲みながら、会話を交わす。子供たちは来週をとてもし楽しみにしてくれて

いるようで、終始ご機嫌のようでした。何よりですわ。

今日は来週をお休みにするため、その分のお仕事を片付けるべく早く出勤したために、子供たちの顔を見ないで仕事をする事になってしまった。お陰であまり元気が出ませんでした。が、屋敷に帰って、二人体を寄せ合って寝ている姉弟のあどけない寝顔を見ただけで、疲れなんて丸ごとどこかへ行ってしまった。

彼と他愛のない話をしながら、就寝するまで夫婦水入らずの時間を過ごしたわたくしは、寝る前にこそそそっと日記を書いていました。飽きないな、なんて彼は苦笑するけれど、もう何年も続けている日課だから、生活の一部になっていくんですもの。

子供たちの寝顔をもう一度見に行つて、「おやすみなさい」と一言囁いてから頬にキスをした。忙しくてなかなか遊んであげられないし、寂しい思いもさせてしまっているけれど、子供たちへの愛情は決して揺るがない。この子たちがいるから、わたくしは頑張れる。この子たちを守るため、そしてこの子たち未来をより良いものにするため、日々仕事に励んでいるのですから。

自分の部屋に戻つてベッドに入った。彼も寝るそうなので、夫婦二人で就寝。明日もお仕事、頑張りませんと。

五月一〇日、イギリス郊外のオルコット邸にて。天気は快晴、最高ですわね。

来る今日五月一〇日、約束通り、わたくしは三日間のお休みをいただいたわたくしは、夫と娘と息子、そしてチエルシーや数人の使用人とともにロンドンの市内へ繰り出していた。

今回の三連休は子供たちの要望を全面的に反映することにしました。初日の今日はお出かけとということ、使用人が運転する車に運転してもらつて、市街を散策する予定となつていた。今朝、チエルシーはお邪魔ですからと遠慮する姿勢だったけれど、それを聞いた子供たちがチエルシーやお世話さんも一緒にいいと言うので、それならばと同行することとなった。そのときの嬉しそうなチエルシーの顔、わたくしはばつちりと捉えていましたわ。

そんなわけで、今日はオルコット家一同でお出かけ。とりあえず、午後から映画のチケットを押えてあるので、それまではお買い物という形。

午前中は自分の服はほどほどに、娘と息子の服を選んだ。小さい子はすぐ背が大きくなるから、新しい服を買ってもすぐ着れなくなってしまうけれど、たまにはこうしていいものを選んであげたい。子供たちにお洒落させたい親心も、無きにしも非ず。どんな服がいいかと息子に聞いてみたら、青色の服を指差した。

「これがいいの？」

「……うん。おかあさまのあいえすと、おなじいろ」

という息子の一言で見事ハートを射抜かれたわたくし。親馬鹿？

あら、誉め言葉ですわね。

お昼はグルメな夫がおすすすめする大衆食堂へ。高級レストランは、子供連れだと入りにくいですものね。舌鼓を打つ夫のうんちくはほどほどに聞きつつ、口いっぱい頬張って食べる子供たちをしっかりと堪能した。

映画はハリウッドのヒーローもの。ヒーローものに関して詳しいIS学園時代の友人からおすすすめと聞いていたので、それを選んだのですが、息子以上に娘がとても喜んでいたので印象的だった。よほど楽しかったのか、映画から出るなり、映画のヒーローの技である必殺パンチをお父様の鳩尾に決めた娘。人を殴ってはいけません、とお腹をさする夫を尻目に注意をしておいた。

お休みを取ることができたはいいものの、国家代表IS操縦者であるわたくしは、緊急時はそちらの任務を優先しなければならぬ。ただ、そうでないときは必ず子供たちの母親であるセシリア・オルコットでいることを心がけた。

母親らしく時に叱ったりしながらも、愛する子供たちの成長を感じながら、その笑顔を脳裏に焼きつけたわたくしでした。

そうそう、今日一番印象に残っていたのが、帰り道に疲れて眠ってしまった子供たちを見つめて言った夫の一言。

「……今日はセシリアに子供たちを取られて悔しかったな」

と、真面目な顔をして言う夫に、わたくしとチエルシーは笑いを堪え切れなかった。

わたくしも大概親馬鹿な自覚はありますけれど、彼はそれ以上だったようで。くすくす笑いながらも、いい夫に恵まれましたわ、とわたくしはジョークを飛ばしたのです。

五月十一日、イギリス内某ホテルの一室にて。天気は快晴、最高の一日になりましたわ。

連休二日目、わたくしは夫と娘と息子、四人で国内にある遊園地に遊びに来ていた。少し遠出になるため、今日は遊園地を満喫して明日帰る二日間の日程とした。なお、今回に限ってはチエルシーを始め屋敷の使用人の皆には休暇という形で職務から離れてもらっているで、今回は正真正銘の一家四人でのお出かけです。

開園前に現地についたわたくしたちは、開園と同時に流れる人の波に乗ってゲートへと進んだ。娘がわたくしの手を引いて、早く早くと急かした。

わたくしの立場もあって一応VIP対応ということになっているけれど、平日で空いているためか特にVIP対応である必要性は感じられない。

「みておかあさま、ふんすいすごいー!」
「もう、引っ張らないの」

朝早く出たために眠そうにしていた姿はどこへやら、危うくはぐれそうになるくらい前のめりな娘にぐいぐい手を引かれて、チケットを受付のスタッフに手渡した。息子と言うと、わたくしたちの後ろで目を輝かせてお父様に手を引かれていた。お転婆な姉と違って引っ込み思案な息子だけれど、初めて来る遊園地にはわくわくのよう。

娘が産まれて育児や仕事に追われているうちに息子を授かったものだから、子供を連れて遊園地に来たのは今回は初めてのことでした。そんなわけで、三日間のプランを立てるにあたって、まず一番最初に決まったのが今日の遊園地行きで、子供たちからの強い要望あつ

てのチョイスでした。

どこに行こうか、と夫が言うので、無難にメリーゴーランドあたりかしらなんて思っていたのだけれど、娘のリクエストはというと。

「じえつとこーすたー！　じえつとこーすたーのりたい！」

と、いかにも娘らしいものだった。

勿論小さい子供は大人用のジェットコースターには乗れないので、子供でも乗れる小さなジェットコースターのエリアに行くことに。

聞きなれない単語に怖がる息子。怖いなら俺と一緒に外で見ているから、と夫が言ったけれど、娘と一緒にいこうと誘い、息子が頷いたので、結局四人で乗ることとなった。

息子は姉によく懐いているから、大好きな姉の誘いは断れなかったのだろうけれど、正直なところ息子が怖がらないか不安だったわたくしと夫。乗った結果はというと、案の定と言いますか、初めて乗るジェットコースターの恐怖で息子は号泣してしまったのでした。一方娘は大はしゃぎしていました。この子将来大物になるかもしれないわね。

泣いてしまった息子でしたが、ソフトクリームを買ってあげるとすぐ泣き止んでくれたのでまあよしとしましょう。

その後メリーゴーランドに乗って、園内のレストランで昼食、それから名物のパレードを観たわたくしたち。パレードのピエロがわたくしたちの目の前を通るたび、子供たちがはしゃいだ。

パレードを堪能した後、夫が行きたい場所があると言うので、案内してもらおうことに。どこに行くのかと思っていたら、観覧車でした。

「高いところは嫌か？」

彼が聞くと、子供たちは首を振った。むしろ、初めて乗る観覧車に興味津々のようでした。なら良かった、と彼はわたくしたちを連れて観覧車へと乗り込んだ。

娘は最初から楽しそうでしたが、息子はゴンドラが揺れると怖がってわたくしに抱き着いていた。そんな息子も次第に慣れたのか、外の景色を見るようになった。やがて頂上付近になると、絶景——夕暮れ時のオレンジに染まったイギリスの大地が、ゴンドラから一面に広

がっていた。

わあ、とガラスに顔を近づけ、目を輝かせる子供たち。夫は二人の間に入ると、しゃがんで二人の肩を抱いた。彼が「綺麗だろう？」と子供たちに問い掛けると、うんと二人は頷いた。

「これが、お前たちのお母様が護っているものだよ」

彼が諭すように言うと、子供たちが座席に座っていたわたくしの方を振り返った。

「おかあさまが？」

「そう。お前たちのお母様は、毎日この景色を護るために戦ってる。勿論広いし、いろんな人がいるから、それを護るということは、簡単なことじゃないんだ」

なるべく、子供にも分かるように言葉を紡いでいく彼。優しく語り掛けながらも、子供たちに寄り添って、ゆつくりと。

「寂しいときもあるかもしれない。でも、分かってあげて欲しい。お前たちのお母様のお仕事はそれだけ大変なんだ。そして、そんな大変なお仕事をしているお母様はすごい人なんだ」

彼がここに来たいと言っていた理由が分かった気がした。きっと、子供たちにこの話を聞かせるために……。

「この世界と、そしてお前たちを守るために。お母様はそのために戦ってるんだと、分かってあげて欲しい」

彼はそう締めくくった。

子供たちは彼の言葉に聞き入っていた。子供たちがその言葉の意味を正確に理解しているか、わたくしには分からないけれど。

「おとうさま。わたしね、おかあさまがすごいひとだって、しってるよ。だって、あいえずにのったおかあさま、とつてもつよいもん！」と、娘が。

「……てれびにうつってるとき、ぼくぜったいみてるよ」

そう息子が続ける。それだけでも十分だと言うのに。

「おかあさまのこと、だいすきだから」

そんな風に二人がにっこり笑って言うてくれたものだから、視界が潤んでしまった。ぼろぼろ泣くわたくしを心配したのか、子供たちが

心配そうな声を上げた。

わたくしはいいえ、と一言だけ発して、二人の前に駆け寄ってぎゅっと抱きしめた。

「いいの。嬉し涙だから、それでいいの」

いつも構ってあげられなくてごめんなさい。いつも元気をくれてありがとう。あなたたちの母親になれてよかった。万感の思いを込め、幼い子供たちをめぐらばいに抱きしめた。そして、この子たちにもう二度と寂しい思いはさせないと、この子たちを生涯守り抜くのだと、英国貴族としての誇りと愛機《蒼い雫》にかけて誓った。

彼が優しく見守ってくれる中、わたくしはゴンドラが地上に着くまで、ずっと愛しい我が子を抱きしめていたのでした。

日が落ちる遊園地の帰り道、使用人の方々やチエルシーへのお土産をぶらさげながら、一家四人手を繋いで歩いた。真ん中で娘と息子が手を繋いで、息子の手をわたくしが、娘の手を夫が握って。一日歩いて疲れただろうに、子供たちはご機嫌だった。

愛する子供たちの先には、生涯の伴侶がいてくれる。穏やかな笑顔を浮かべる彼と目が合って、わたくしも笑顔になった。

——そう、こんな家族の姿を見て、羨ましく思っていたわたくし。その在りし日のわたくしが欲しかったものは、わたくしのすぐ傍にあった。

夫と、娘と、息子。家族の笑顔があれば、わたくしは何だってできる。世界を護ることだってできる。愛の力は無限大なんて言ったりもするけれど、それは本当のことだと、わたくしは思った。

——さあ、明日は何をしましょうか。わたくしの最高の時間ゴールデン・タイムは、明日も続く。

願わくば、明日もその明日も、ずっと幸せで在れますように。

一二月二三日。 ロンドン郊外オルコット邸にて。 天気は晴れ、明日が楽しみですわ。

三六五日の一年の中で、わたくしにとって一番特別な日を挙げるとすれば、間違いなくその日を一番に挙げるでしょう。 十二月この日がなんの日かと聞かれて、分からないと答える人はきつと少ない。

——そう、今日はクリスマスイブ。 クリスマスの前夜……そして、わたくしの誕生日。

「——あら？」

日付が変わった瞬間、わたくしの携帯の端末に多数のメッセージが届いた。 IS 学園の卒業生が集まるグループチャットでは、すぐにシャルロットさんから「セシリア、お誕生日おめでとう〜」とのお祝いメッセージが届き、それに同級生からの祝辞が続く。 今年でにじゅ……（ヒミツ）歳になったわたくしへのメッセージはどれもこれも親しみと愛があり、読むごとに暖かい気持ちでいっぱいになった。 シャロットさんが一番に、それこそ日付が変わった瞬間に送ってきてくれているのが、まめな彼女らしくてくすりと笑ってしまった。

その他にも、数々のメッセージが届いた。 絵文字も何もない「おめでとう」という一言だけの、いかにも彼女らしい箒さんのメッセージ。 文章に加えて誕生日用のスタンプで全力でお祝いしてくださる鈴さんのメッセージ。 かと思えばウサギの絵文字がついたラウラさんのメッセージ……それぞれ人柄が出ていてとても面白い。 自然と頬が綻ぶのを感じながら、わたくしはありがとうございます、と返信を返した。 その際次の一年の目標を聞かれたので、

「今年こそはモンド・グロッソ部門優勝ですわ！」

と大々的に皆さんに宣言した。 そんなわたくしの目標に、激励のメッセージが続いた。 一部ブライングもあったことも追記しておく。 まあ、言うまでもなく専用機持ちからのヤジですけれど。

それにしても、こうして卒業後何年経っても祝ってくれる仲間というのは、持つべき宝ですわね。 しみじみ感じ入るわたくし。

——そして、彼からは個別にメッセージが送られてきた。

「メリークリスマス。そして誕生日おめでとう。明日会いに行くよ」
彼らしい実直なお祝いにじーんと感じ入りながら、「楽しみですわ」と舞い上がりながらわたくしも返した。

彼が二四日に会いに来てくれる。しかも二五日クリスマスもイギリスにいてくださるとのこと、胸の高鳴りを隠せない。彼に会うときはどんな服装がいいかしら、なんて前日の夜からコーディネートを始めてしまうあたり、彼と会うときの気持ちは学生だったあの頃のまま。彼とのお付き合いが始まって少し経った頃、ようやく落ち着きのある振る舞いができるようになったのだけれど、遠距離恋愛をしているせいでしょうか、久しぶりに会うとなると十代のあの頃に戻ってしまうのが、毎回のことでした。

……うう、もう緊張してきましたわ。わたくしが主役なのだから堂々としていればいい、と横でチエルシーが言ってくれるけれど。し、仕方ないではありませんか。あとチエルシー、笑いすぎですよ。

これ以上起きていると、本当に寝れなくなってしまうすわね。起きてから、半日だけお仕事がありますから、今日はこのくらいでペンを置くとしましよう。明日が最高の一日になりますように。おやすみなさい。

一二月二四日。ロンドン郊外オルコット邸にて。天気は快晴。素敵な一日になるでしょう。

クリスマスを明日に控えた今日。明日二五日を休暇とするため、激務に身を投じ普段以上に多忙なタスクを終え、帰路に着いた。時刻は午後四時。冬場の欧州は日照時間が短く、この時間にもなれば外は真っ暗だ。

朝からいろいろな意味で忙しい一日だった。出勤するや否や、クラッカーを構えた同僚たちで待ち伏せされていたり、次から次へとプレゼントをいただいて腕からこぼれるくらいになったり、お昼休みは

休憩室がパーティ会場になっていたり。本当に楽しかったけれど、少し疲れましたわね。

そんな今日半日の様子を思い出しながら、わたくしはロンドン市内を走るリムジンのシートに身を預け、窓から見える市内の景色を眺めていた。鮮やかな電飾の数々で彩られている夜景。夜になると一面のイルミネーションが輝いて、クリスマスの大通りを明るく照らす。クリスマスは家で過ごすのが伝統だから、最後の書き入れ時と閉店前に宣伝する洋菓子店、クリスマスを前に買い物をする家族の笑顔、仕事が終わったのか疲れた様子で歩くサラリーマンの足取り、腕を組んで歩くカップルの幸せな横顔……そんなクリスマスイブの人々の営みが、車の窓から窓を流れてゆく。

それらを横目に見ていると、向かいのシートに座るチエルシーから劳いの言葉がかけられた。

「お嬢様、お疲れ様でした」

「ええ。今朝は本当に嬉しかったですわ。ありがとうチエルシー」

「とんでもございません。今日は敬愛するセシリアお嬢様のお誕生日。邸の者も皆、大変喜んでおります」

「そう？・嬉しい」

今朝のことを思い出した。チエルシーを始め、邸の皆には起きてすぐにお祝いをしてもらっていた。寝室から着替えるなり、全員がクラッカーを持って構えているんですもの、一斉にぱーんとクラッカーが弾けたときには、びっくりしてしまいましたわ。邸ではパーティを開く予定だけど、朝から盛大にお祝いされて嬉しくないはずはなかった。

クリスマス用に装飾で彩られた食卓で朝食をとって談笑したあと、「寒いから見送りはいいですわ」と言ったのに、扉の前で総出で見送る邸の皆に苦笑しながら、今朝出勤した次第でした。わたくしが帰れば、豪華な食事と音楽で彩られるパーティ会場に早変わりしたオルコット邸が待っていることでしょう。

……そ、そうでしたわ、この後は邸でパーティ。ということは……

仕事の疲れはあるはずなのに、それもどこへやら、そわそわとしてまるで落ち着かないわたくし。浮ついていることを見透かされたのか、チエルシーがくすくす笑った。

「今宵のパーティ、とても良いものになりそうですね」

も、もう、嫌ですわ本当に。彼が来てくれるというのだから、少しくらい舞い上がったでもいいでしょう？

既に邸の皆や同僚の方々からはたくさんお祝いしてもらったけれど、彼と会うとなれば話は別。パーティということは、正装に身を包んだ彼と会える。それはすなわち、今夜世界の誰よりも素敵な彼に会えるということ。どきどきするなという方が無理ですわ、ええ。パーティ用のドレスは、こういう日のためのおきがありますから、それを着ましようか。きつと彼も喜んでくださるはず。

——でも、その前に。わたくしには、行かなければいけないところがある。

「チエルシー」

「はい、存じ上げております」

わたくしが呼ぶと、チエルシーが運転手に指示を出して車をとある場所へと向かわせた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ロンドン市内の大通りから遠く離れたとある協会の墓地。そこがわたくしの両親が眠っている場所だった。

墓地につくと、チエルシーが行ってらっしゃいませ、とわたくしを見送った。わたくしがここに来るとき、チエルシーはいつも席を外してくれる。一人で両親と会いたいわたくしの気持ちを慮ってくれているのでしよう。

真冬の風は冷たい。ぶるりと震えてコートを深く羽織り、敷地の奥へと進んでいく。五分ほど歩いた先に、目的の場所があった。芝生を一步一步踏みしめて、その場所を目指す。

墓標に刻まれた、「A l c o t t」の姓——わたくしは両親と「再会」

した。その十字架をそつと撫でると、金属でできたそれは冬風で凍え切っていて、指先を刺すように冷たさが襲ったけれど、少しも嫌だとは思わなかった。

「——お久しぶりですわ、お父様、お母様。ご無沙汰してごめんなきい」

ありきたりな挨拶をして、わたくしはじつと物言わぬ墓標を見つめながら、冷たい風に吹かれて立っていた。

毎年命日には顔を出しているけれど、頻繁に訪れる場所ではなかった。わたくしが生まれた今日という日の訪れを、亡き両親と共有したくて、今年はここに足を運んだ。

「今日、またひとつ歳を取りましたの。もしお二人が存命でしたら、お父様とお母様はお祝いしてくれたかしら」

勿論返答はなかった。でもそれでよかった。これは答えのない自問であり、言わばわたくしの感傷でしかないのだから。

両親との誕生日の思い出が良いものであったかと言われれば、恐らく「ノー」であると、わたくしは答えるでしょう。幼い頃は、二四日の誕生日と二五日のクリスマスが続く、この二日間が楽しみで仕方がなかった。ただ、それも本当に小さい頃の話。徐々に両親のすれ違いが大きくなって、二人が亡くなる一、二年前にもなると、両親からのお祝いはプレゼントと手紙だけになった。両親と一緒に祝えない自分の誕生日の虚しさ、それを埋めるように邸の使用人たちがずっと一緒にいてくれて、少なからず救われていたのは事実だ。

居心地の悪い邸にいたくない父と、あまりの多忙さ故に娘の誕生日も帰って来れない母。わたくしもそんな両親二人の顔色を伺うのが嫌で、邸の中をパーティ会場にしては、邸の皆と過ごす時間を務めて楽しもうとしていた。そして夜になって、両親から渡された手紙の中身を空けて感傷に浸る……。

IS学園に入学する以前の、一二月下旬。その記憶が蘇る度、笑顔で両親から祝福を受けていた幼い頃の記憶が美化されてしまっていた。

——わたくしたち一家にも、あんな幸せな時間があったのに、と。

「……いけませんわね。ここに来ると、感傷的になってしましますわ」
決して僻みをしにここに来たわけではない。両親に対するわだかまりと疑問は、既に自分の中で折り合いをつけたのだから。

ただ、わだかまりがなくなつたと言つても、両親ともう会えない寂しさや悲しさが消えることはなかった。むしろ、以前よりも強く会いたいと思うようになった。もつと話しておけば、両親との関係を諦めなければ……そんな後悔は、後を絶たないけれど。

「わたくしはお二人の娘でよかつたと、心の底から思っていますわ」
それでも、その言葉に偽りはなかった。父と母の娘、「セシリア・オルコット」として生を受けたことこそ、わたくしの誇りある人生のスタートラインに他ならない。

IS学園で、信頼する仲間や最愛の恋人と出逢えて、過去を振り返るよりも、今と未来を精一杯生きたいと心から思えるようになったから。

チエルシーから、「お嬢様、そろそろお時間です」と連絡が入つた。時計を確認して、踵を返そうとしたところで、ひとつ忘れていたことがあつた。わたくしはバッグから小さな封筒を取り出して、墓標の傍に置いた。

わたくしはそれを一瞥して、墓地をあとにした。次に会いに来たときは、今日の話をするといたしましょう。今宵、彼と過ごすクリスマスパーティーは、絶対に素晴らしいものになりますわ。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

時刻は六時、両親と会つて少ししんみりした雰囲気の中、リムジンはオルコット邸に到着した。車内で日記を書いていたものの、かじかんで字が震えてしまっている。まあ、それも一興ですわね。

リムジンのドアが開かれて、邸の敷地を通り抜け、邸の中へと入ろうとしたわたくしを、チエルシーが止めた。どういふことかしらと尋ねたわたくしに、「お嬢様、邸には裏口からお入りくださいませ」と案内した。チエルシーが言うには、今邸のロビーはパーティー会場となつ

ており、今着ているオフィス用のスーツは似つかわしくないとのこと。

なるほど、確かにレディがパーティ会場に赴くのにドレスアップは必須、それが嗜みですね。そういうことでしたら、とチエルシーの言う通り、邸の裏にある使用人用の出入り口から入り、チエルシーを連れて自分の部屋へと戻った。

さて、ここからはオルコット家当主セシリア・オルコットの本領。イギリス代表IS操縦者から、名家の令嬢に変身ですわ。

そこからは慣れたもので、とっておきのドレスを選んでから、スーツを預けてコルセットに身を包み、チエルシーにメイクしてもらってドレスアップ。髪を結び上げる最中のチエルシーは「お嬢様が今日の主役ですから！」とやけに気合いが入っていた。頼もしい限りですわ。

ドレスアップが終わり、ヒールに履き替えたくし。髪をアップでまとめ、真紅のドレスとアクセサリーで着飾った。特にドレスは今日初めて着るとっておきで、これを着て彼や参加してくれる方に会えるのがとても楽しみ。

チエルシーが「大変お綺麗です、お嬢様」と目を輝かせて言う。

「ふふ、ありがとう。どれくらいかしら？」

「世界一お綺麗です」

満点のお墨付きをもらった。チエルシーにそう言ってもらえるなら、きつとそうなのでしよう。嬉しいですね。

少し高めのヒールを履いて、メインホールへ繋がる階段へと歩いてゆく。通りすがった使用人は皆、お帰りなさいませと挨拶してくれた。

廊下を通り抜け、階段の上からオルコット邸のメインホールを見下ろすと、豪華な食事と、華やかな装飾、そして音楽が優雅に鳴り響くパーティ会場がわたくしを出迎えてくれた。ホールからは、既に会場で待っていていた使用人の皆や友人たちが、わたくしの方を見上げていた。

「おかえりなさいませ、セシリアお嬢様」

会場で待つてくれていた使用人たちが唱和した。昔から顔馴染みの人や、今年の夏に邸に来てくれた人もいる。彼ら全員が、オルコツト家を支えてくれている、愛すべきわたくしの家族。

彼らに笑顔を見せて、階段を下った。来てくれた方々一人ひとりの顔を見ていたわたくしは、見知った黒髪の青年を見つめて固まった。

愛する彼が、そこにいた。微笑みを湛えた彼が、両手を広げた。

「——お帰り。誕生日おめでとう、セシリア」

感極まって、目を潤ませたわたくしは、周りの目も忘れて、一目散に彼の腕の中に飛び込んだ。彼がぎゅっと抱きしめてくれて、大きな温もりに包まれた。わたくしも腕を首に回して、彼の耳元で囁く。

「ただいま帰りましたわ。もう着いておられましたの?」

「ああ、少し前にな」

到着はわたくしが帰ってからと聞いていましたのに。また嘘をつきましたのね、この人は。

「もう、本当に嘘つきな人ですこと」

わたくしが口を尖らせて拗ねたフリをしたら、ごめんごめんと彼は言つて、わたくしの頬にキスを落とした。それからわたくしの目を見つめて、

「綺麗で驚いた。そのドレス、とても似合ってる」

と優しくも情熱的に言つた。

彼のその声色と言葉で、かーつと顔が赤くなるのが分かつて。もうお付き合いをして何年にもなるというのに、彼の直球の賛辞には喜びと紅潮が隠しきれない。

「……あ、ありがとう、ごございます」

……悔しい。もう少し、大人な余裕を見せたかったのに、照れてしまつてそれ以外何も言えなかった。

彼の目線から隠れるように俯いていたわたくしは、ちらりと彼の顔を見上げた。彼は鼻筋の通った端正な顔に微笑を湛えていた。

「……ズルいですわ」

「うん? 何が?」

「だ、だつて……」

すらりとしたシルエツトに映える群青色のスーツを着た彼は、まるで貴公子のような気品に溢れていて。

「だって……あなたがとても素敵なんですもの……」

気恥ずかしくて、消えるような声で私は言った。

「ありがとう」

セシリアに褒めてもらえて嬉しい、と彼は言った。

ああ、それはわたくしの台詞なのに。あなたに綺麗と褒めてもらいたくて、わたくしは――。

「あ……っ」

顔を上げると、わたくしの視線が彼の黒く深い瞳と交差して、言葉を失った。眉目秀麗な容姿を備えるだけでなく、IS操縦者としても世界屈指の実力を持つ彼は、世の女性の憧れの的。その彼の深い黒の瞳が、世界でたった一人、わたくしだけを見つめてくれていた。

出逢ったときのこと、想いを伝えあったときのこと、将来を誓い合ったこと……彼の黒曜石のような瞳を通して想い出が蘇る。そしてわたくしは思った。彼と見つめ合うこの一瞬だけで、どれほど長く離れていても、わたくしは何度でも恋に落ちてしまうのだと――。

気がつけば、引き合わされるように唇を重ねていたわたくしと彼。そのとき、茶化すように口笛が鳴って、周りの人たちからの生暖かい視線に気づいて、わたくしは真っ赤になって彼から離れた。そんなわたくしの様子を見ては、彼がくつくつと笑っていた。

☆ ☆ ☆ ☆

パーティが終わって、ゲストの最後の一人を見送ったあと、わたくしは一人屋敷のバルコニーに出ていた。お酒が入ったのもあって、暖房の効いた室内が暑く感じられて、少し頭がぼーつとしていました。冬の夜風はとても冷たかったけれど、それが火照った身体を冷やしてくれるようで心地よい。

パーティは終始盛り上がっていて、途中ゲストの方が出し物をしてくれたり、使用人の皆がサプライズでケーキを出してくれたり、とて

も楽しい空間だった。何より、彼がずっと隣にいてくれて、それを二人で共有できたことがとても嬉しかった。素敵な一日だった、最高の誕生日だったと、心から思う。

現在午後一時。もうすぐ、日付けが変わろうとしている。わたくしの誕生日は終わり、明日はクリスマス。世の中の子供たちは、サンタクロースからのプレゼントに胸を躍らせていることでしょう。

そう、今年もあと一週間で終わってしまうんですね。今年もいろいろなことがあった。仕事も、プライベートも、とても充実していたように思う。どちらにも叶えたい目標があるから、来年からも頑張らないといけませんね。

そういえば、彼の姿が見当たらない。一緒にお見送りしたあと、お手洗いにいくと言って別れてから、そのままですわ。チエルシーに尋ねようかと思っただけれど、チエルシーは会場の片付けの陣頭指揮を執っていて席を外しているのです。

「風邪引くぞ」

優しい声が聞こえてその方を見たら、彼がバルコニーの入り口に立っていた。

「ここにいたんだな」とわたくしの隣まで歩いてきた彼は、手に持った上着をわたくしにかけてくれた。

「ちよつと、熱くて。頭を冷やしたいと思いましたの」

俺もだよ、と彼は微笑した。お酒で少し酔っているのか、彼の顔も少し赤い。お酒は人並み以上に飲める彼だけれど、今日はそれなりに早いペースでグラスを空けていたように思う。

バルコニーから望む夜景に目を向けると、彼がわたくしの肩をそつと抱く。左から、右肩に腕を回してそつと抱きしめるその仕草は、お付き合いを始めたときからずっと変わらない。わたくしは彼の大きな肩に頭をのせて、寄り添うように彼に身を預けた。彼と身を寄せあっているだけで、すべてが満たされる思いだった。

バルコニーから見えるロンドン市内の光は、いつもより少しだけ小さく見える。店もほとんどシャッターが降りて、車の数も少ないだろうし、大都市に似合わない静けさが、明日がクリスマスであることを

伝えてくるようで。

しばらくそのままできて、どのくらい経った頃でしょうか、彼がわたくしを呼んで話を切り出した。

「セシリア、改めて誕生日おめでとう」

「ふふ、ありがとうございます」

こうしてちゃんとお祝いできて嬉しいと、彼は言った。それから、抱いた肩をほどいて、わたくしと向かい合った。

「俺から、誕生日プレゼントがあるんだ。受け取ってくれるか？」

「まあっ！ 本当ですか？」

勿論ですわ、と頷いた。後ろを向いて、目を閉じてと彼に言われて、身体をくるりと回転させて瞑目する。

金属のひやりとした感触が首筋に通った。彼に合図をもらって目を開けると、首にあったネックレスが、新しいもの変わっていた。

金色のチェーンの先に、深いブルーのラピスラズリが埋め込まれていて、それが雫を象っている。ラピスラズリは一二月の誕生石。雫の形も、わたくしに合わせてくれたのでしょう。シンプルだけど高級感と落ち着いた魅力があつて、とても素敵なお品だった。

「ありがとうございますっ！ 嬉しいっ」

感謝を込めて彼にぎゅつと抱き着いた。

彼はどこか安心した様子だ。女性にアクセサリーをかう機会なんてそうないから、と。

……ふふっ、よかった。もし頻繁にアクセサリーを買っているなんて言われたら、このロマンチックな雰囲気の中、いつどこで誰に何を贈っているのか、根掘り葉掘り問い質す羽目になるところでしたもの。

「それから、もうひとつプレゼントがあるんだ」

不意に、身体を抱く力が強くなって、彼がそう言った。

「もうひとつっ？」

ああ、と答えた彼は、一度大きく息を整えてから、わたくしの耳元で小さくこう囁くのでした。

『前略。○月○日より、国際戸籍法の特例措置を行う。——とセシリ

ア・オルコットの入籍を許可する。国際ＩＳ委員会』……昨日、出国前に通達をもらったんだ」

……えっ？ え？ 今、何と——。

「セシリア。——入籍の許可、下りたよ」

にゆ、入籍の許可ですって？ でも、それはまだ少し先になりそうと、ついこの前あなたからお聞きしていましたのに……ほ、本当ですか？

半信半疑のわたくしに、彼がああ、と頷いた。

「結婚して、夫婦に……家族になれるんだ、俺たちは」

言い聞かせるように、彼が言う。彼が冗談で言っているのではなく、その言葉が紛れもない真実なのだ、考えるより先に理解したわたくしは。

途端、涙がボロボロと零れ落ちた。彼の背中に回す腕に力がこもった。

「で、でも、どうして……！」

急な話に喜びと驚きが入り混じるわたくしに、彼がひとつひとつ説明してくれた。

どうしても今日までに入籍の許可を得たくて国際ＩＳ委員会との交渉を急いだこと。その結果、諸々の細かい権利関係の調整を後回しにして、まず入籍の許可自体を得るようになったこと。日本政府、イギリス政府に通達されるより先にコネで内定が出たのを知ったこと。

「も、もうっ！ 意地悪っ！ そんな大事なことを、決まったら真っ先にわたくしに知らせるべきでしょう!？」

ボロボロ泣きながら彼の胸をどんと叩く。抗議するわたくしに、彼がくつくつ笑いながらごめんごめんと謝る。

また、これですわ。いつもこうやって謝るくせに、何度も何度も同じことをする。彼はいつもそう。いつも大事なところで嘘をついて、隠し通した挙句に、大事なタイミングで打ち明ける。その度にわたくしは心を揺さぶられてしまうのに。

——でも、彼だからいいとわたくしは許してしまう。だって、そんなあなたを愛してしまっただけ。嘘つきで、意地悪で、格好良くて、優

しいあなたを、どうしようもなく愛しているから。

「……長い間、待たせてごめん」

ううん、と首を振る。

いいの。こんなに素晴らしい今日という一日と、最高のプレゼントをくれたから。

「……たくさん寂しい思いをさせた」

ううん、ううん、とまた首を振る。

いいの。寂しい思いをした日もあったけれど、今こうしてあなたと抱き合えていることが何よりも嬉しいから。

「誕生日おめでとう、そして、メリークリスマス。この素晴らしい日に、改めて誓わせて欲しい」

そう言つて、わたくしの顔を上げて、涙を拭ってくれた彼。

「絶対幸せにする。俺と家族になつて欲しい」

その言葉に、わたくしははい、と大きくと頷いて、彼と唇を重ねた。両親を失い、一人きりだったわたくし、セシリア・オルコット。でも、それも今日でお終いのようですわ。わたくしに、家族ができますの。

時刻は、午前零時になっていた。わたくしの誕生日は終わって、今日は一月二十五日……クリスマス。

唇を離したわたくしは、目に映る最愛の人の笑顔を記憶に焼き付けて、「メリークリスマス」と彼に言った。彼もメリークリスマス、と小さく呟いた。

P. S. 今日両親のお墓に置いてきた封筒。その中身は、クリスマスカード。

——親愛なるお父様、お母様へ。今はただ、感謝していますわ。わたくしをこの世に産み落としてくださったこと、確かな愛をくださった

たこと。何歳いくつになっても、わたくしは決して忘れません。感謝を込めて、セシリア・オルコットより。

唐突だが、これから私の主のことをここに書き記そうと思う。齡七〇を越えた年寄りにもなつて、このような手記をしたため始めたことに我ながら多少驚いてはいるが、今年で主と出会ってからちょうど五〇年……半世紀が経つことを思い出し、私の人生を振り返ってみたくなつたのだ。

これは主のとある習慣に起因している部分も大きいと思われる。主にはお若い頃から日記をつける習慣があり、それが今でも続いているというのだから驚きである。

若い頃の日記を読み返しながら、私や老メイドにして幼馴染であるチエルシー・ブランケットに見せては、「こんなこともあつたのよ」などと言つて昔を懐かしむのが、最近の主のお楽しみらしい。一度見せてもらったページの何を何度も語られるものだから、つい「それは以前拝見いたしました」と私は苦笑いをして返すのだが、我が主は決まつて「そうだったかしら」とすつかり皺の増えた——けれど昔から変わらない眩しい笑顔を湛えるだけだった。

そんな主への憧れだろうか、今まで手を出そうと思いつつ、一度もしてこなかつた日記というものに挑戦している次第である。しかし私は大変に気分屋であり、毎日日記を残すのはとても難しいだろう、ということとは最初から分かつていた。そこで今回は、思い切つて私が生きた人生の数十年間について書き残したいと思う。伝記と呼べるほど大層なものではない。私自身は平凡な一般人であり、伝記というのであれば、それこそ偉大な我が主の日記を元に編纂して伝記とする方がよいに決まっているのだから。

故に、これから書き残すものは単なる記録である。偉大な主のお傍で生きた五〇年間の記録を、ここに記す。

偉大なる我が主への感謝と敬愛を込めて。願わくば、この手記が我が主——セシリア・オルコットの栄光ある生涯に花を添える一冊とならんことを。

オルコット家使用人、クレア・フラウシート。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

主は数十年に渡って我が国の要職を歴任し、イギリスを太陽のように照らした偉大なお方である。現在一線を退いているものの、その功績と名声は留まるところを知らない。

主はいつも穏やかな微笑を絶やさないお方で、それが世間でも広く知られる主の代名詞でもあるのだが、実は私どもを初めとした、ごく一部の身内にだけ見せる特別な笑顔がある。なんと表現すれば良いか、芸術的センスに乏しい私に形容するのは難しいが、人が持つ温かさも冷たさも内包しながら、本人の喜び、行為、あるいは甘えと言った想いが滲み、見た者を虜にしてしまうような、そんな笑顔だ。

昔、主の生涯の伴侶たる旦那様にそのことについてお尋ねしたことがある。そのとき旦那様は「光だ。俺の人生を照らしてくれる光」と表現された。ロマンチストな旦那様らしいと思いつつ、同じように主に伝えると「まあキザですこと」と、にべもなくさらりと流されていったのだが。ただ、口ではそう言いながらも満更でもない様子の主を見ると、結婚されてから何十年も経ち、歳の大きい孫までいる夫婦だというのに、お二人は相変わらずなのだ、と私は苦笑するばかりだ。

主のその笑顔を見る度、私は今でも思い出す。我が主と出会ったその日と、そして生涯の原風景となる、我が主の笑顔を。

我が主、セシリア・オルコットとの出会いは五〇年前の九月。その日、私の人生は大きな転機を迎えようとしていた。平々凡々を地で行くような私の人生。その大きな転換点となる瞬間は、不意に訪れた。

人生なんて何がきっかけでどう転ぶか分からない。そんな風に世に言われているが、当時の私はその言葉に半信半疑でいた。平凡に成長を重ねて、平凡に職に就き、どこかでいいと思った人と結婚して、子育てをしながら一生を終えていくのだろう——そんな一生を、私は疑わずにいた。

しかし、人生とは時に思いもよらない出会いや出来事で簡単に変

わかってしまうもの。それはまさにそうだと、「執務室」と書かれた豪華な扉の前に立つ私は呆然と考えていた。

「こちらです」

チエルシー・ブランケットと名乗る、メイド服を身にまとった赤髪の女性に案内された先の一室。彼女は上品な扉の前に立つと、コンコンと軽くノックした。

「お嬢様。フラウシート様が来邸しております。ご案内してよろしいですか」

「よろしくてよ」

よく聞いたことがある高い声がして、扉が開かれ、中で待つ人物の姿があらわになった。その女性が誰であるか、それを知らないイギリス国民はいないだろう。

デスクに腰かけているその人物。彼女は黒いスーツに映える金糸のようなブロンドの髪を結び上げ、眼鏡の奥に輝く蒼い瞳を、私と交差させた。

初めまして、と鈴が鳴る声が室内に響いた。このよく通る澄んだ声を聞いたのは、一度や二度ではなかった。テレビの電波越しに何度も何度も耳にした、イギリス国民なら誰でも知るような声だ。

「初めまして、クレア・フラウシートさん。オルコット家現当主、セシリア・オルコットですわ」

そう言って優しく微笑むセシリア・オルコット。化粧によって引き立てられた彼女の美貌は、同性である私でさえも思わずどきりとしてしまうほどで。

一瞬見とれてしまい硬直した私だったが、今が面接中なのだと思います。用意された席に腰掛ける前に自己紹介をする。

「は、はいっ！ クレア・フラウシートです。本日は、よろしく願います」

「はい、よろしく願いますわ」

緊張して声が少し震えた私に、オルコット嬢がにこりと笑う。

そのときの衝撃は、忘れるべくもない。こんな綺麗な人がいるのか、と現実を疑った。何にどう答えて、何を話したのか、当時のこと

はあまり思い出せない。

ただひとつだけ確かな確信があるのは、これが私の人生を変える邂逅であったということだ。強く、美しく、そして誇り高き『蒼麗の狙撃姫』^{ヴァルキリ}のちに生涯の主となる、セシリア・オルコットとの運命の出会いであった。

☆ ☆ ☆ ☆

少し、私の過去の話をしよう。若い頃の話だ。

私の名は、クレア・フラウシートと言った。茶髪に母譲りのそばかすがトレードマーク。身長は一五〇センチほど、スタイルは……まあ自分で言うのもなんだが悪くはない。総合的に見た目は中の上と言ったところであろう。すなわち平凡そのもの。

そこそこの大学をそこそこの成績で卒業し、そこそこの企業に就職。そこから数年が経ち、二十代も半ばに差し掛かったOL……だったのだが。

「はあ、何よりストラって」

六月の上旬。私は社内通達書に記された文字を読みげんなりしていた。中身を読めば小難しいことが書いてあるが、要約すれば「昨年

から経営不振が続いています。人件費が膨大だから削減します。今回は残念だけどあなたが対象です、ごめんね」というただそれだけの話だった。

しかも話が急すぎる。解雇はなんと七月末だと言う。あと二ヶ月でああなたは職を失うことになりまると言われても、イマイチ実感が湧かないのも無理はなかった。異議申し立てをして会社と戦うこともできたが、今の職に愛着も大きなやりがいも感じていなかったため、弁護士を立てて戦うだとか、そんな気はまるで起きず。引き継ぎやら転職活動やらに追われるうちにあれよあれよと二ヶ月が過ぎ、私は無職になった。

結局、転職先も決まらなまま、八月の上旬。私は何もする気が起きないまま、昼過ぎに起き出しては、家のベッドで寝転がって、端末

で求人サイトめぐりをしていたのであった。

「クレア、お昼できたわよ」

昼食ができたらしく、母親が部屋をノックして入ってきた。

「つてあんた、またそんな寝間着でゴロゴロして。次の仕事は決まったの?」

「まだ」

「もう。まだ若いってのに、そんな生活してたんじゃ枯れちゃうわよ」
呆れたような母親のお小言に「はいはい、わかってるって」などと
気のない返事をしつつ、用意してもらった昼ご飯にありつこうとリビングに移動した。

遅起きた昼下がりに特有のぼんやり感に酔いながらサンドイッチ
にかじりついていると、電話が鳴った。何かしら、と呟いた母が電話
に出た。

「ハロー、フラウシートです。……はい、はい、いつも夫がお世話に
なっています。……え?」

母がいつものように電話していたのだが、顔がみるみる青くなり、
口調にも焦りが浮かんできていた。

「お、夫が!? 本当にですか!? 今どこに!」

母は慌てた様子だ。父は仕事中的はずだが……。父の身に何か
あったに違いない。明らかにただごとではなさそうだ。

受話器を下ろした母。流石に心配になって母に尋ねた。

「お父さん、何かあったの……?」

「……お父さん、交通事故に遭って大怪我したんだって」

「お、大怪我!? 大丈夫なの!」

ガタイが良く頑丈な父が大怪我したというのだから、大変な事態で
あることは容易に想像できた。

「とにかく命に別状はないって。本当によかったわ」
「そ、そう……」

涙ぐむ母の一言を聞き、心から安堵した。

——よかった。

「今ロンドンの病院にいるそうだから、行ってくるわ」

「私も行く」

母が荷物をまとめて出かけるのに合わせて、私も家を出た。向かった先の病院で待っていたのは、全身に包帯を巻き付けられた父の痛々しい姿であった。

首が動かせないらしく、私と母は覗き込むように父の顔を見た。擦りむいた箇所が多すぎて、顔全体が絆創膏とガーゼで覆われていた。父の手を母が握ると、父はそれをゆっくりと握り返した。

「お父さん……！」

母が堪え切れずに泣き出したのにつられて、私も泣いてしまった。

「ぐす、お父さん……よかった」

ああ、と声になっているのかすら怪しい、もはや呻きに近い返事であったが、父が生きていることの証ではあった。それで十分だった。父との突然の別れにならず本当に良かった。

そのとき、私はただ安心するばかりであった。しかし、凶らずもこの出来事が、知らずにいた父の人生について知り、主と出会うきっかけになったのだから、人生とはわからないものである。

それから一週間が経ち、父の怪我は一応順調に回復していた。一応というのは父の怪我が全治一年を要する大怪我であり、リハビリなどを含めると向こう半年は入院生活を強いられるためであった。

そもそも父の怪我は、横断歩道を歩行中に信号無視をした大型車に撥ねられたことが原因であった。運転手は飲酒運転をしており、事故後に逃走したが、まもなく逮捕されたそうだ。犯人は全面的に罪を認めているようで、多額の損害賠償が父に支払われると聞いた。犯人を許せないと思う気持ちはあったが、それよりも父が無事だったことの安堵感が勝っていた。

父の容体が落ち着いたこともあって、普段のようにパートタイム労働に出かけた母に代わり、父のいる病室を訪れた私は、見舞いの品を片手に父の待つベッドへと赴いた。

「お父さん、来たよ」

「……クレアか。わざわざすまん」

何とか話せるくらいには回復した父だが、身体はまだ起こせないと言者から言われていた。

「いいって。どうせ今ニートだし」

無機質な病室が気になって、「何か見る？」と部屋のテレビのリモコンを手にとってみたが、父は構わん、と特に気にしていない様子だった。

小さな椅子に腰かけて、寝たきりの父の横に腰かけた。

父と二人きりでいるなんて何年振りだろうか。このくらいの歳になれば特別変なことではないのだろうが、父は『同じ家に住んでいる人』くらいの認識でしかなかったように思う。ガーゼの隙間から覗く白髪の混じった茶色い髪が、自分のそれとそっくりで、自分と父が血のつながった親子であることを改めて実感したような気がした。

父がクレア、と私を呼んだ。こうして名前を呼ばれたことでさえ、久しぶりな気がした。

「仕事、決まったのか」

「まだ」

「……そうか」

「近いうちに決めたいとは思ってるよ」

「そうか」

昔から変わらず口下手な父。返事がそっけなく会話が長く続かないが、この人の娘を二十何年も続けている私には慣れたものである。

「それで、仕事の話だが」

「うん」

「何か希望はないのか」

「特にないよ」

父はまた「そうか」と答えた。ここまで父が私の仕事について尋ねてくることは珍しい。学生の時も、就職してからも、私の進路や職業について一度も口出しされたことはなかったのだが。

次の職業については、本当にこだわりも希望もなかった。人並みに生活できるくらいの給料と、少しくらいやりがいがあれば、何でもせつかくだから今までとは別のことをしてみてもいいかな、とは思っ

ていた。その旨を父に伝えたところ、そうかと父は答えた。

「クレア、ひとつ提案があるのだが」

珍しく父が話を切り出した。いつになく真剣な口調で話す父に、私
が何、と尋ねた。

「お前が良ければ、だが」

「うん」

「私の職場に来てみる気はないか」

……はい？ お父さん、今、何て？

「お前が失業したと聞いてから考えていたのだが、どうだ」

「ちよ、ちよつと待って、話が急すぎて理解できてない」

私がお父さんの職場に？ な、なんでそういう話になったわけ……
!?

父に事情を聞くと、父の職場では、出産や退職など諸々の要因が重
なって離職者が増え、人手が不足しているという。さらに父の怪我も
あり、現在父がいたポジションには急遽別の人間が入り職務を代行し
てくれているが、その影響もあつてますます人手不足が深刻化したの
だとか。

まあ、話は分かった。要は人手が足りないってことね。たまたま良
さげな労働力（私）が身内に転がったから、候補に挙がったと。

——だがしかし、そもそも大事な情報が抜け落ちている。

「私、お父さんの仕事知らないんだけど」

「……そうだったか」

ばつが悪そうな父。だって、仕事のことなんて一回も話してくれた
ことなかったじゃん。

聞かれたことがなかったからな、と父は言った。確かに今まで私か
ら聞いたこともなかった、特に気にしたことなかったし。そのあた
り物凄くドライなのがいかに我が家という感じだ。

「私は、とある名家の執事をしている」

へえ、意外だ。ガタイはいいし腕っ節は強いみたいだから、どこか
の警備会社か何かに勤務しているものと勝手なイメージを持ってい
た。

執事かあ、意外とオシャレなことしてたのね。

「で、どこの？」

「オルコット家だ」

……うん？

「お前も知っているとは思いますが、セシリア・オルコット様の邸宅だ」

「……はい？」

——当時の私を一言で表現するならば、呆然という言葉が一番適していたように思う。

自らを、そして父も母も平々凡々であるとは断じて疑わなかった私は、このとき初めて父がセシリア・オルコットの執事であったことを知ったのであった。

「セシリア・オルコットって『あの』!？」

「ああ、その方だ」

「お父さんあの人の執事なんてやってたの!? 何で言ってくれなかったのよ!」

「聞かれなかったからな」

「そうだけど!」

——と、ここから我が主セシリア・オルコットとの出会いに繋がるわけである。

私には荷が重い、と父の話を一度は断ろうとした私であったが、一方で平凡などにでもいるOLでしかなかった私が、イギリスを代表する有名人の使用人として働くことにどこか興奮を覚えたのは事実だった。

結局面接で落ちるだろうし、有名人に会いに行こう、くらいの半ばダメ元の気持ちで父の話を受けた私だったが、何の因果か、面接を受けたあとに届いた一本の電話で、私の人生は大きく変わることになる。

☆ ☆ ☆ ☆

オルコット家使用人、オーウェン・フラウシート。これが社会人と

しての父の肩書きであり、二十数年父の娘でありながら知らずいた新事実であった。父がそんな仕事をしていたということにも大概驚きだが、そのコネありきとは言え、まさか娘の私までもがオルコット家で働くことになるとは、誰が予想できたであろうか。

突然の失業と父のコネによるキャリアアチェンジ。それに伴い、ライフスタイルにも大きな変化が生まれていた。

まず、引越し。私の職場であるオルコット家の邸宅は、ロンドンの郊外の一等地に建てられた豪邸である。市内にある私の実家からは少々遠く、市内の地下鉄やバスを駆使して行くには煩雑である。父は車で通勤していたのだが、私には自分の車がないため、実家から通勤するのは素直に諦め、この際と一人暮らしを始めることに。オルコット家には専用の使用人寮があり、使用人は格安の家賃で入居ができるとのことだったので、新居はそこに決まり、とりあえず最低限の荷物だけをまとめ引越した。

生活リズムも直さねばならなかった。とてもではないがニートしていたときと同じ生活は送れない。朝は決まった時間に起き、オルコット邸に赴いて日々の職務にあたる。眠気眼を擦りながらも寝坊せず毎日出勤できているのはOL時代の貯金と言わざるを得ない。

と、このような変化がありつつも、オルコット家の使用人として、制服であるところのメイド服（トラディショナルな意匠を残しつつ現代的にブラッシュアップされた制服で、なかなか可愛い）に身を包んで仕事にいそしんでいた私は、廊下ですれ違った輝くブロンドの髪色が目に入った途端、ぴんつと背筋が伸びるのを感じた。

「セ、セシリアお嬢様っ！」

「あら、クレアさん」

私を見るなり、名を呼んだお嬢様。

お嬢様こと、セシリア・オルコット。イギリス国家代表IS操縦者にして、由緒正しき名家オルコット家の現当主。若くして国家代表の重責を担い、その名に恥じぬ卓越したISの操縦技術を持っている。ここ最近では最大規模の国際大会モンド・グロッソで入賞するなど、その活躍は留まるところを知らない。またその容姿も端麗そのもの

であり、ブロンドに輝く髪を揺らし蒼いISを駆って各国の猛者を撃ち抜くその姿は、世界中の人々を魅了した。

容姿、家柄、実力……すべてを兼ね備えた彼女はまさにパーフェクト。国内での人気も絶大で、私のような平凡に平凡を重ねたような一般人からすれば雲の上のそのまた上のような存在——だったのだが、今こうして目の前にいるのが、セシリア・オルコットその人であった。というか、正真正銘私の雇用主であった。

セシリアお嬢様は、私に会うなり彼女の代名詞である柔らかい微笑を私に向け、ごきげんよう、と挨拶をした。私は慌てて姿勢を直して「おはようございますっ」と挨拶を返した。

「お仕事には慣れたかしら？」

「は、はいっ、少しずつですが……」

「ふふ、よかったですわ」

にっこり笑ったお嬢様。

——ああ、なんて綺麗なんだろう。毎朝鏡でこんな顔を拝めたら幸せに違いない。

「バトラーの容態はいかがかしら？」

一瞬馬鹿なことを考えてしまったが、お嬢様から父の話題が出たので、慌てて現実に戻った。

「バトラー」とは父のニックネームなのだ、以前お嬢様に教えていただいた。ニックネームも何も役職名そのもののだが、何でも堅物でいかなるときも執事としての姿勢を崩さない父の姿を見て、「あなたは執事の中の執事ね」とお嬢様が仰ったのがハマったらしく、オルコット家でこの呼び方が定着したらしい。以来バトラーとは役職ではなく父個人を指す呼び方であるそうだ。

使用人の組織体系としては、一応メイド長であるチェルシー・ブランクネットを使用人のトップとはしているものの、チェルシーはセシリアお嬢様の私的な副官としての役割も強いため、実質的な家の使用人の統括はバトラーこと父オーウェン・フラウシートが行っていたとのことであった。なお、父が休職状態である現在、父が行っていた職務の大半はチェルシーが肩代わりしている状態で、チェルシーの手が回

らない職務の一部を他のベテラン使用人が行っているらしい。私はその見習いというわけだ。

父がそこまで職場で重要なポジションにいたのも驚きでしかない。ここに来てから、いや正確には父が事故に遭ってから、知らなかった父の生き様を目の当たりにしてばかりだ。

「回復は順調と聞いています。脚に後遺症が残るかもしれない、とは聞いておりますが……」

「そう……」

残念そうに眉を落としたお嬢様。お嬢様と父の付き合いは長いようで、私とは鉢合わせなかったが、何度か病室にも足を運んでくださったようだ。

ちなみに、母は父がこういう仕事をしていることはとつくに知っていたらしい。結局知らなかったのは私だけということだ。

「快方に向かうのが待ち遠しいですわね」

「はい」

父を心配してくれているお嬢様に感謝しつつ、仕事があるので、私が立ち去ろうとすると、お嬢様はそれでは、と手を振って離れていった。

その後ろ姿も美しいの一言に尽きる。流れる髪の毛も優雅そのもの、脚が長くて腰も高いし、歩き方ひとつとっても気品に溢れていた。お嬢様とお近づきになって改めて強く実感する、自分とお嬢様の大きな差。いいなあ、とどこかで思ってしまったている自分がいた。

どうしようもなく、憧れてしまう。セシリア・オルコットという、特別な存在に。

夜になって仕事が終わった私は、市内に繰り出していた。翌日が休みということもあり、夜更かししても何も問題ない。

行き先は——バー、「Gloria」。

「いらっしやう」

ドアを押して、店内に入った私を迎えたのは、カウンターに立つ口元に髭をたくわえた男性——この店のマスターだ。

「こんばんは」

「おうクレア、久しぶりだな。半年も顔見せねえから何かあったとは思ってたけどよ」

「いろいろあったのよ、いろいろ」

マスターの前の席に腰かけて、「モヒートよろしく」と注文するとマスターはあいよ、と気のいい返事をしつつグラスにカクテルを作り始めた。

この店はOL時代にたまたま見つけた店で、静かな雰囲気と美味しいお酒とおつまみが気に入ってよく通っていた。最近の仕事の関係もあって顔を出せていなかったが、今日はそういう気分だったので邪魔することにした。

マスターがカクテルを作り終わると、私の目の前にグラスが差し出された。一口煽ると、ミントの爽やかな香りが広がって……はあ、幸せ。

適当に頼んだおつまみもカウンターに揃い、ちびちびつまみながら美酒を堪能した。

「んで、最近は何してたんだ」

マスターがグラスを拭きながら尋ねてきた。

仕草から見た目、仕事ぶりもなかなか様になってはいるのだが、この男、まだ三十いくつの歳と以前聞いて非常に驚いた。何でも前の主人が体調を崩してしまい、その一人弟子であったこの男が店を継ぐことになったと聞いた。この男の素性に関しては謎に包まれており、アラン・シルバーという名前くらいしか知らないのだった。

「何してたって、就活よ就活。もう職場も決まったし、働いてる」

「ほー。何の仕事だよ」

「使用人。オルコット家の」

「ふーん、オルコット家ねえ。……は？」

マスターの顔色が変わった。「あの？」と信じられないように聞くので「そう」と答えた。まあ普通のOLからの大胆なジョブチェンジだ、驚くのも無理からぬこと、というか私自身が誰よりも一番驚いている。

「ほお。クレアが、あのオルコット家にねえ」

世間つてのは案外狭いもんなんだな、とぼそつとマスターが言ったが、イマイチその意味がわからなかった。

おつまみのチーズをフォークで突いたところで、空になったグラスをマスターに返した。

「それじゃマスター、次よろしく」

「あいよ」

久しぶりに行きつけの店に来たからか、新しい仕事への戸惑いや不安も忘れて、私の心は弾んでいた。

顔馴染みの店主からカクテルを受け取り、英国の夜は深まっていた。そんな秋の、とある一日。

当時の私の中にあつたセシリアお嬢様への感情はと言えば、強烈な憧憬と、その半面に潜むほんの少しの嫉妬と劣等感だけ。

私がセシリアお嬢様を生涯の主と思うようになるのは——……もう少しあとのこと。

オルコット家の使用人として働き始めて数ヶ月。その日は朝からひどい雨だったことを覚えている。

私は——やらかした。

「——大変申し訳ありませんでした」

俯いて私は謝罪の言葉を口にする。その先にいるのは、セシリアお嬢様の右腕にしてメイド長であるチエルシー・ブランケット。彼女は厳しい顔で私を追及していた。

とある仕事上のミスだった。原因、結果ともに私の全面的な過失。言い訳の余地はなかった。私の不注意が招いた、単純にして大きなミスだ。

「クレアさん、このミスは看過できません。どうしてもかはお分かりになるでしょう。あなたの行動がお嬢様の、ひいてはオルコット家の品位を貶めることになるのです」

「……はい」

「こんなことを繰り返すようならばお仕事は立ち行きません。新入りだからと言い訳せず、あなたも誇りあるオルコット家の一員であるという自覚をお持ちなさい」

はい、と小さく返事をした。その一言で、私への叱責は終わった。私個人への嚴重注意で済んだと言えば済んだのであるが、精神的なダメージは小さいとは言えなかった。

誰だつて怒られたくはない、それは真面目に仕事をしているなら、尚更である。

「はあ……」

重いため息が出た。ここまで大きなミスは仕事を始めてから初のこと、反省と後悔は尽きない。こんなことがあった日には、仕事へのモチベーションもダダ下がりである。

ミスの繰り返しだけはすまいと誓い、私は仕事に戻ったが、心の中ではずっとわだかまりがあり、消えることはなかった。

「父なら、こんなミスをして怒られたりしなかったんだろうな」と、ど

こかで悪い自分が僻みを燻ぶらせていたのだった。

——その夜。バー「Gloria」にて。

「あく、無理よく、私には〜」

「……クレア、お前飲み過ぎじゃ」

いつものようにマスターがグラスを拭きながら心配そうに言うが、すっかり酒が回った私には関係なく。

「いーの！ お嬢様にはお休みいただきたいからー！ 今日私がどれだけ飲み続けても、ノープロブレムっ！」

「待て待て、プロブレムしかねえだろバカ。お前が外でやらかしたら、迷惑かかるのはオルコットの嬢様に決まってるんだろ」

「はあ!? あんたまでそんなこと言うの!?! 仕事の愚痴くらい言わせなさいよ！ お代だって払うし、どんだけ飲もうが私の勝手でしょーが！」

「わーったわーったやめやめ！ 俺が悪かった！ 好きなだけ飲めやチクシヨウ！」

「へへ、そう来なくっちゃね！ んじゃ次よろしく！」

「……へいへい」

最悪潰れたら俺が面倒見りやいいか、なんてマスターがカクテル作りながら言った。普段ならば男の前で酔い潰れて世話になるなんぞ無防備すぎるでしょ、と理性が働くところだが、ご覧の通り完全に酔っ払った私に正常な判断力はないのであった。

おまけに、酒の力で仕事で積み重ねたストレスがぼろぼろと口から飛び出てきた。

「ったく、どいつもこいつも品格だの責任だのってうっさいのよ。一般人の私にや荷が重いつつーの」

「そんなに嫌いか？ オルコット家の仕事が」

見かねたマスターからのその問いに、私は無言になった。

「本当に嫌なら、とつくに辞めててもいい頃だと思うけどな」

「……ふんっ」

正直に言つて、嫌いだなんてことはない。キャリアを考えれば給与も待遇も破格、仕事は楽ではないし要求されるものは多いけれど、やりがいであったのである。一緒に仕事する人たちもみんな気さくだし、仕事に対して真面目で誠実だから、仕事のモデルとしては理想的だ。

何より、主たるセシリアお嬢様は本当に素晴らしい方だった。私では到底及ばないような才覚と気品と人格を併せ持っている。そして、それらが生まれ持った以上にお嬢様の弛まぬ努力によって磨かれたものであることも知った。テレビ越しに見ていたイメージが悪くなるどころか、セシリアお嬢様のことを知れば知るほど、素晴らしいお方なのだと思えるようになった。

セシリアお嬢様は十分すぎるほどに、お世話をしたいと思えるお方だ。現当主である彼女の人柄があだから、オルコット家は明るく穏やかな雰囲気なのかもしれない。それを心地よく感じている自分がいるのは、間違いないのに。

——なのに。どうして私はこんなにも不満ばかりなんだろう。「じゃあお前、なんでそんなに不満が出てくる」

その疑問はマスターが代弁してしまった。誤魔化そうとカクテルをグビッと煽つて、「そんなの、私が知りたいわよ」と悪態をついた。「嘘つけ。……ほんとはお前、拗ねてんだろ」

「ちよ、待つてよ！ 拗ねてるってそんな」
「大方、『私なんてどーせお父さんのスペアとしか見られてないんだ』とか考えてんじやねーの？ 違うか？」

言い返そうとしたが、ぐうの音も出ない。凶星だったらしい。……そっか、拗ねてたんだ、私。心のどこかで、オルコット家の中で慕われていたお父さんと、上手くいかない自分を比較して。

仕事に関して、邸の人たちが父を引き合いに出したことは一度足りともない。「あなたのお父さんはね」と、思い出話をされる度、勝手に比較されていると思ひ込んでいたのは、私自身だった。

それだけじゃない、きつと私は父にも嫉妬していた。平凡だと自覚してやまない自分の父親が、特別なオルコット家で特別な人だったことを知らなかったから。

「割り切るべきだろ。お前とお父さんは、別人なんだからよ」

「……うん、そうする」

グラスに残ったカクテルを一気に流し込んだ私は、火照った顔を冷ますように手で仰ぐ。

——私、まだまだだ。こんなことではいけない。もつとオルコット家に相応しい人間にならないと。

ちよつとだけ、楽になった気がした。ありがとマスター、それと美味いお酒！

「あーもうっ！ やっぱ飲む！ 明後日のお仕事から頑張るためにも、今日は酔うー！」

「おう。そうしろそうしろ」

悩みと一緒に空になったグラス。マスターに次のカクテルを注文した。

届いたグラスを受け取って、一口付けようとしたその時だった。扉が開くカランカランという音が聞こえたのは。

「もう、ひどい雨ですわね。マスター、こんばんは」

びくり、と条件反射で振り返る。

こ、この声は、もしかや……！！

「おー、お嬢！ 久しぶりじゃねえのー！」

「お久しぶりですわね。ふた月ぶりくらいかしら」

「なかなか来てくれないもんだから、仕事が大変なんだろうなって思ってたよ」

「正解。このところ新しい代表候補生の選定に手間取っています。何せ今年は特に粒ぞろいの年だったものですから」

マスターと世間話をしながら、お嬢と呼ばれたそのお方は、変装用のサングラスと帽子を外し、その波打つブロンドの髪を解いた。スーツ姿のその人は、何を隠そう、私の主であるセシリアお嬢様その人であった。

なお都合の悪いことに、店の中には私とマスターとお嬢様の三人だけ。当然、私の存在がバレないはずはなく。

「あら？ あなた、クレアさん？」

「あ、あ、あはは……」

乾いた笑いしか出てこない私。酔いが急激に冷めていく。

……き、気まずい。つい五分前まで仕事の愚痴をこれでもかと垂れ流していたと言うのに。そもそも、何故こんなバーにお嬢様が来るの？

冷や汗が止まらない状態でマスターにどうということ、と目で訴えると、マスターは笑いを必死に堪えていた。

「ああ、お嬢な。ちよつと前からこの常連なんだよ。婚約者さんがイギリスに来たとき二人で寄ってくれたのが縁だね。一年半くらい前からか」

お嬢様が「そうなんですの」と柔らかく微笑んだ。

そんな馬鹿な。なら私、お嬢様と知り合う前からニアミスしてたってこと!?

隠れ家だと思ってたら、見つかりやすい場所だったというオチであった。そういえばマスター、私がオルコット家でお仕事してるって言ったとき意味深な顔してたわね。お嬢様が常連なのを言わずにだんまりとは、この男中々いい性格をしているではないか。

「は、早く言いなさいよそれ……!」

わなわなと震える私に、「わりいわりに」と笑いながらマスターが言った。この顔、絶対に反省してない。いつかシバく。

「クレアさん。隣、よろしいですか?」

「はいっ! も、申し訳ありません、すぐに退きますので!」

お嬢様に声をかけられて、途端に焦る私。お嬢様のお隣なんて怖い。しかし、お嬢様はそのままでもいいですわ、と仰った。

「そんなに気を使わなくてもよろしくってよ」

「で、ですが……」

「ここは邸の外ですし、あなたもお休みなので。今日は主と使用人ではなく、同い年の女性同士、仕事終わりの一杯といきましょうね?」

「は、はい……」

私が頷くと、にこりと笑ったお嬢様。そんな口説かれ方をされて

は、私に打つ手はなかった。お嬢様はバッグを荷物入れのカゴに置くと、私の隣に腰掛けた。

「ふう。……ではマスター、いつもの一杯」

「はいよ」

マスターがカクテルを作り始めたのを見て、私は隣に座ったお嬢様を見つめた。

スタイル抜群だ。丸椅子の上に乗るウエストからヒップまでのラインは、魅惑的な流麗さだった。バーのカウンターに座るだけで絵になる。

しばし見蕩れた私だったが、いつも付き従っているブランケットさんがいないことに気づいて、お嬢様に問いかけた。

「あの、お嬢様。ブランケットさんは……」

「チエルシーとは、時々こうして別行動していますの。チエルシーも毎日私と一緒にでは、息が詰まってしまいますから」

「……存じていませんでした」

「無理もないですわ。それくらいチエルシーはずっと私に付いて尽くしてくれていますから。これはチエルシーにも少しくらい自分の時間を作って欲しいと思って、わたくしから言い出したことなのです。……実は、わたくしがチエルシーの目から逃れるための方弁でもあるのですけれど」

これは秘密ですわよ、と茶目つ気たつぷりにウインクするお嬢様。……可愛らしいことこの上ない。

「ジントニック。お待ちせ」

マスターがお嬢様の前にグラスを差し出した。お嬢様はありがとう一言告げてグラスを受け取ると、私の方に向ける。

「それでは、外は生憎の雨ですけれど。素敵な夜に、乾杯」

「か、乾杯」

お嬢様がグラスを掲げたのに合わせて、自分もグラスを掲げた。お嬢様はくっくとグラスを傾けて、一口味わった。

「ふう。……美味しい」

最高の一杯ですわとお嬢様が惜しめない賛辞を送ると、マスターは

どうも、と小さく返した。

なんだか、不思議だ。少し前までテレビの中でしか見たことのない有名人が、自分の上司で、しかも隣でお酒を飲んでいっているなんて。「そんなに意外かしら。わたくしが来ていること」

微笑を浮かべているお嬢様が尋ねた。じっと見ていたから見透かされたらしい。

「い、いえっ、そんなことは……」

誤魔化すようにグラスを煽った。すっかり毒気を抜かれて慌てふためく私を、マスターがおいおいと茶化してきた。

「さっきまでの勢いはどうしたよクレア」

「う、うるさい」

お嬢様の前なんだから、緊張するなっの方が無茶だ。

「あら、そんなに豪快な飲みっぷりでしたの？」

「おーよ、ギャーギャー喚き散らしながらガブカブ飲み散らしてやがったよ」

「マスター！ やめてよお嬢様の前で！」

いくら顔馴染みだつて言ってもこういう容赦ないところはダメだと思おう！ ほんとに！

焦る私を見て、お嬢様はくすくす笑っていた。

「良いことですわ。お仕事の愚痴くらい、どこか吐き出すところがありませんと」

お嬢様はそう言つて、グラスを傾けて空にした。いい飲みっぷりだった。

「さあマスター、次を」

「お嬢、ペース早くねえか？」

「構いませんわ。今日は酔おうと思つていますから」

「そっか、いろいろ溜まつてんだな」

「ええ、それはもういろいろと」

次のカクテルが来ると、お嬢様は一口含んで私に話しかけた。

「ねえクレアさん。今日はわたくしの話相手になつてくださるかしら？」

「私が、ですか？」

良いのだろうか。私が雇い主であるお嬢様のお話相手を務めるなんて。

「はい。わたくし、こうやって話せるお友達がありませんの。聞いてくださる？」

お嬢様と直接話せる機会、これってかなり貴重なのではないだろうか。しかも、こんなプライベートな場で。

「……私で、良ければ」

控えめに言った私に、「ありがとう」とお嬢様が微笑んだ。

——その、三〇分後。これ見よがしにグラスの氷をころころと回しながら上司のセクハラに憤るお嬢様の姿があった。

「もう、信じられませんわ！ あの男、何度も何度も何度もわたくしのことを口説いてきて！ わたくしには将来を誓い合った婚約者がいますと何度も突き放していますのに！」

「は、はあ……」

「立場上わたくしが強く拒否できないのを良いことに食事デートだと擦り寄って来ますのよ。気色の悪いこと！ 信じられますか！」

あのニヤけ面の眉間をスナイパーライフルでぶち抜いてやりたいですわ、と恐ろしいことをのたまうお嬢様。『蒼麗の狙撃姫』ヴァルキリーの異名を持つほどのお嬢様の腕前で言われると洒落にならない。

すっかり出来上がってしまったお嬢様に完全に面食らっている私だったが、マスターは見慣れているのかそこまで驚いた様子はなく、「言わんこつちやない」と苦笑いしていた。

「あんた、そんなに酒強くねえのにペースが早いんだよ」

「美味しいお酒を出すマスターのせいですわ」

「へへ、嬉しいこと言ってくれるねえ」

「そういえば、彼もまた来たいと言っておられましたわ」

「そうかい。若旦那にはいつでも待ってるぜって伝えといてくれよ」

「お任せ下さいな。まあ彼のことですし、イギリスにいらしたら、わたくしから言わずとも足を運ぶことでしょう」

彼はお酒好きですもの、とマスターから次を受け取り、おつまみのチーズとサラミをつつくお嬢様。バーの店主に名家の令嬢、そしてその使用人の奇妙な晩酌は進んだ。

お嬢様が来てからというものの、借りてきた猫のように大人しくなっ
てしまった私は、普段見てきたお嬢様と今のお嬢様のギャップに戸惑
うばかりであった。お酒飲んで、酔っ払って、上司の振る舞いに愚痴
るお嬢様はこう、年相応といふかなんといふか。

呆然としていた私に、お嬢様がむっと口を尖らせた。

「……むう、クレアさんったら遠慮ばかり。わたくしはもつと仲良
くなりたいですわ」

「そ、そんな、恐れ多いです」

「わたくし、皆さんが思っているほど大人ではありませんのよ。スト
レスが溜まればこうして愚痴だって言いますわ」

ぐつとグラスを傾けたお嬢様。使用人になってまだ歴が浅い私だ
から、お嬢様のこんな一面を初めて見るので戸惑っているのは否定で
きない。

「はあ。ねえ、クレアさん。バトラーは大丈夫ですか?」

いつぞや以来に父の話題が出た。

「怪我の回復は順調だそうですけれど、わたくしが詳しい容体を聞いて
も『問題ありません』の一点張りで詳しいことは何も言ってくださ
らないのよ」

心配していますのに、と不満そうに言うお嬢様。主に対してすら自
分のことは必要最低限しか伝えないあたり、父らしいとは思った。
父はあまり自分のことについて話したがらない。

そしていつの間にか、マスターがふつと私たちの前から消えてバツ
クヤードへと移動していた。

「それは……はい。順調と私も聞いています。ですが、最近父や母
と連絡をとる機会も少ないもので、詳しいことは」

「あら、どうして?」

「その、私も父も母も、昔から放任というか、そういう部分に関しては
ドライと言いますか……」

「好きにしなければいいということかしら。信用されているのね」

信用されている、とお嬢様は表現した。確かに、そうなのかもしれない。

別に愛されていないなかったとかそういうことではなく、なんかこう、必要以上にベタベタしないというか。父がそんな感じだったので、母もそれに倣っていたように思う。この親にしてこの子ありと言うか、そんなところだ。

お嬢様も思うところがあるのか、バトラーらしいですわ、と苦笑した。

「いいですわね。クレアさんが羨ましいですわ」

「……はい？」

——羨ましい？ お嬢様が、私を？

驚きのあまり失礼ながらも一度聞いてしまった。

「だって、バトラーのような素敵なお父様がいらっしやるんだもの。

……わたくしには、もう父も母もいませんから」

グラスを軽く回しながらも、少し寂しそうにお嬢様は言った。

あ、と思わず声が出てしまった。そうだった、お嬢様のご両親は既に他界しているのだと、今更ながらに私は思い出して、私は言葉に詰まった。

「普通のお家で育って、学校に行って、普通にお仕事をして……そんな人生を夢見た日もありましたの」

亡き両親への想いを馳せているのか、少し天を仰いでお嬢様は言った。お嬢様の両親が事故で死別したのは、お嬢様がまだ一〇歳を過ぎて少しの頃だったと聞く。

その頃の私は、思春期前後の多感な時期で、ちょうど父や母との距離感に悩んでいた時期でもあったように思う。必要以上に反発したり、大人になりたくて背伸びしたり、年相応に悩んだりして今があるのだから、その時期に親を失ってしまったお嬢様が複雑な感情を持って余っていたとしても、何も不思議ではない。

「今はもう吹っ切れましたけれど。両親を失った分の幸せは、彼や邸の皆にもらっていますから」

にこり、とお嬢様は笑った。

「父の代わりになつてくれたのが、あなたのお父様ですの。母代わりは、そうですね、給仕係のマーガレットかしら。姉代わりがチェルシーで……とにかく、使用人の皆がわたくしを支えてくれて、今のわたくしがありますの」

お嬢様は、自信と誇りに満ち満ちた瞳で私を射抜く。

その蒼穹の瞳は、まるで宝石のように輝いていて。容姿だけではない、彼女の心の在りようが、生き様が美しいのだと私は知った。そしてそんな彼女を育てたのは、オルコット家の人々なのだと悟った。

お嬢様が「バトラーの好物、ご存知かしら」と尋ねた。「知っています」と私は答えた。

「コーヒーです。父はほとんど趣味はないのですが、コーヒーには凝っていて」

「挽き方から淹れ方までこだわっていましたわね。家でもそうだったのかしら？」

「はい。よくわからない豆を買ってきては、自分で焙煎したりもしていました」

「そうそう。あ、そうですね、クレアさん、バトラーのコーヒーを飲んでみたことはありませんの？」

「何度かあります。でも、苦くて……」

「そう！ 彼ったらブラックしか飲まないんですもの。わたくしも飲みたいとねだったりしたものですけれど、苦すぎてあとでミルクとシユガーをたくさん入れて飲んでいましたわ」

父の他愛のない話でお嬢様と私は盛り上がった。

そのときが初めてだったかもしれない。今まで遠い雲の上の存在だと思っていたお嬢様が、ずっと身近な存在に感じたのは。オルコット家使用人としての父の姿は知らなかった私だが、立場は違いど同じ人間、父の人柄が変わるわけではなく、こうしてお嬢様と父の話をすると、お嬢様がどれだけ父のことを見ていたのか、そして慕ってくれていたのか伝わってくるようだった。

「ずっと思っていましたの。クレアさんは私にとって、同い年の姉妹

のような存在なのではないかと」

「姉妹、ですか？」

「ええ。わたくしにとって、バトラーはお父様も同然。そのバトラーを父に持つ者同士、言わば姉妹のような関係ではありませんこと？」

同じ人を父に持つ者同士、姉妹のような存在だとお嬢様は言った。

まさか、最初に会ったときからお嬢様が私のことを姉妹のように思ってくれていたなんて。俯いた顔を上げたら、お嬢様は「血の繋がりもないのに、失礼かしら」と小さく首を傾けて言ったが、私はそんなことはありませんと否定した。

その、驚きのあまり返答ができなかっただけです。まさかお嬢様がそんな風に思ってくれていたなんて、思いもよらないではないか。

「い、いえ。……その、嬉しい、です」

小さく言った私。お嬢様はにこりと笑った。

私も一人っ子だから、兄弟姉妹が欲しかった気持ちは少なからずあった。それに、さつき父の話をしているときに思っていた——もし姉妹がいたとしたら、こんな感覚なのかな、と。だから、照れくさくてしようがなかったのである。

「わたくしも嬉しいですわ。……クレア、と呼んでもいいかしら」

「は、はい。是非……」

「ふふ。——ではクレア。改めてよろしくお願ひしますわ」

どきり、と心臓ごと身体が跳ねるような感覚がした。それはとびつきの眩しい笑顔だった。初めて会ったときとは違う、特別な笑顔。

ああ、そうかと、私は理解した。何故、オルコット家の皆がこの方に尽くそうとしているのか。チェルシーが私を何故あのように叱つたのか。オルコット家の一員であるという誇りとは何か。

『お嬢様のこの笑顔を護りたい』——オルコット家の人々、そして恐らく父も、その想いと共に、お嬢様に仕えてきたのではないだろうか、と。

「あの、お嬢様」

「何かしら」

「ありがとうございます」

今の仕事をさせてもらえなことへなのか、親愛の情に対してなのか、それは分からなかったが、無性に感謝したい気持ちになった。お嬢様は「はい」と一言、笑顔で言った。

気恥ずかしくなって、誤魔化すようにお酒を煽って、グラスが空になった。ちようどお嬢様のお酒もなくなっていたので、マスター、と呼ぼうとしたら、マスターがすぐ近くに現れた。

「そろそろ空くことかと思つてな」

「相変わらず気が利きますのね」

「どうも。ま、それがバーテンの嗜みつてモンだしな」

なるほど、私のお嬢様と二人で話せるようにどこか行つてたのね。何よ、カッコいい真似するじゃん、マスター。

お嬢様が来る前に相談に乗ってもらつたりもしてたけど、この男なかなかできるなど改めて感心した。

「で、何にするよ」

「そうですね。クレア、何か選んでいただけますこと？ わたくしもあなたと同じものにいたしますわ」

お嬢様が、そう言うのなら。

「……じゃあ、マンハッタンで」

私がマスターに注文すると、マスターはあいよ、といつものように気のいい返事をしながら、グラス二つ分のカクテルを作り始めた。どうでしょうか、とお嬢様の方を見ると、お嬢様はいいですわね、と言添えてくださった。

マンハッタンは、カクテルの女王と呼ばれている。かの有名女優の出演する映画にも登場する、働く女性の夜にぴったりの一杯だ。それをこの時代を駆け抜ける高貴なる才女——セシリアお嬢様に捧ごう。

マスターから新しいグラスを受け取った私とお嬢様は、乾杯ともう一度グラスを掲げて、その至高の一杯を味わった。

——その夜は、お嬢様といろんな話をしたのを覚えている。

仕事の話や家族の話、趣味や……恋の話まで。

「ねえ、クレア。その、来週、彼がイギリスの来るのですが」

「よかったではありませんか」

「ええ、ありがとう。そ、それでわたくし、そのときは彼にめいっぱい甘えたいと思つていまして。その、クレアは殿方をその気にさせるときは、いつも何をされていますの……?」

「え、ええ……!?! 私、そんなに経験はないのですが」

「構いませんわ。わたくし、そういう経験は、彼としかしたことがありませんの。ですから、他の方がどういう営みをなさっているのか、知りたくて」

「は、はあ、そういうことなら。……その、そういうときはですね。そういう感じの雰囲気のとときに、男性のアレを、ああしまして……ごによごによ」

「え、えええっ!? そ、それくらいでいいのですか!? チェルシーは以前、そういうときはあそこまでああしてやるのです、と言つていましたのに!」

「い、行き過ぎですっ! だ、大胆すぎます!」

「……え? で、でもチェルシーは、そのようにしたと……」

「……ほ、本当ですか?」

ときにこのような話も出てきたのは、敢えて追記しないこととする。

レディー・セシリアと、使用人クレアの夜は深く更けていく。

私を姉妹と言つてくださったお嬢様のため、私も誇り高きオルコツト家の一員として、お嬢様に尽くすこと。そしてお嬢様の笑顔を、生涯を懸けてお守りすること――。

私は人知れず、誓ったのである。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

それから少し時間が経ち、オルコツト家に従事して一年と少しが経過した頃だった。いつものように、オルコツト邸で仕事をしていた私に、吉報が届いたのである。

「皆さんに、ご報告がありますの」

その日はクリスマスだった。お嬢様の誕生日の翌日の朝、食事の前

にオルコット邸にいる使用人一同をメインホールに集めたお嬢様は、横に並びたつ婚約者の手を握りながら、頬を染めて、私どもへと告げた。

「昨日、彼との入籍の許可が下りましたの。わたくし、結婚いたしません」

私を始め、オルコット家の使用人一同がわつと歓声を上げた。おめでとうございます、と祝福の言葉が飛び交った。

ありがとう、と涙ぐむお嬢様の姿に、私もいつの間にか泣いていた。泣いているのは私だけではないらしく、いろんなところからすすり泣く声が聞こえた。婚約者の彼を旦那様と呼ぶ声も上がった。まだ気が早いよと言いたげな困った彼の姿も印象的だった。

——ああそうだ、父にも報告しなければ。私は少しホールから外れて、父に電話をかけた。

私は咄嗟に思い至って、父に電話をかけた。父は入院こそしていないものの、未だにオルコット家に戻っていなかった。脚の怪我のリハビリが想像以上に大変なのだという。

「もしもし、お父さん！ メリークリスマス」

「ああ、メリークリスマス。……どうした」

「聞いてお父さん！ お嬢様、入籍が決まったのよ！」

「……そうか」

いつも通り、そうかの一言。

だが、何なんだろう、この他人事のような反応は。父なら、絶対祝福してくれるはずだと思っていたのに。

「そうかって……嬉しくないの？」

「喜ばしいことだ」

「でしょ。なら、邸に一度くらい顔出さないよ。お嬢様はずっとお父さんと会いたがってるのに」

結局、事故でお見舞いに行つて以来、お嬢様はまだ父と会えていないのだという。

執事の中の執事——バトラーと慕われる父にしては、どこかお嬢様を蔑ろにしているようにも感じてしまっていた私だが、その予感も

たっていたようで。

父は驚くべき一言でもって、私の提案を……そしてお嬢様の想いを突き撥ねたのである。

「——悪いが、もう私がお嬢様とお会いすることはない。怪我が完治し次第、辞表を出す予定だ」

お嬢様の入籍が決まった昨年、クリスマスからニューイヤーにかけてオルコット家では祝賀ムード一色であった。お嬢様と旦那様のお二人が、どれだけ多くの障害や偏見、国家間の利害に苦しめられてきたかを目の当たりにしてきたオルコット家の使用人たちは、そのめでたい知らせに歓喜し、涙したのであった。

それから少し時は経ち、一月。今年は旦那様まで加わつてのニューイヤーで、オルコット邸は大変賑やかであった。新年の節目が過ぎ、ついに旦那様が一時日本に帰国することとなつてしまった今日、愛しの旦那様と離れてしまった寂しさのあまり、お嬢様は――。

「ううう……クレアくチエルシ……ぐすつ」

「はいはい、寂しいですね」

「わたくし嫌ですわ、また離れ離れなんてえ……」

カフェのテーブルに突つ伏して、日本語でひらがな「の」の字をぐるぐると描き続けるお嬢様。精神年齢が十歳は落ちているように見える。

現在、空港に旦那様を見送りに行ったその帰り道。旦那様が出発ゲートの荷物検査を通るその直前まで旦那様の腕をとつて片時も離さず、ゲートを潜つた旦那様の姿が見えなくなつて飛行機が飛び立つなり、お嬢様はみるみると意気消沈。帰り道、異常なまでに元気がないお嬢様を見かねて、チエルシーが車を止めて近くのカフェで一休憩することになつたのであった。

「会いたい……」

「お嬢様、そのようなことでは職務に支障をきたします」

「ううう、だつてえ」

チエルシーの諫言に対しても、駄々っ子のよう。普段の凜々しいお姿はどこへやら、お嬢様は蒼い瞳に涙をいっばいに溜めてぐずつていた。

これはオルコット家で働き始めてからわかつたことなのだが、お嬢様は旦那様が絡むとかなりポンコツな一面が見せるのだ。チエル

シー曰く、旦那様が帰国されてすぐは毎回こうなるこのことで、言っ
てしまえば毎回のことではあるのだが、今回は特にひどいという。
それだけ離れたくなかったのでしょう。微笑ましくはあるのだが、
如何せんセシリアお嬢様の立場がそれを許してはくれない。

先月の二四日のお誕生日以降、お嬢様は終始幸せそうであつた。今
が幸せでたまらないとばかりに、旦那様と過ごせる日々を心から楽し
んでいたように見えた。その反動であろうか、入籍と結婚式の根回し
のために一度日本に帰国しなければならぬ旦那様との別離は、特別
悲しいのでしよう。

チエルシーと目を見合わせてどうしたものかと考えていた私だつ
たが、救世主は突然訪れた。お嬢様の携帯電話のバイブレーションが
小さく鳴ると、お嬢様は目にも留まらぬ速さでそれを手に取つた。画
面を見た途端、お嬢様の目尻から涙が引つ込み、にへらつと表情が緩
んだ。

「うふ、うふふふ」

「どうしたんです？」

私が尋ねると、お嬢様は携帯の画面を嬉々と私とチエルシーに見せ
た。そこには、先ほど飛行機に乗り込んだ旦那様からのメッセージ
が。

日本語で書かれていたため私には読めないのだが、お嬢様が翻訳し
てくれた。

「見送りありがとう。二週間世話になった。日本でやらないといけ
ないこと片付けて、今度は夫としてセシリアのところへ帰るから、
待っていてくれ……ですつて〜！」

きやーとじたばたとテーブルの下で脚をばたつかせるお嬢様。か
わいい。

これもオルコット家で働き始めてわかったことだが、普段は仕事が
できるキャリアウーマンというイメージのお嬢様であるが、旦那様の
前だとただの恋する乙女になってしまうのだった。二十代の大人の
レディというか、恋で頭がいっぱいの十代の少女のような。まあ、お
嬢様のファンでもある私にとってはそのギャップも悪いものではな

く、むしろお嬢様の新しい一面を知れてラッキーといったところが。

お嬢様はテーブルに乗せた紅茶を飲み干すと、次の仕事へ向けてぐつと拳を突き出した。

「こうしていられませんわ！ 彼との結婚式のためにも、もつとお仕事を頑張りませんと！」

旦那様のメッセージひとつで先ほどまでの弱った様子はどこへやら、メラメラとやる気を燃やすお嬢様。

お嬢様、もしかしてチョロい……？

チエルシーはくすくすと笑っていた。ちなみにあとで教えてもらったのだが、実はチエルシーが旦那様の出発前に、フライトが始まってから少ししたらお嬢様に一報入れるよう頼んでいたらしい。

なるほど、流石チエルシー、お嬢様の扱いにかけては彼女の右に出る者はいない。

「さあ、チエルシー、クレア。帰りますわよ」

「はい、お嬢様」

席を立つお嬢様に倣い、私とチエルシーも立ち上がってお嬢様に追従した。

これからはお嬢様と旦那様の結婚式の準備もしなければならなし、一層多忙になることが予想される。気が引き締まる思いだったが、私は年末の父の言葉が、ずっと頭の中で燻ぶっていたのだった。

☆ ☆ ☆ ☆

年末のことだ。久しぶりに実家に帰った私は、帰宅一番に父に抗議した。

「お父さんー！」

退院した父は、ソファで新聞を読んでいた。剣幕激しく実家に怒鳴りこんだ私に、キッチンで紅茶を淹れていた母もぎよつと振り返った。

「何だ」

「何だじゃないわよ！　どうということ、オルコット家に戻らないって！」

仮にも一人暮らしの娘が実家に戻ったというのに、父は普段と何ひとつ変わらない様子でルーティンである新聞とのにらめっこをしていた。

事の発端はお嬢様の入籍が決まったとき、父と交わした電話であった。怪我で療養中の父――「バトラー」と呼ばれるオーウェン・フラウシートの衝撃的な言葉だった。

あれだけの尊敬を集める使用人でありながら、このタイミングで辞表とかどういう神経してんの、と私は父に憤慨していた。母が「クレアやめなさい」と静止するも、父の心ない発言に怒り心頭の私は聞く耳を持たなかった。

「どうしたもこうしたもない。これは決まったことだ」

「決まったことって何よ！　お嬢様の付き従うのが私たちの仕事じゃないの!？」

新聞で顔を隠していた父は、私の問いかけに静かに「違う」と否定した。何が違うと言うのか。

「私は現当主セシリア様の使用人ではないからだ。私はオルコット家に仕えてはいるが、それは先代当主に対する忠誠であって、セシリア様に対するそれではない」

何よ、それ。どうということ。私の疑問に、父はすぐ答えを出した。

「私は、オルコット家の使用人ではない。私は、先代オルコット家当主であったセシリア様の母君が経営されていた企業のガードマンだった」

「え……っ」

父にオルコット家で働くことを打診されたとき、私は父がどのような生きてきたかを知らずにいた。

そしてこの日、改めて私は思い知った。私は父の歩んできた人生について、まったくの無知であったということ。

父の口から語られる過去……それは私が見てきた平凡な男性の姿はなかった。

「私がオルコット家——正確には当時オルコット家の当主であったセシリア様の母君と出会ったのは、およそ三〇年も前のことだ」

裕福な家庭に生まれなかった父は、学もなく、体格と腕っぷしだけを頼りに、半ば傭兵のような稼業をしていたと語った。

……よ、傭兵つて。そんな血生臭いこと、質実剛健を地で行く父がやっていたというだけで衝撃だ。

「事実だ。生きていくために使えるものは何でも使った」

「……それって、結構ヤバイやつも？」

「合法なものから、完全に黒といえるほどのものまで、様々依頼をこなしていた」

信じられない。母の顔を見ると、母は苦笑しながらもう頷いていた。本当のことらしい。

「そんな私だが、二つ転機が訪れた。ひとつは……お前の母さんとの出会いだ」

父がそう言うと、母は気恥ずかしそうに冷蔵庫へ視線を移した。

そういえば、父と母の馴れ初めについて詳しく聞いたことはなかったわね。

「喫茶店で顔を合わせたのがきっかけだった。何気ない出会いだったが、母さんは私にとって特別な存在だった」

父はそれから、母との未来を考え始めたという。

「もうひとつの転機が……先代との出会いだった」

当時、若い身ながら既に敏腕の経営者だった先代オルコット家当主。彼女は、新たな事業の開拓を行っては実績を作る時代のパイオニアとして、大きな注目を集めていた。しかし、急速な成長は競合する他社にとって都合の良いものではなく、敵も多かったため、あるとき父が請け負っていた事業の中に、オルコット家当主への攻撃も含まれていたという。

裏稼業から足を洗うため、これを最後の依頼と父は決めていた。

「事故と見せかけた傷害を依頼する案件だった。私はその実行役として、彼女への攻撃を担当した」

だが、計画は実行途中で想定しえなかった事態に遭遇。襲撃の準備

は筒抜けになっていて、待ち伏せを受けたのだという。そして、父が参加した計画は頓挫。それどころか、実行犯であった父はターゲットの前に引きずり出されるハメになったという。

「そのとき、私は死を覚悟した。これが人を傷つけ生きてきた私に対する報いだとも。——だが『お嬢様』は私にこう言った」

——あなたの仕事ぶりは、あなたの雇い主の方々からもよく聞いているわ。その能力、わたくしの下で活かす気はなくて？

——わたくしはいずれ世界を変える。そのために、あなたは必要な存在よ。わたくしの手伝いをなさい、オーウェン・フラウシート。

「何を馬鹿なことを、と思った。自分を狙った男を、自らの手駒にしようなど、世迷言だと」

結局、今回の件は不問にする代わりに、こちらの軍門に下れという取引に過ぎないと、父は思ったという。ただ、結局父は先代の専任ガードマンとして働き始めた。初は父も先代を信用していなかったが、先代が持つ才覚と器に徐々に惚れ込み、何より父の実直さや仕事ぶりを誰よりも信頼してくれていたことで、父は彼女に仕える覚悟を決めた。

そして、裏稼業から足を洗ったことで、父は母と結婚し、そして私が生まれ——平凡だが幸せな人生を手に入れることができた、と父は語った。

「先代は私の恩人であり、雇い主だった。その先代が亡くなったのが、今から一〇年ほど前——……忘れもしない、あの日からだ」

穏やかだった父の表情に陰が落ちた。

見たことがない表情だった。悔いるような、こみ上げる何かをこらえるような、父には珍しい表情だった。

「先代から私宛てに遺言があった。忘れ形見であるセシリア様のことを一〇年間守ってほしいと」

その遺言に従った父は、オルコット家の執事として、お嬢様の下で働き始めたという。

お嬢様とは先代を通して顔見知りではあったものの、邸宅でお世話をし始めたのは先代が亡くなって以降。表向きオルコット家の執事

として働きながらも、実態としては亡き先代の会社に所属しながら出向という扱いになっているというのが、父が明かした父とオルコツト家との関係だった。

「先代が亡くなつて一〇年は過ぎた。だが、私個人のけじめとしてお嬢様にパートナーができ、お嬢様の結婚が決まるまでと定めていたのだ。そして此度無事お嬢様の結婚が決まり、オルコツト家から離れることを決めた。怪我のこともある、これが節目だと判断した」

それが父の口から語られた、オルコツト家から離れる理由であった。

「なによ、それ……！」

一通り聞いた私だったが、まるで納得はできなかつた。

淡泊すぎる、あまりにも！

「なによ、それ！ 先代の遺言なんて、そんなのただの建前じゃない。お父さんが望めば、オルコツト家の人間として改めてお嬢様の下で働くことだつてできるでしょう！ だつて、私をオルコツト家に仕えるよう勧めたのはお父さんよ！」

父の邸の人たちに信頼されてなかつたら、そんな口利きはできないはず。その父が推薦したからこそ、あの日私はお嬢様と邂逅を果たすことができた。

何よりも、お嬢様が父を心から慕っているのは、誰から見ても明らかだつた。お嬢様だつて、これからも邸にいてくれることを望んでいるに違いないのに。

「それなのに、お嬢様の下から離れるなんて！ お嬢様のために働くのが、私たちの仕事なんじゃ——！」

「——黙れ」

凄んだ父の一言で、びくりと私は口を閉じた。そこには有無を言わせぬ迫力があつた。

「たかだか一年と少しお嬢様に仕えただけのお前に何がわかる。わざわざお前に言われずとも、考え続けた結果がこれだ」

父からは本気の怒りが伝わってきた。父がここまで感情を露わにすることは滅多になかつただけに、私も面食らつてしまつていた。

ただ、その怒りには、少なからず焦りの色も見えていたような気がした。本心を突かれて見られまいとする、普段の父からは考えられない、詰めの甘さが。

数秒無言でいたものの、父はすつといつものような雰囲気に戻ると、私から視線を新聞に移して、

「……話は終わりだ」

「ちよ、ちよつと！ お父さん、待ってよ」

「終わりだと言っただろう。話すことはもう何もない」

そう言つて父は、新聞とのにらめっこを再開したのだった。

少し離れたキッチンから見守っていた母の方を見ると、母は苦笑するだけで、私の加勢をしてくれるわけではなさそうだった。

あの人は決めたら頑固だから、と母の目が語っていた。母はそれをよくわかっていて、父の意思を尊重することを決めているようだった。

結局、孤立無援となった私は、父のオルコット家離脱の決意を曲げることができず、年末年始の帰省では、終始気まぐれな雰囲気が私たち家族三人を包んでいた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

旦那様を見送ったその夜。バー「Gloria」にて。

もやもやした気分だったので、仕事終わりに寮からここに繰り出した私は、カウンターに肘をつき、前でグラスを磨くマスターに愚痴っていた。

「ねえー、どうしたらいいのかな」

「何がだよ」

「前来たとき話したでしょ、あのカタブツ頑固不器用融通効かない男の話よ」

「ああ、お前の親父さんの話な」

そうよ、とぐびつとグラスを煽ると、グラスが空になった。

父に真意を問い質し、オルコット家へ連れ戻す。そう意気込んで実

家へ帰省したものの、私は目的を果たすことはできず。

父の決意は固く、私一人の説得程度で揺らぐことはなかった。結局父の決意を変えることも、説得を諦めることもできないまま、中途半端に燻ったままの思いが、いつも胸に突つかえていた。

たかだか一年と少しお嬢様にお仕えしただけのお前になんか何かわかる、と父は言った。事実だと思う。私は新入りなのは間違いないことであるし、経験もスキルも人望も、オルコット家に対する理解も、父には遠く及ばないだろう。何より、それだけ尊敬を集め、責任感ある執事である父が辞めると口にしたのだから、その覚悟の重さは推し量ってしかるべきではないか。

父が無責任な人間でないことは、娘である私自身肌で感じて育ってきた。その父があれだけ言ったのだ、私が理解してやれずどうすると、父の娘としての私が言っている。

「お父さんがあんなに言うなんて珍しいからさ。それくらい考えて決めたことなんだろうなってのは、私にもわかるわけ」

「ならお前、親父さんの言う通りにさせてやったらいいじゃねえか」
「そういうわけにもいかないのよ」

あ、スクリユードライブーちようだい、とマスターに注文した。キツめにしといて、と常連っぽくリクエストしたら、マスターはあいよ、いつものように返事をしてカクテルを作り始めた。

「スクリユードライブー。お待たせ」
程なくカクテルが届いて、私はありがと、と一言呟いて受け取り、一口つける。

……つくー、きつつ。でもこのガツンと来るアルコールの重さがたまらない。

「……お嬢様はさ、お父さんに帰ってきて欲しいって思ってるの」

父が邸から離れている間も、しきりに父の様子について私に尋ねてきたお嬢様。私が両親と綿密に連絡をとっているわけではないために、毎度あまりいい報告はできていないけれど、お嬢様が父の容態を常に心配してくれていたことは、聞くまでもないことだ。

そのお嬢様が、父の辞表を受け取ったとき、どんな顔をするのかと

思うと、私はとてもつらい。

「きつと悲しむだろうなって思うのよ。だってお嬢様、お父さんに結婚式の父親役を頼みたいって口にしてるくらいなんだから」

「まあ、な」

お嬢様がこれから歩むであろう幸せな日々には、父というピースが欠けてしまつて、お嬢様のあの笑顔に曇りが残つてしまつたら。

もしそうなつたら、私は必ず後悔する。お嬢様の笑顔を守りたいと思つて、私はオルコツト家にいるのに。

「でもさ、ちよつとお父さんも変なのよね。なんかこう、敢えてお嬢様から距離を置こうとしてるっていうか」

父が剣幕を荒げたあのとき、微かに感じたもの。父が入院中お嬢様が見舞いに来て以降お嬢様と会おうとしないのも、どこか務めて別れのきつかけを作ろうとしているようで。

父が本気でお嬢様から離れたいわげがないのに。仕事の義務感だけで、先代の遺言というだけで、お嬢様にあそこまで慕われるだろうとは、到底思えなかつた。

結局、父は私に建前しか話さなかつたのだろう。父が本当に何を思つてそう決めたのかは、私は聞き出せずにいる。

聞きたい。父が本当はどう思っているのか。しかし、あれだけ派手に喧嘩しておいて、今更冷静に父と話すなんて、土台な無理であろうということも分かつていた。

「……ねえ、どうしたらいいと思う?」

すぐるような私の言葉にも、マスターは「さあな」とにべもなく言つてのけた。

こういうとき、マスターは聞き役に徹している。マスターはまるで水のようにだ。あくまで私を大事な客として扱つてくれて、自分の意思はほとんど表に出さない。彼に言わせるなら「バーテンのたしなみ」というやつだろうか。

私は常連として何度も通っているわけだけでも、それはこの包み込むような安心感が気に入っているから。お酒の酔いも相まつて、どんなよりした気分の悪さは、少し和らいだ。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

それから、ひと月が過ぎた。

「はあ」

私は大きなため息をつく。休憩中、使用人用の休憩スペースのテーブルに突っ伏していた。

父はあれからも連絡を寄こさないまま。怪我の完治はしていないため辞表こそ提出していないものの、これからお嬢様の結婚式の準備が本格化すれば、父のことで悩んでいる時間すらなくなってくる。

「どうしたらいいのかなあ……」

リストラされて無職になって、父が命の危険に晒されるような事故に遭って、それから父のコネでオルコツト家に務めて一年と少し。やっとやりがいを感じられる仕事に就けたのに、生涯尽くしたいと思えるような人と出会えたのに、私は未だ前に進めずにいる。

途方に暮れるって、こういうことなのかな。何かしたくても、何もできないままって、こんなに苦しいのね。

「どうしたんだ、ため息ついて」

「は、はいっ!?!」

後ろから声をかけられて、振り向いた。

そこには、お嬢様の婚約者である旦那様がいた。

「だ、旦那様!?!」

「ご苦労様。名前は、クリアで合ってたかな」

「はいっ! はいー!」

驚きのあまり二回頷いてしまった。恥ずかしい。いや、でもまさかこんな場所で旦那様に話かけられるとは思わないでしょうよ。

旦那様は一週間ほど前、日本での仕事を一部片付けてまた英国に戻られていた。結婚式の準備もあり、最近旦那様は暇があれば英国日本を反復横跳びのように移動しているらしく、時差ボケがひどいと度々ボヤいているのを耳にする。

そんな旦那様が、何故使用人用の休憩スペースわざわざ来たの

か。それについて尋ねる前に、旦那様が休憩スペースの奥にある給仕室を指し示した。

「今日は気が向いたから食事係になってみたんだ」

ああ、なるほど。旦那様は非常に料理がお上手だ。初めて旦那様がオルコット邸にいらしたとき、夕食を作ると言って旦那様が料理を始めてしまったのだが、客人に炊事係をさせるわけにはいかない、と邸の者が止めに入ったのも構わず、旦那様は驚くべき手際で邸の料理人が目を見張るほどの料理を振る舞ったという。もはや使用人の間では語り草の伝説となっているのであるが、かく言う私も旦那様のお料理を堪能させていただいた身である。大変美味であった。

と、まあこのように大変お料理上手な旦那様は、頻繁に息抜きと称して邸のキッチンに立つては、その技巧で邸の料理人たちを唸らせていた。

「それよりどうしたんだ、浮かない顔をして」

「い、いえっ！ な、何でもございせん！」

「何でもない人が、そんな顔するとは思わないけどな」

旦那様が苦笑した。チエルシーに何か意地悪でもされたのか、と旦那様が言ったので、私は慌てて首を振った。

「ちよつと煮込み終わるまでの時間暇なんだけど、話してみないか」
セシリアにだつて話せないこともあるだろうし、と旦那様がそう言つて向かいの椅子に座った。

……これは、逃げられそうもない。

ただ、父のことをそのまま聞くのは憚られたため、私は以前から気になつていたことを旦那様に尋ねようと決めた。

「失礼を承知で、お聞きしたいことがあります」

私がそう前置きしたところ、旦那様は快く頷いてくださった。

「旦那様は、お嬢様と別れようと思つたことがありますか」

ずっと気になつていたことだった。旦那様とお嬢様は、使用人の私から見ても本当にお似合いで、お互いを尊敬し、想い合う理想のカップルだった。

数々の試練を乗り越えてきた、とお嬢様は度々話しておられた。そ

の中に、破局の危機はあったのだろうか、と。

私はないと思っていた。他の恋敵が現れたり、結婚するにあたっての障害こそあれ、お二人が関係を諦めるようなことはないだろうと。

「——ある、一度だけ」

だからこそ、旦那様の返答は、驚くべきもので。

本当ですか、と問い直すと、旦那様は事実だと答えた。

「セシリアのために、俺が別れを選ぼうとした。俺とセシリアの関係は世界に祝福されなかったんだ。お互いの立場が立場だから」

旦那様が当時のIS絡みの利権関係について説明してくれた。

IS操縦者同士の男女関係は、国家間の利害関係に大きな影響を与えかねない。増してや高い実力を持つお嬢様と、男性IS操縦者として世界の注目の的であった旦那様、お二人の関係ともなれば、その複雑さは想像に難くない。

旦那様の存在を巡って事件が起これば、必ずお嬢様も巻き込まれる。旦那様が傍にいたばかりに、お嬢様の誇りある人生に傷がつく……そして何より、お嬢様の命を危険に晒すようなことがあれば、自分のことを許せなくなる——旦那様はそう語った。

「だから俺は、セシリアと別れることを選んだ」

私は息を飲んだ。

世界の秩序のため、お嬢様との関係を諦めようとしたと言った旦那様。旦那様は、それで良かったのだろうか。自分が愛した女性の手を取ることを諦めて、他の誰かと結ばれたとして、未練はなかったのだろうか。

「未練がなかったと言えば嘘になる。でも、俺は何よりもセシリアに幸せに生きてほしいと願ってたんだ。俺と離れることが、彼女の誇りを、幸せを守ることになるならばと、そう信じて」

旦那様は自嘲するように言った。

にわかには信じ難い話だった。旦那様とお嬢様のお二人が、一度別れを経験していたとは。

しかし、お二人は現に良好な関係のまま結婚を約束に至っており、お二人がどこかでよりを戻すタイミングがあったのは間違いな

いのだが。

そのあと何があったかは、すぐに旦那様の口から語られた。

「でもセシリアは違った。セシリアは俺と一緒に生きる未来を諦めなかった」

お嬢様は、距離を置こうとする旦那様に対して追いつくことを諦めなかったという。やがてが別離が決定的になるその瞬間でさえ、お嬢様は旦那様のことを諦めなかった。

そして、ついに旦那様と再び相見えたお嬢様は、なおも離れようとする旦那様にこう言った。

——わたくしはあなたの意思は尊重しませんわ！ あなたと一緒にいたいから！

それから、こうも言ったという。

『わたくしが愛したあなたこそ、わたくしの誇りなのだから』ってな「あなたこそ、わたくしの誇り……」

とてもお嬢様らしい言葉だと思った。大きく、深く、輝かしい。

「そう。……感動したさ。こんなことを言ってくれる人が、こんなにも俺のことを愛してくれていたんだと、俺は気づいてなかったんだ」その後、根負けした旦那様はお嬢様から本気の張り手を一発もらい、お嬢様の傍へ戻ることになった。

そしてお嬢様には、一晩中泣かれたという。わたくしを愛しているなら、わたくしから離れたりしないで、と。それを思い出した旦那様は、

「打たれた頬があまりにも痛くて、涙が止まらなかったな」

と冗談めかしく言った。

私はくすりと笑った。きっと泣くくらい嬉しかったんだろうな、旦那様は。

「俺は見誤っていたんだ。セシリアを守ろうと、セシリアに嘘をついては、悲しませてきた。離れることで、関わないことで、彼女を守れると。でも、セシリアと再び向き合って、俺は気づかされたんだ」

旦那様は続けた。

「セシリアは俺に思い出させてくれた。初めて彼女に想いを伝えたと

き……セシリアと一緒にいたいと思ったときのことを。そして俺は改めて誓った。俺こそが己の誇りであると言ってくれたセシリアのために、強くなろうと。セシリアにもう二度とあんな思いをさせないために、彼女と人生を共に歩める男になろうと」

それがあつて今の俺がある、と旦那様は言った。

壮絶なあまり、何も言えなかった。お嬢様と旦那様が大恋愛の末に婚約に至ったとは聞いていたが、まさか破局の危機があつたことなんて想像もつかなかつたから。

ただ、納得もできた。旦那様がお嬢様を大切に思っているのも、そんな過去があつたからなんだ。

「人が人と同じ時間を過ごすことに、障害は付きものらしい。それは立場だったり、職業だったり、国籍だったり、あるいは経済状況だったりもするかもしれない。そんなとき、敢えて別れを選ぶことが愛だと言う人もいるだろうし、それが間違っているとは思わない。だけど、一緒にいたいという想いを、我儘を貫くこともまた愛だと、俺は思う」

その我儘なお願いのおかげで、俺はセシリアと生きる未来を掴めたから、と旦那様はそう締めくくった。

神妙な顔をして黙り込む私に、長居して悪かったな、と旦那様は微笑んでキッチンへと向かった。私が慌てて立ち上がってありがとうごさいました、と言うと、旦那様は軽く手を振ってキッチンの奥へと戻って行った。

……そういう仕草、キザだなあ、本当に。それが様になるんだから、イケメンはズルい。お嬢様はそういうところも好きなんて言ってたけど、旦那様にベタ惚れのお嬢様だからそれはそうよね。

「一緒にいたいという想いを貫く、か」

旦那様のお話を聞いて、もやが晴れたような気分だった。今の悩みに対してどうすべきか、それが明確になったような気がする。

私の実父にして、お嬢様が父と慕うオーウエン・フラウシート。

あれだけ仕事ぶりを評価され、バトラーと呼ばれるほどに使用人一同から慕われていた父が、お嬢様の元を離れる決断をしたのは、何が

故なのだろうか。

先代オルコット家当主の遺言が故、と父は言った。だが、それは父の真意なのだろうか。父にお嬢様を愛する気持ちはなかったのだろうか。もしそうだとするならば、何故お嬢様は父をああまで慕ってくれているのだろうか。

バトラーのような父がいて私が羨ましいとお嬢様は仰った。あのお嬢様に慕われる父が、本当に義務感だけでお嬢様に仕えていたのだろうか。

「そんなはずない、私はわかってる」

お嬢様と話した私が肌で感じた父の有り様は、愛がなければ到底できるものではない。私がひっそりと、それでも確かな愛を注いで父に育ててもらったように、それと同じ愛をお嬢様が感じていたからこそ、父を通して、私とお嬢様は姉妹のような間柄で在ることができんじゃないか。

——さあ、答えは出た。こうしてはいられない。

私は使用人の休憩室から立ち上がり、お嬢様のいる執務室へと向かった。

お嬢様の執務室へと着いた私はノックをして、お嬢様のはい、という返答が聞こえたのち、「クレアです、入ってもよろしいでしょうか」とお声かけした。

よろしくつてよ、とお嬢様が返事なされたので、失礼しますとドアを押して入室した。

「あら、クレア。どうしましたの？」

まだ休憩時間のはずでしょう、とお嬢様に言われたが、休憩時間よりも私にはどうしても聞きたいことがあった。

「お嬢様。結婚式の父親役を私の父にお願いしたいという意味に、お変わりはありませんか」

私が尋ねると、お嬢様はええ、と答えた。

「勿論ですわ。ヴァージンロードでエスコートしていただく父親役は彼以外考えられませんもの」

お嬢様は笑顔を見せた。

……ああ、そうだった。私はこの笑顔を守りたくて、お嬢様に仕えることを決めたんだ。それが、私の原点。だから――。

「お嬢様」

「何かしら」

「それにあたって、ひとつ、お願いがあります」

それから少し経ってのことだ。くだんの件で年末ゴタゴタしたこ
とへの謝りの電話を実家に入れた私は、その分の埋め合わせとして家
族水入らずのお出かけを提案した。

お嬢様からお休みをもらい、実家へ帰った私は、ロンドン中心街へ
とお買い物に出かけた。父は足の怪我もあり杖を携帯していたので、
あまり遠出はしない。

化粧やら服やらで外出するときにはしつかり着飾る私と母と違い、
父はいつものようにくたびれたトラウザーと地味なアウターで外に
出ようとしていた。いかにも無頓着極まりといった風体だ。

「何か問題でもあるのか？」

繁華街に出るというのになんだその格好は、正気かこの男。くらり
と目眩がする思いだったが、見かねた母に、

「レディ二人とお出かけたのにそんな格好で良いわけないでしょ！」
というお説教を受け、母がクローゼットの奥からそれなりにオシャレ
なアイテムを引きずり出し、面倒くさがる父に無理やり着せたこと
で事なきを得た。

なお余談であるが、その際「レディが二人？」と余計なことを口走
りかけた父を、母がそれ以上口にしたらどうなるか的な無言の圧で黙
らせていたのを追記しておく。長年連れ添った夫婦のコミュニケーション
ションに余計な言葉はいらない、そしてどれだけ歳をとってもデリカ
シーのない男には天罰が下る。いつか私に旦那ができたらしつかり
教えこんでおこう。

「あ、お母さんここ知ってる？ このジェラート前テレビで紹介され
てたよ」

「見たわよお、職場の人と行きたいって話してたのよ。お父さん、食べ
たい？」

「……コーヒーでいい」

「まーたそうやってもう、一緒に食べようってんだから食べなつて。
ほら選んで！」

馴染みの街を歩く父と母と娘、一家三人。こうして三人で過ごすのは久しぶりな気がした。

基本的に私と母が適当に喋って、時たま父に話題を振ったら、父が適当な相槌を打って話が終わる。そんなくだらない平凡な家族の関係性こそ、父と母が私を真つ当に愛し育ててくれた結果なのであろう。私は結局父と母の娘で、それは生涯変わらない。変えることのできない、私という人間を形作る大事なピース。喧嘩したくらいではそう壊れはしない、家族の深い絆を感じた私は、変わらない安心感と、今からすることへの罪悪感を抱えながら、繁華街を歩いていった。

目的の場所が近づいてきたとき不意に、母が「トイレに行くわね」と気を利かせて席を外した。今しかない、と私は確信した。

「——ねえ、お父さん」

私は前を歩く父の手を取った。

「なんだ」

……ああ、いつもの返事だ。無愛想だけど、やっぱり安心する。

ごめん、お父さん。お父さんなりに思いがあつて、覚悟があつて、お嬢様の下を離れる決断をしたつてこと、わかってるよ。たかだか一年ちよつとお嬢様の下で働いた新米の私に何がわかるつて、それも正論だと思う。

でも、私は。お父さんの娘だけど、オルコット家の使用人でもあるから。だから——。

「今から私と一緒に来て欲しいんだけど」

「どこへだ？」

「下見に行きたいのよ」

「何のだ？」

「それはあとでお楽しみ」

私と目を合わせた父は無言。

多分、私かどこかへ誘導しようとしているのはバレているだろう。元々裏稼業してた人なんだから、こんなド素人の見え透いた嘘っばち、見抜けないわけがない。

でも多分、私が娘だから、お父さんは私を信じてくれて、こう言っ

たのだろう。

「いいだろう」

父は頷いてくれた。私はありがと、と一言返し、道案内をするために、父の前を歩いた。

……ごめんね、お父さん。

☆ ☆ ☆ ☆

私が父を案内したのは、ロンドン市内にある教会。歴史はそれほど長くないが、立地から景色の良さや、シンプルながら格式あるデザインが観光スポットとしてそれなりの人気を博している理由だという。堂の扉を開けると、無人。まあ、当たり前なんだけどね、そうなるように仕組んだの、私だし。

そもそも何故ここに来たのか。小さい頃自分が通っていたわけでもなかったのだが、その理由は――。

「ここ、今度お嬢様が結婚式を挙げる場所なの。私もチエルシーと一緒に準備するから、その下見がしたかったのよね」

協会の入り口に立った私は、父に語りかける。父は何も言わなかった。

これは嘘ではない。実際私が設営に携わって仕事をするわけだし、下見しておいて損はない。

「お嬢様ね、毎日幸せそうなの。旦那様と結婚できるのが本当に嬉しいって、結婚式が楽しみでしようがないって、そんな感じ。結婚式の場所を決めるって段階になって、ここでもないここでもないってお嬢様が悩みながら、やっと決まった場所が、ここなの」

私の説明にも、父は何も言わなかった。

「段取りも、めんどくさくてさ。自分なりにやってるんだけど、失敗ばかりで全然上手くいかなくてね、チエルシーも忙しいし、こういうときお父さんがいてくれたらって、よく思うのよね。だから――」

父の方へ向き直った私は、すぐ近くにあるあの方の気配を感じて、父に決意表明をした。

「私は、自分の信念を曲げない。私はお嬢様の笑顔を守りたい。その誓いを貫き通すために、私はお父さんの決断を踏みにじる」

「クレア……?」

父にその言葉の意味はまだ伝わっていないようだったが、じきにわかる。

そう言っ、私は。

「私からは以上よ。……お待たせいたしました、お嬢様」

私の陰からさっと現れたのは、金髪を揺らす美貌の淑女にして、我が主セシリア・オルコット。

冬の黒いコート姿のお嬢様は、父の姿を見て柔らかく微笑んだ。

「ごきげんよう。お久しぶりですわね、バトラー。怪我の容態はいかがかしら?」

「お、お嬢様……!?!」

父は目を丸くした。そして私を見て目で訴えている。

ハメたな、と。よりにもよってお嬢様と引き合わせたのかと。

……うん、ごめん。だから謝ったでしょう、心の中でだけど。

「あのさ、お父さん。お父さんがお父さんなりに悩んだ結果がそうだって、分かってる。でも、私は納得できない。だから、お父さんがどんな結論を出すにしても、お嬢様とちゃんと話し合ってからにして欲しいの」

「そうですね。仮にも主人であるわたくしに事情も話さず、オルコット家を去ろうとするなど、あなたらしくありませんもの」

お嬢様は不満げに言った。お嬢様も父に避けられていたのは感じていたらしい。

突然の展開にしばし動揺していた父が、諦めたように項垂れたのを見て、お嬢様は父の傍まで歩くと、教会の席に腰掛けるよう勧めた。お嬢様が腰を下ろしたのを見て、父も小さく失礼しますと口にしてお嬢様の隣へ腰掛けた。

……さて、これにて私はお役御免。二人の対談をセッティングするまでが私のミッション。あとは二人に気のゆくまで話してもらおうだけだ。

そつと席を外そうとした私を、父が待て、と引き止めた。

「これから話すことを、お前も聞くべきだ。オルコツト家の使用人として」

それでもよろしいですか、と父がお嬢様に尋ねると、お嬢様も構いませんわと快諾してくださった。

そういうことなら、同席させていただこう。まあ、私から特に口に挟むことはないだろうが、父が引き止めたということは、私にとつても大事な話に違いない。

私は席を外すのではなく、少し離れたところに控えて、二人を見守ることにした。

ただ、見守る。ここから先父がどのような結論を出そうとも、私は自分の決断を後悔することはないだろう。

数瞬の沈黙が教会を包んだのち、父は少し震えながら、言葉を紡ぎ始めた。

「お嬢様、まずは……お嬢様への数々の御無礼を謝罪させていただきたい。申し訳ございません」

「本当ですわ。事故に遭つたと聞いて、心配したのですから。経過の報告も滅多に来ませんし、生真面目なあなたには珍しいとは思いましたけれど。きちんと報告くらいなさい、肩代わりをしているチエルシーのこと、忘れたとは言わせませんわよ」

金輪際このようなことは許しませんわ、と叱るように言つたお嬢様。金輪際許さないということは、裏を返せば、父にはこれからもオルコツト家にいろと言つているようなもの。

父はそれを聞いて、そうとはいきません、と返した。

「今回の件もそうですが、それ以上に……私には、オルコツト家にいる資格はないのです」

「——資格？」

ぴくりと、お嬢様が反応した。それは琴線に触れる言葉だったらしい。

眉を釣り上げたお嬢様は、語気を強めて、自分の二回り以上は体格

のある大男に言つてのけた。

「資格ですつて？ そんなもの、わたくしがあなた方に求めたことがありますか？ 仮にその資格があると仰るのであれば、今すぐにでもわたくしが与えて差し上げますわ。何を理由に、そんな……」

「——違うのです」

お嬢様の言葉を遮った、どこか後悔を滲ませた父の声。

私は、と父は苦しげに続けた。

「私は……あなたの二両親を、守ることができなかった……！」

父は絞り出すように言った。途方もなく悔しげに、膝に乗せた拳を震わせて。

お嬢様ははっとしたように、しかしすぐに父を宥めるように「それは」と口にしかけたが、父はまたしてもお嬢様の言葉を遮った。

「いえ、お嬢様。原因がどうあれ、私とってはそれが真実なのです。これから話すのは、とある愚か者についてでございます。世界でただ一人、一生を捧げて仕えると誓った御方を守ることができなかった、非力な男の話でございます」

父がそれからお嬢様に語ったのは、先代オルコット家当主、セシリアお嬢様のお母様についてだった。

出会った経緯やそのあたりのことについては、私が年末年始実家で父と大喧嘩した際に聞いたものほとんど同じだったが、父はそこから先代と歩んできた人生について語り始めた。

「お嬢様は、大変に才能溢れる御方でありました」

ここで父が言う「お嬢様」とは、セシリアお嬢様のことではない。セシリア様の母君のことである。

父は先代のことを、生前お嬢様と呼んでいたようだった。父と先代が二人が出会った頃、先代もまだ若く結婚もしていない頃だったからだろう。

「高貴な生まれでありながら、同時に器の大きい方でございました。人を生まれなどで判断せず、私のような無法者であっても、信頼してお傍に置いてくださったのです」

父がそう言うと、お嬢様がよく存じていますわと続いた。

「お母様の行くところにはいつもあなたがいましたものね」

「お嬢様の送り迎えの際に、よくセシリア様と顔を合わせたのを覚えております。ちょうど娘が同じくらしいの年齢だったのもあり、娘と同じように成長するセシリア様のお姿が、目に浮かぶようです。セシリア様は、お嬢様によく似ておられます。幼い頃のお嬢様がいればこのようなお姿だったのだらうと思うほどに」

昔を思い出しているのか、二人は懐かしむように言った。

父の人格や仕事ぶりが先代に大きく評価されていたのは間違いない。でなければ側近として身近に置くこともないだろうし、遺言でセシリアお嬢様の後見を頼んだりはしないだろう。

「お嬢様は強い御方でした。激動の時代にあつて、その才は一際異質で突き抜けておりました。反面敵も多く、一歩間違えば身を滅ぼされかねないような、危うい立場にあつたのです」

「お母様……」

母を呼ぶお嬢様の眉が下がった。先代の人柄について、私はまったく知らないため根拠はないが、お嬢様にも思い当たる節があるのかもしれない。

なるほど、故に父のような裏の世界に詳しい人間が起用されていたわけだ。父はまさに、時代を駆ける才女たる先代オルコット家当主の騎士ナイトとも言うべき存在であつたということだ。

経緯はともあれ、自分が持った力を、誰かを守るために使う——そのきつかけを先代からもらった父は、先代に大きな恩義と尊敬を覚えるようになったという。

「当時恋人であつた今の妻との結婚の際も、他でもないお嬢様が誰よりも祝福してくださいましたのです。彼女を幸せになさいと、私の背を押してくださいました。そんな大恩人でもあるお嬢様を、私は生涯の主と定め、一生を賭けてお仕えすることを決めたのです」

「バトラー……。でも、お母様は……」

お嬢様が悲しげに言う。

ああ、そうだ。その後の先代の身に何か起こったのかは、今この現実が物語る通りだ。

「はい、その通りでございます。お嬢様は、あの痛ましい事件で亡くなられ、私は……守るべき主を亡くしたのです」

ぽつりと父は言った。

大規模な列車事故。それに巻き込まれ、先代とその夫は、揃って帰らぬ人となった。多くの人命が失われた痛ましい事故であったが、事件当時は事故と報道されていた一方で、テロ組織による要人を狙った計画的な犯行であるとの説も唱えられていた。今では公式発表こそないものの、国民の間ではテロ事件であるとの認識がほぼ一般化していた。

先代の言動からしても、どうやらその予兆を父は感じていたという。そして先代は近いうちに自分が命を落とすかもしれないしれないことを予期しており、もし自分の身に何かあったときのため、セシリアお嬢様の身に危険が振りかからぬよう、権利関係の根回しや身辺整理を頻繁に行っていたらしい。

「勿論、私はそのようなことにならぬようと、全力で警護にあたっております。ですがあの日、お嬢様は旦那様とお二人で出かけると言って警護もつけず、行ってくると一言仰ったのを最後に……お嬢様は、帰ってこられませんでした」

セシリアお嬢様を遺して、逝ってしまった。と父が言ったときも、お嬢様は無言だった。お嬢様が何を思っておられるのか、私には分からない。

「私は途方に暮れておりました。命を賭けて守りたかったはずの主を見殺しにしてしまい、生きる理由の半分を失ったのです」

「そんな、見殺しだなんて」

「似たようなものです。私はお嬢様を守るという義務も誓いも、果たすことができず、唯一残された遺言に従ってお嬢様のお世話を決めるときも、半ば罪滅ぼしのような心境でありました」

両親を失って傷心のセシリアお嬢様と、どう向き合っているのか、わからなかったという父。

そんなとき、家に帰ると平凡に、平和に成長する私の姿を見て、家族のためにも生きなければならぬと憔悴しきった己を奮い立たせ

ると同時に、ふと考えたという。

セシリアお嬢様の母親の代わりにはなれずとも、父親の代わりのような存在になることができれば、上手く向き合えるのではないかと。

だが、それは結果的には杞憂に終わった。父がそのような悩んでいる間に、お嬢様はいち早く両親を失ったショックから立ち直り、自ら家の名を上げて矢面に立ち、先代が築き上げた名声と富を守ったのである。

「立派でした。一番お辛いはずのセシリアお嬢様が、家の誰よりも早く立ち直り、自らやオルコツト家の財産を狙う薄汚い大人たちと戦われていたのですから」

必死に涙を隠し、誰よりも努力を重ねていたお嬢様。やがてお嬢様はISの適性検査で高数値を叩き出し、国家代表候補生としてIS学園への一步を踏み出したのだが、その一方で父は。

「またしても私は、何もできなかったのです。セシリア様を支えることもできず、ただ見守るばかりでございました。それよりも何よりも、私は……！」

父は唇を噛み締め、ぶるぶると震え始めた。

「私は、私は本当は恐れておりました……！ セシリア様から、何故お母様とお父様を守ってくれなかったのかと、責め詰られることが……！」

そして、と父は言った。

「私が望んだように、娘が人並みに成長していく姿を見る度に、お嬢様の忘れ形見の、あの花のように笑っていたセシリア様から、笑顔を奪ってしまった己が情けなく、そして許せなかった……！」

感情が抑えきれないとばかりに、父は震えながら告白した。

ここまで感情的な父は初めて見る。一〇年余り抱え込んでいたものが、堰を切って溢れ出てくるようだった。

両親の死というショックから自ら立ち上がり、努力に努力を重ねて家と両親の財産を守り抜いたお嬢様は、その代償として、年相応の少女らしい心と笑顔を失ってしまった。それを父は、ずっと悔いていたという。

やがてお嬢様はIS学園という新天地で、生涯の伴侶となる恋人とたくさん友人を得て、その失った笑顔や心を取り戻すのだが、そこにも結局父の力はなかった。

「セシリア様の旦那様には、大きな感謝をしております。私が守れなかったものを、彼は取り戻してくださいました。日本から帰ってこられたときのお嬢様が嬉しそうにお笑いになるのを見て、私は胸が透く思いでした」

そうか、父はずっとこうして、己を悔いながらお嬢様に仕え続けてきたのか。知らなかった父の真意を理解した私は、ずっと真剣な表情で無言を貫くお嬢様を見ていた。

お嬢様は、何を思うのだろう。父と慕っていた男の懺悔を聞いて、何を父に言うのだろう。

「私は、バトラーと呼ばれるような人間ではないのです。此度の事故に遭った瞬間、私はついにその報いが来たのかと思いました。ついに、己の所業を精算できる日が来たのかと。妻と娘を遺して逝くことも忘れるほどに」

……そっか、お父さん、そんな風に思ってたんだね。

「今にして思えば、大変に愚かな思いでした。そんな思いを抱えてこの世を去るなど、妻と娘に対して、何と謝罪すればよいか。目覚めて妻と娘が泣き崩れたのを見て、私は心の底から安堵しました。道を違えずに済んだこと、愛する家族と再び会える喜びを、心から感じたのです」

父の独白には、小さくない怒りを覚えた私だったが、父がそれを省みているのならば、と飲み込むことにした。

事故にはあったものの、父は間一髪命を取りとめた。命こそ助かったものの、瀕死の重傷を負った父は、以前と同じように働くことはできない。亡き先代当主の遺言が定めた期間も過ぎ、またセシリアお嬢様は旦那様というパートナーを得て、人間としても女性としても一段と成長した。

怪我の後遺症もあって、もはやもう自分にできることは何もない、と身を引くことを考えたのが、父の真意だった。

なるほど、それからたまたま私が無職になったタイミングが重なり、その埋め合わせのように、私をオルコツト家へと送り出したのが、私が父に勧められたきっかけだったというわけだ。

「お嬢様。どうか、この愚か者があなたの下を去ること、お許しください。もはや盾にもなれぬこのような有様では、お嬢様のお仕えすることなど、できないのです」

父は懇願するようにそう言った。頭を垂れ判決を待つ被告人のような風体の父オーウエンは、俯いたまま。十年来溜まりに溜まっていたわだかまりを吐き出し、憑き物が落ちたようにも見える。

お嬢様は、まだ何も言わない。父のこの話を聞いてどう感じたかについての答えは、お嬢様の中にしかない。

もはや私の意思はこの場において何の意味もなさない。今この場においては、お嬢様の意思こそが、すべてを決定し得る。

「——ふ、ふふふっ」

沈黙を破ったのは、お嬢様が我慢しきれないとばかりに吹き出す声だった。

「バ、バトラー。あなた、本当に堅物ですね、うふふふ」

「お、お嬢様……?」

「生前お母様が仰っていた通りですわ。ドがつく生真面目で堅物だと、お母様に言われていたの、あなたはご存知でないでしょう」

ああ、可笑しいとお嬢様はひとしきり笑って、目じりの涙を拭うと、表を上げなさない、と俯きがちな父の顔を上げさせた。

「あなたがとびきり堅物で真面目で優しい人だと、わたくしもお母様もよく知っていますよ。先ほどあなたが話してくれたことを聞いて、気負う必要のないことまで何倍も背負ってきたことがよくわかりましたわ。重く、苦しく、辛かったことでしょう」

お嬢様は父の方へとそつと寄ると、強ばって膝に置いたままの父の大きな拳に、白い手の平を重ね合わせた。

「——わたくしを守れないことが、怖い?」

父がびくりとした。それを見たお嬢様がそうなのね、と微笑んだ。先代のように、セシリアお嬢様を守ることができずに先立たれたと

すれば、そのときの父は悲しみと無力感は察するに余りある。

お嬢様は、父の不安を見透かしたように、心配は無用ですわ、と言った。

「今のわたくしには、自分の身を守るだけの力と、頼りになる仲間たちの力がある。わたくしは一人ではなくってよ」

お嬢様は凜として言った。

今や、お嬢様はISの操縦者として世界でも指折りの実力者だ。軟弱者に国の重責を担う人間が務まるものですか、とはお嬢様の弁だが、お嬢様の伴侶たる旦那様も同様にISを扱う人間の一人。そして旦那様もまた、世界にその名を轟かせる実力者である。

トラウマとも言うべき父の後悔も理解できるが、今や私たちオルコット家の人間は、お嬢様と旦那様が築き上げた比類なき実力と名声によって守られていると言っても過言ではなかった。

「でも、そんなあなただから、きつとお母様は信頼しておられたのね。遺書でわたくしのことを頼んだのだって、あなたが私のために尽くしてくれろと信じてのことでしょう」

「で、ですがお嬢様。私は……!」

「何もしていないって? そんなことはありませんわ。いつもわたくしのこと見守ってくれていたあなたの存在に、わたくしがどれほど救われていたか、ご存知?」

遠くに車で移動するときはいつも傍にいてくれたこと、重い荷物は必ず持ってくれたこと、歳も体格も上の大人と見合わなければならないうときすぐ後ろに立って見守ってくれていたこと……目に見えていたこと以外にも、執務室の掃除や整理を人知れずやっていたこと、疲れてデスクの上で眠ってしまったときに人知れず毛布をかけてくれていたこと、そして母のために尽くしてくれたこと……お嬢様は父がしていたこと、そのひとつひとつを挙げていく。

お嬢様は、父のさりげない優しさのひとつひとつを知っていて、そして感謝している、と言った。

「父親の代わりになろうと思ってくれたのでしょうか? その通りですわ、わたくしにとつては、あなたがもう一人のお父様でしたもの。

ちやんとわたくしのこと、支えてくれていましたわ」

「お嬢様……いいえ、私は、私は……！」

首を振って否定する父を、しつこく肯定するお嬢様。父は震えながらおやめ下さい、と懇願したが、お嬢様は笑顔のまま、残酷なまでに父を肯定する。

「違うのです！ 私は、何も、何も……！」

「いいえ。先ほども言いましたでしょう？ あなたがいてくれたことが、わたくしの宝物なのですわ」

違います、いいえ、と何度も同じやり取りを繰り返すそんな二人を見て、私はつい笑ってしまった。

やめときなって、お父さん。お嬢様に敵うわけないんだから。お嬢様はさ、お父さんのそういうドがつくくらい生真面目なところも、不器用な優しさを何年も見て慕ってくれてるんだから、何を言ったって無駄よ。

大体、そうやって言われるようにしてきたの、お父さん自身なんだから。自分が積み上げてきた信頼と人望に負けてたんじや世話はない。

「もういいでしょう、バトラー。ずっと過去を悔いるのはおやめなさい。お母様たちのことで、あなたに感謝する気持ちこそあれ、責める気持ちなんて、わたくしにはこれっぽっちもないのよ」

だから、とお嬢様は言った。

「いい加減自分を許してあげて。わたくしを救ってくれた優しきで、これ以上傷つかないで」

お嬢様が穏やかに言うと、父は目を赤らめた。

お嬢様はすっかり皺の入った父の頬を撫でると、その表情を綻ばせた。

「バトラー、あなたはわたくしのために必要な存在ですわ。怪我をして、今までのようにはいなくなっても、あなたにして欲しいことはまだまだまだたくさんありますのよ」

「お、お嬢様……」

「ずっとお母様に尽くしてくれて、ありがとう。わたくしを、クレア

を、育ててくれてありがとう。どうかこれからも、わたくしの傍にいて、見守っていてくださいな」

「あ、あああつ……い」

亡き先代と似た、お嬢様のその言葉がトリガーになったのだろうか。父は崩れ落ちるように、跪いて涙を流し始めた。

お嬢様は父を抱きしめると、その耳元に優しく囁いた。

「バトラー。あなたこそ、わたくしの誇り。大丈夫、今度はわたくしの番ですわ。あなたがわたくしを守ってくれたように、今度はわたくしがあなたを守りたいの……あなたという、誇りを」

「お嬢様……い……お嬢、様……い」

父は恐る恐るお嬢様の体を抱きしめると、亡き先代を偲ぶように、大きな体を震わせて一人泣いて。お嬢様は、そんな大男の決壊した感情を受け止めるように、ゆっくりと父の背を撫でていた。

いろんな人のことを虜にしてしまうお嬢様の笑顔。その笑顔は大輪の花が咲くようで、私が一生を捧げたいと思ったほどに魅力的なだけけれど、その笑顔に花を重ねるとき、私はふと思いつくのだ。

花が綺麗に咲くのは、蕾になるまでじっくり育てていたからだということ。お嬢様という花を咲かせたのが旦那様なら、その蕾に水を、光を与えていたのは誰か——……それはきつと、父を始めとするオルコット家の人々に違いないと、私は思うのだ。

「なーんだ。最初っからこうすれば、全部丸く納まってたんじゃない」
私は笑った。

そう、私なんかがどうこうする必要はなかったんだ。オルコット家でお父さんのことを一番見ていたのは、お嬢様なんだし。簡単すぎたついでに出しちゃったじゃないの。

でも、なんかいいな、お父さんとお嬢様。私にしか分からないお父さんとの思い出があるように、きつと「バトラー」にしか分からないもの、「バトラー」だけが積み上げてきたお嬢様との時間があって、お嬢様への理解は私のそれとは比べ物にならない。お嬢様も、私の知らなかった父の姿を知っていて……お嬢様と比べたら、「バトラー」としての父に対しての理解なんて全然及ばない。

なんて言うのかな、妬けちゃうよね。お父さんとお嬢様、両方にさ。……ま、これで私は本当にお役御免だろう。あとは執事とお嬢様、主従水入らずって言うのかな、そういう時間にしてあげよう。積もる話だつてあるに違いない。

私は嬉しくて口角が上がるのを自覚しながら、二人に気づかれないうように、そつと教会を後にした。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

その夜。バー「Gloria」にて。

「……つてなわけで、お父さんのわだかまりも解消、お父さんは無事オルコット家に戻り、お嬢様の結婚式の父親役をしてくれるようになったつてわけよ」

「ほーん、嬉しそうじゃねーの」

「そりやそーよ。最高の結果になったんだもの」

毎度の如くマスターに適当に用意してもらったおつまみをつつきながら、私は今回の事の顛末をドヤ顔でマスターに自慢していた。

教会での一件のあと、お嬢様から直接お電話があり、父がオルコット家に戻る決断をしたこと、また父がお嬢様の結婚式で父親役を務めることを伝えていただいた。お嬢様は父と二人で食事に行くとのこと、邪魔者の私は一人バーにて祝杯を上げているのだった。

どこか安らぎを感じるバーの店内で、グラスには極上のカクテル。それをこれ見よがしに転がしながら絶品のおつまみを肴に回す自慢話、これが気持ちよくないわけがない。

「結局私はさ、何も特別ななんかじゃないのよ」

これはわざわざ言うほどのことではないのかもしれないけれど、私はどこまで行っても平凡な女だ。主であるセシリア・オルコットは勿論、父親であるオーウェン・フラウシートが、特別な人間と言って差し支えない人物であったとしてもだ。

容姿も、学歴も、平凡の域を出ない。でもそれは必ずしも悲観することではない、と私は思う。

人の生まれや才能がそれぞれ違うように、幸せの尺度だってそれぞれ違う。私にとっては、父と母が与えてくれたこの平凡な人生こそ、幸せへと続く道なのだと、そう思ったのである。

……まあ、お嬢様にお仕えしてる時点で結構特別なのかなとは思いますが。でも、結局私はオルコット家のいち使用人に過ぎない。いつかお嬢様にあなたがいて良かったと言っていただけのように、私も頑張らねばならないだろう。

アルコールが回るのを感じながらグラスを眺めていたら、マスターがニヤニヤしながら言った。

「楽しそうだな、仕事」

「うん、充実してる。やりがいもあって、目標もできたし」

いつか父のようにお嬢様を支えられる人間になりたいと思った。口下手で、愛想がない父だが、静かな優しさと確かな仕事ぶりで信頼と尊敬を集める父は、いつの間にか私の目標になっていた。

ただ、仕事の充実ぶりはさておき、少しだけ気になっていることもあって。

「……お嬢様と旦那様、本当にお似合いよね」

「そりゃあな。あれは天下無敵の二人よ」

「お嬢様から旦那様の惚気話はたくさん聞いてるけど、旦那様も同じくらい、お嬢様のことを大切にしているって分かったし。ああいう二人を見ると、憧れちゃうわよね」

あーあ、どっかにいい男いないかな、とかボヤクアラサー間近の女を、マスターはどう思っただろう。

お酒おいしー、とか言ってたらしいの間にかグラスが空だった。まあまあペースが早いのだ、そこそこ酔っている自覚はあるのだが、私に自重する気は更々なかった。これは美味しいお酒が悪いのであって、私のせいではない。

「マスター空いちやったく、次よろしく」

「あいよ」

マスターがシェイカーを振っている間、適当におつまみのスモークウインナーをこれ好きなのよとか言いながらつまんでいると、マス

ターがため息をつきながら「俺もそろそろ腹くくるか」なんて小声で呟いていた。

なんのことだろうと思っていたときだ、マスターがはいよ、と差し出してきたグラスに入っていたのは、見慣れないピンク色のカクテルだった。これ何、と聞く前に、マスターが説明してくれた。

『『ピンクレディ』だよ。……いつも美しく、という言葉が込められているカクテルだ』

——え？ な、何て？

「これを、いつも美しいあなたに。俺からのプレゼントだ」

マスターが改まって、私を見つめて言った。

おちやらけた雰囲気ではない。今までの飄々としていたマスターからは想像もつかなくらい、真摯で熱が入っている。

……ねえ、こ、これって、もしかして口説かれてる？ 私。

そう認識した瞬間、顔の熱がぐんぐんと上昇したのを自覚した。

「い、いつも美しいって、そんな……！」

「最初は、普通の客だった。でも、段々お前がいい女だって気づいちゃった。特にお嬢のところまで働き始めてからのお前は、俺から見ても輝いてた。いつかウチに来るお前を、待っちゃってる俺がいた。バーテン失格だよ。だから、俺はお前をもう、ただの客にはしておけないのさ」

よ、よくそんな歯の浮く台詞言えるわね。恥ずかしくて私、頬に当たった手が動かないんだけど。

「……ふ、ふーん。そっか、なるほどなるほど」

いい女ぶって強がってみるけど、私の心臓の鼓動は全然収まってくれなくて。

そんな私を、マスターが見てくつくつ笑った。

「ほんで、レディ。お返事は？」

「……えーっと」

まあ、なんだ。やぶさかではないのかもしれない。マスターをいざそういう対象として見るとなると、いろいろ考えないといけないんだけどさ。

「私、マスターを一番にしてあげられないと思う。私には、大事にした
いものがある」

「分かっている。お嬢のことだろう？」

私は頷いた。

「でも、それはお互い様だ。俺もこの店を切り盛りしてかなきやいけ
ねえ。だから、何を捨ててもお前を取るなんてことは、きっとできね
え」

マスターは隠すことなく言った。

そうだよ。マスターにとって、このお店を守ることが生きがいな
んだ。私がお嬢様に一生を捧げたいと思っっているように。

お前が一番大事だと言われるよりも、正直にそう言ってくれる方が
私にとっては嬉しい。

「俺は一生お前の二番でいい。でも、お前の男っていうそのポジショ
ンだけは、他の男に渡すにや惜しいんだ」

マスターはもう一度、差し出したグラスをころんと回した。

「ふーん」

そんなマスターの口説き文句に気分が良くなった私は、差し出され
たグラスを受け取って、一口味わった。

……見た目の可愛さの通り、まあまあ甘い。でも、とびつきり甘い
味わいより、私っぽい。

「……別に言葉なんか、要らないよね」

「ああ。それで充分だよ」

マスターがにっこ笑ったのを見て、私もニヤツと笑った。

ちよつと私にしては、カツコつけすぎたのかもしれないけれど。こ
のお洒落なバーでする会話としては、満点をあげてもいいのかもしれない、と私は一人自画自賛した。

その日のバー「Gloria」の夜は、ちよつとだけ甘い香りがす
る夜だったのを、私は覚えている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ときは移ろい、過ぎてゆく。

お嬢様の結婚式は滞りなく執り行われ、私と父を始め、オルコット家使用人は一同揃って参列した。ついでにマスターも私と新郎新婦の関係者つてことでしれつと参列した。お嬢様のウエディングドレス姿はそれはもうお綺麗で。お嬢様が現れた瞬間、参列者すべての視線がお嬢様に集まってしまいうくらいに。

お嬢様の願い通り、父はお嬢様の父親役として、ヴァージンロードを共に歩んだ。なお、父はお嬢様のウエディングドレス姿を見たとき、そして披露宴にて使用人一同に向けてお嬢様がメッセージを読んでくださったときの計二度、感極まって泣いていたのを追記しておく。まあ、メッセージのときは私もすっかり泣いたけどさ。

お嬢様の結婚式が終わり、その次の年にはお嬢様と旦那様との間に記念すべき第一子となる長女が誕生する。結婚される前もされてからも、お嬢様はずつと子供が欲しいと仰っていたので、私も自分のことのように嬉しかった。そして何といつても旦那様のデレっぷりは半端ではなく、愛娘に文字通り骨抜きにされてしまった旦那様は、お嬢様が呆れるほどの下級の親バカと化してしまい、度々お嬢様やチエルシー、果ては私にまで苦言を呈される始末であった。

そして、もうひとつの個人的な大ニュースと言えば、私とマスターが結婚することになった。理由は、なんと私の妊娠であった。

いやもう、本当に。私らしいというか、行き当たりばったりと言われても仕方がないのであるが、そんなつもりがなかったと言えば嘘になるし、結婚するならこの人かなとは思っていた。お互いに仕事を頑張りたい時期を少し越えて、自分の人生について考え直していた時期だったのもある。そして何より、そのときちょうどオルコット家ご夫妻に長女が生まれたタイミングだったのが大きかった。幸せいっばいなお二人の姿を間近で見ていることもあつて、子供つていいよねとか彼と何となく話していて結果的にそうなったとだけ記しておく。

とにもかくにも、それが決め手になって私も身を固める覚悟を決め、結婚ということに相成った。妻として、母としても先輩になったお嬢様にありがたい助言をいただきながら、マスター改め旦那と二人

三脚せつせと結婚式の準備を進めて、なんとか私の悪阻もほどほどに落ち着いた頃、結婚式を挙げる事ができた。私や旦那の家族は勿論、お嬢様や旦那様を始めオルコット家でお世話になった方々、さらにはバーの馴染みの客まで参列してもらい、大変賑やかな式であった。ちなみに、私のウェディングドレス姿を見たときと、途中私から両親へ手紙を読んだときの計二回、父が泣いたことを追記しておく。

息子が生まれ、母になった私。結局旦那は店を切り盛りし、私はお嬢様のお世話を辞める気もなかったため、息子は私について自然とオルコット家にいる時間が多くなっていった。それが理由であろうか、息子はお嬢様（現当主セシリア様の長女）と親交を深め、なんとオルコット家の一員として働きたいと言い出したのである。

息子がどの程度本気が測りかねていた私と旦那だったが、家族会議にて彼が本気であることは十分に伝わってきたので、それから息子は執事見習いとして、祖父である父バトラーに付いてあれこれとオルコット家で仕事を教えてもらいながら働き始めた。結果、父、私、息子と、三世代に渡ってオルコット家のお嬢様にお仕えしていることになり、血は逆らえないと言うか何と言うか。

まあ、今思えばこれがきつかけだったのだろう。本当に運命とは思議なもので。成長してからもオルコット家の執事として働いていた息子が、いつの間にかお嬢様と主従を越えて恋仲になっていて、そこからさらに何年か経って、二人が結婚するという話が持ち上がったときには、私はもう五十代だった。

それから息子夫婦の結婚式が行われたことは、記憶に新しい。自分が親になって、息子が一人の夫として家庭を築いていくことの感慨深さは、何とも言えなかった。立派に育った息子の姿を見る度、自分と同じように愛を注いで息子を育ててくれたオルコット家の方々への感謝が募る思いだった。ちなみに、孫にして愛弟子でもある息子と、未来のオルコット家を担うお嬢様の結婚式には感動を禁じ得なかった父は、二人の晴れ姿を見る度泣いていた。何なら新婦の父親である旦那様が霞みかねないくらい泣いていた。歳取って涙脆くなったの

はわかるけど、泣きすぎなのよね、お父さん。

オルコット家が大きな祝福に包まれていた、それから少し経ってのことだった。父オーウェンが八十歳を越えた頃、大病を患ったのは。この歳でもいつものように仕事に励んでいた父は、同じように仕事をしていた息子の目の前で倒れたのだという。

緊急手術が行われ、とにかく一命は取り留めた父であったが、その病は老衰した父には重すぎるものだった。入院が決まり、病状の説明を私と母が受けた時には、もはや余命いくばくもないとの宣告を受けてしまったほどに。

余命数ヶ月。父との別れが刻一刻と迫る中、残された父との時間その一分一秒も無駄にしたいくないと、少しの期間お嬢様にお暇をいただき、母と二人で、父に寄り添っていた。息子夫婦もよく顔を出してくれて、その度父は穏やかに笑った。

その頃、いつだったか父にふと聞いたことがある。父にとって、オルコット家とはどういう存在なのか、と。何の気になしに聞いた私だったが、父の返答は存外しつかりしたものだった。

『共に在るもの』……だろうか』

「ふーん。共にあるねえ。家族、つてこと?」

「そうとも言えるかもしれん。私には上手く言葉にできない」

そのとき、あまりにも漠然としたその言葉の意味は要領を得なかった。家族として一緒に生きるという意味かと、曖昧に受け止めていた私だったが、その言葉に含まれていた本当の意味を理解したのは一〇年ほどあと……父が亡くなってからのことだった。

余命宣告から数ヶ月。もう少しだけ生きていたいと願った父は、宣告を越えてなお呼吸をし続け、我々に元気な姿を見せ続けていた。

そんな父の容態が急に急変したのは夜のことだった。夫と息子夫婦、セシリア様と旦那様、その他近縁者に連絡し、父の最期が近いことを伝えた。

憔悴しきった父の蒼白な顔を見つめ、涙を堪える一同の均衡を破つたのは、私や母ではなく……父にとって孫であり愛弟子にあたる私の

息子だった。公私共に祖父の背中を見て成長してきた彼にとって、師と仰ぐ偉大な祖父の命の灯火が消えかかっている姿は、格別辛いに違いなかった。

「じいちゃん……」とボロボロと大粒の涙を零す彼に共鳴するように、彼の妻であるオルコット家現当主も、泣き始めた。

「じいちゃん！ なあ、じいちゃんってば！」

「いや、いやよ爺や！ お願い！」

二人の泣く姿に堪えられなかった私も、お父さんと呼びかけた。涙で声が濁る。セシリア様も必死に父を呼んだ。

「お父さん……！」

「バトラー！ 返事をなさい、バトラー！」

そんな私たちの呼びかけに応えなかったのであろうか、父の意識レベルが一瞬戻り、弱々しいながらも目を開けた。

「あなた!? 私よ、わかる!？」

泣き顔の母は父の手を握った。私もそこに手を重ねた。父は蚊の鳴くような声でああ、と答えた。

最期の力を振り絞るかのように、私たちをぼんやりとその視界に収めた父は、囁くように言葉を紡ぎ始めた。

「――誇りに、満ちた……一生だった」

思い思いに言葉を投げかけていた一同がしんと押し黙った。誰もが父の最期の言葉を聴き逃すまいと、耳を傾けていた。

「大きな、感謝を……妻、娘夫婦、孫夫婦……愛する家族たち……そして、敬愛すべき、セシリア様と、その御家族……あなた方に見守られて逝ける、こんな幸せなことはない……」

か細く、しかしひとつずつゆっくりと、父の言葉は紡がれた。

「私が愛し、尊敬してやまぬ、オルコット家の方々よ……どうか笑顔で、お過ごしください……」

八十余年の人生の、その大半を捧げたオルコット家の人々への言葉。

セシリア様と、旦那様、ご当主様に、その弟君。それぞれが父の言葉を胸に刻みこんで、大きく頷いた。

「嗚呼、やっと、お嬢様の下へ逝ける……」

消えるような父の声。握っていた父の手から、生命が失せていくのを感じ、私と母は泣き崩れ——それが父の最期の言葉であった。

程なく父の葬式が行われ、オルコット家は大きな悲しみに包まれた。父の他界を私と同じくらい泣き悲しみ、偲ぶセシリア様を見て、私を姉妹のような存在であると言うと言ってくださったセシリア様に対する敬意を一際深め、より一層尽くすことを亡き父に誓った私であった。

オルコット家を支え続けた偉大なる執事として、バトラーと呼ばれ尊敬を集めたオーウエン・フラウシート。その生涯をオルコット家に捧げ、命尽きる最期のときまで執事の中の執事であった父の墓標には、「バトラー」の敬称が刻まれた——。

それからまたときは過ぎ、移ろいでいった。

父に献身的に寄り添い続けた母は、父が亡くなってから三年後、父を追うようにひっそりと逝った。父と母だけでなく、オルコット家で共に働いてきた年配の使用人が亡くなったり、ときには親しい友人を失い、たくさんの別れを経験した。

しかし、それらの悲しい別れの分だけ、幸せな出逢いがあった。そのかけがえない出逢いのひとつが、この少女であった。

「クーレア〜」

「あらあらお嬢様。どうしましたの」

その少女は私にととつと駆け寄ると、とあるノートの一冊を持ってきた。

「これ！ おばあさまの部屋にあったの！ 読んでくださいいな！」

それは、『セシリア・ダイアリー』と銘打たれたものであり、今や先代オルコット家当主としての余生を送る私の主が書いた日記であった。日付はちょうど四〇年ほど前、私が主と出会った頃のものだった。

私そっくりの茶色の髪を持ち……そしてセシリア様そっくりの蒼眼を持つこの少女は、私の息子と、セシリア様の娘の間に産まれた、私

の孫だった。血の繋がった孫であるけれど、家の中ではあくまで使用人とお嬢様の間柄。何かと多忙な息子やご当主様に代わり、私は彼女のお世話をよく任されていて、それもあってか、この子は私によく懐いていた。最近の本を読み聞かせてもらうのがブームであるのか、様々な本を持つてきては、私にしよつちゆう読み聞かすようせがむのだった。

「お嬢様、これはお祖母様の大切な日記です。勝手に持ち出してはいけませんよ」

読み聞かせるのが普通の絵本であればいいのだが、如何せんこの日記は読み聞かせるようなものではないし、何より主に許可なく読んでいいものではない、と私は思っていたのであるが。

「いやー！ わたくし、これ、よみたいの！」

「はあ、困りましたねえ」

よみたいよみたい、と駄々をこねる孫娘。孫の可愛さは全世界共通なのであろうか、例に漏れず私もこの小さなお姫様には甘い部分があるのは否定できない。

公私混同を自覚しながらも、私は人さし指をひとつ立てて、内緒ですからね、と一言付け加えて結局共犯者となるのであった。

「これは、お祖母様の若い頃の日記なのです。『二月一〇日。ロンドン郊外のオルコット邸にて。天気は快晴。普段は邸の料理人たちが使う広い厨房で、うんうんと唸りながら腕を組み、わたくしは材料とにらめっこをしていた』……二月の頃みたいですよ、お祖母様がお祖父様のためにチョコレートを作っていたときのことです。『お、おかしいですわ。何故ウィスキー入りのチョコレートを作ろうとしているのに、チョコレート味のウィスキーが出来上がっているんですの……？ しかも固形。ウィスキーかどうかさえも怪しい』……あら、お祖母様は失敗してしまっただようですね」

「おばあさま、おかしつくるの、へたですよ？」

「ふふふ、そうですねえ。昔から、よくいろんなものを作られては失敗しておられます」

若い頃のセシリア様の失敗談を笑みを零しながら孫娘に語ってい

ると、昔のことを思い出すようだった。

今や店を弟子に譲り、自宅でのんびりと過ごす夫が経営するバーでセシリア様と飲み明かしたことや、些細な思い出の数々、セシリア様の日記を読みながら、思い出に浸っていた私を引き戻したのは、楽しそうに話を聞いていた孫娘だった。

「クレア、ありがとう！」

「ふふ、どういたしまして」

「えへへ、クレア、だいききですわ！」

そう言った孫娘の笑顔。

その瞬間、私はふと亡き父……今際の際に「笑顔でお過ごしください」と願った「バトラー」オーウェン・フラウシートの面影を見た。

私ははっとした。余命幾ばくもない父に尋ねた「オルコット家とは何か」という問いが思い出された。そして「共に在る」という答えの意味が突き刺さるようだった。

嗚呼、父はこういうことを言っていたのだろう。父は人生のどこかで、セシリア様の生きる姿に、父がお嬢様と呼んだ、先々代オルコット家当主の生き様を見ていたに違いない。その感覚が、父の共に在るという言葉に繋がったのではないかと。

そして私は理解した。父の生き様は、そして願いは、オルコット家と……そして、この孫娘の笑顔と「共に在る」ことを。それこそが、オルコットを支え共に在る私たちの生き様なのだ。

「きつとそうよね……お父さん」

気がつけば涙が頬を伝っていた。歳をとると感傷的になってしまっている。

「クレア、どうしたの」と呼びかける孫娘に、なんでもありませんよ、と涙を拭いて、若い頃のセシリア様そっくりの孫娘の髪を撫でた。

世界でただ一人の私の孫娘。この子が生きていく日々が、私たち使用人たちの生き様を物語る——それが父の言葉の真意なのではないか。ようやく父と同じものを見ることができた喜びと、孫娘への感謝と愛しさが、私の胸を満たした。

「——あらあんな楽しそうね、何を読んでいるのかしら？」

それもつかの間、冷や汗がどつと噴き出した。この声は間違いなく――。

「セ、セシリア様……」

「おばあさまー!」

孫娘がセシリア様へと飛びついた。セシリア様はにつこり笑って彼女の頭を撫でた。

セシリア様はオルコット家当主の座を娘に譲り、優雅に余生を過ごしていた。

「ふふ、今日も元気ですこと。何を読んでいたの?」

「おばあさまのにつきですわ! クレアが読んでくれたの!」

そう、それはよかった、とお嬢様は孫娘と戯れていたのだが、それもほどほどにクレア、と私の方を見た。はい、恐る恐る返事をした私だったが、セシリア様の返答は、

「構いません。好きなだけ読み聞かせなさい」

「よ、よろしいのですか?」

「ええ。そんなに大したものではありませんけれど、この子がこれを読んで楽しんでくれるならそれでよろしくてよ」

ね、とセシリア様が孫娘の髪を撫でた。孫娘はぎゅーともう一人の祖母へしがみついた。

「さ、ではクレアに代わってわたくしが読みましょう。自分の日記を読み聞かせるなんて、不思議な話ですけれど」

セシリア様はそう言ってソファに腰かけると、日記のページを開いて読み始めた。

『今朝起床してニュースを見ると、突飛な報道が流れていた。内容はというと、空飛ぶ海老が発見された!というもの。映像では、まるで水中にいるかのような動きで海老が空中を跳ねていた。そんな馬鹿な、とわたくしは当然思ったのですが、番組もキャスターも大真面目に報道していたから、本当にそうなのかと思い始めたところで、今日が四月一日であることに気づいた』……これはエイプリルフールのときの日記ね。空飛ぶ海老ですって、あなた想像できるかしら?」

「んつと……こわいかも」

「ふふ、そうね。きつと大きいでしょうし、怖いでしょう」

お二人のかんばせはそっくりであった。セシリア様の娘であるご当主様もよくセシリア様に似ているので、その遺伝子そのまま孫娘に継承されたのでしょう。美人親子で有名だったセシリア様とご当主様とそっくりであるなら、この子も将来美人になるに違いない、とても楽しみだ。

「——こちらあー！」

突然部屋に響き渡った怒号。びくりと孫娘が振り返ると、そこには眉を吊り上げた孫娘の母にして現オルコツト家ご当主様の姿があった。

「何してるの！　これからピアノの練習の時間でしょう！」

「お、おかあさま……」

「あなたまたそうやって習い事サボって！　先生がお待ちでしょう！」

まったくこの子ったらもう……！」

一体誰に似たのかしら、とご当主様がぶつぶつと孫娘を叱った。幼い頃、オルコツト家伝説のお転婆娘と名を馳せていたご当主様のことを考えると、さもありませんと言ったところなのだが、私とセシリア様は密かにくすくすと笑った。

それでも読みたいと駄々をこねる孫娘だったが、問答無用とばかりに孫娘が連れていかれるところを、セシリア様がゆっくり立ち上がってまあまあと宥めた。

「いいじゃない、たまには。ね？」

「ダメです。たまにはありませんから。大体、お母様はこの子に甘すぎます。クレアも！」

ご当主様は大変ご立腹のようで、私にまで飛び火して叱られる始末であった。こうなれば私とセシリア様にできることはなく、孫娘との楽しい時間はこれにて終了ということだ。

セシリア様は残念ねえ、と一言漏らして、私のすぐ傍に座った。姉妹のような間柄だと思っていた私とセシリア様は、あの子を通して本当に家族になった。感慨深い。

「あ、おかあさま。まって」

手を引かれた孫娘が、母親を止めた。

「これ、かえしてきますわ!」

そういうことなら、とご当主様が孫娘を送り出し、孫娘は私とセシリア様の元へとやってきた。

「はい! またよんでくださいな!」

孫娘はさつきまで読んでいた日記帳を私とセシリア様に差し出した。それを受け取った私は——ふと、この子の未来について思いを馳せた。

私からは髪の色を、セシリア様からは瞳の色を受け継いだ女の子。この子はきつと、両親、私やセシリア様、旦那様や夫、使用人の皆の思いや願い、果ては希望までもをその一身に受けて、育っていくのでしょうか。

人生は長く険しいもの。その道の半ばで苦しい思いや、悲しい別れもたくさん経験することでしょう。

それでも、どうか。どうか、私の願いが、この小さな女の子の力になりますように、と祈りを込めて。

「——嗚呼、お嬢様」

「なーに?」

「はい?」

「何かしら?」

孫娘とご当主様、セシリア様が同時に振り返った。そしてはっとしたように、ご当主様とセシリア様は顔を赤らめた。

「ああ、ごめんなさい。つい昔の癖で」

「あら、奇遇ですねお母様。私も少し前までそう呼ばれていたものですから、思い出しました」

ああ、そうでした。私にとって「お嬢様」は今や三人もいるのでしたね。何故母と祖母が返事をしたのか、孫娘は分かっているようにでしたが、それも仕方ないでしょう。

あなたは知らないかもしれないけれど、セシリア様も、ご当主様も、私に「お嬢様」と呼ばれていたことがあるのよ。そして、先代の先代——父がその想いを生涯守り抜いた、セシリア様のお母様もまた、父

や使用人の皆から「お嬢様」と呼ばれていたことを、私は知っている。オルコット家の女の子は、皆そうして呼ばれ、成長して、ときに呼ばれ方が変わりながら、大人になってゆく。

愛すべき「お嬢様」たち——そんな御三方へ私が願うことは、奇しくも亡き父が願ったことと同じで。

「どうか笑顔で、お過ごしください」

その言葉と共に、涙が頬を伝った。私がそう呟くと、御三方が笑った。

——私の名は、クレア・フラウシート。「お嬢様」の笑顔を守る者。ときが移ろい過ぎゆくとも、例えこの身が尽き果てようとも、この誓いが、愛するオルコット家の皆々様と共に在ることを、切に願う。

n. ノート・オブ・クレアとあるオルコット家使用人の手記　F i